静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第49集

海戸田遺跡

菊　　川　　市

平成24・25年度（主）吉田大東線社会資本整備総合交付金（県道道路改築）及び平成26年度（主）吉田大東線防災・安全交付金（県道道路改築）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１５

静岡県埋蔵文化財センター

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第49集

海戸田遺跡

菊　　川　　市

平成24・25年度（主）吉田大東線社会資本整備総合交付金（県道道路改築）及び平成26年度（主）吉田大東線防災・安全交付金（県道道路改築）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１５

静岡県埋蔵文化財センター

序

海戸田遺跡は、ＪＲ菊川駅から東北東へ３㎞程の菊川市吉沢に所在する遺跡です。吉沢地区内を通る主要地方道吉田大東線（県道79号線）が南側に迂回する改良工事が計画され、本遺跡を通過することとなったため、工事に先立ち、平成24・25年度の２か年にわたり、発掘調査を実施しました。

海戸田遺跡の所在する吉沢地区は、北東から南西に流れる菊川とその支流である沢水加川の合流地点付近であり、周辺の丘陵上には多くの遺跡が所在します。海戸田遺跡の東の丘陵上には、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡である赤谷遺跡や弥生時代後期の集落跡である祢宜屋敷遺跡があります。南の丘陵上には、縄文時代後期から晩期の集落跡である石畑遺跡があります。さらに南の牛渕の丘陵上には、平安時代後期から鎌倉時代に操業された皿山古窯跡群があります。また、菊川を挟んだ北西側の丘陵上には、中世の寺院である潮海寺に関連する遺跡が広がっています。

今回の海戸田遺跡の調査では、上層から平安時代末から鎌倉時代のものと考えられる水路や自然流路、自然流路に設けられた水位を調節し取水するための堰等を確認することができました。また下層からは、弥生時代後期や奈良時代の溝等を確認することができました。その中には、弥生時代後期の土器とともに石が多量に出土した溝もありました。

これらの成果から、本地域の古代末から中世に至る土地利用状況の一端を知ることができます。谷口に位置する沖積地であるこの一帯の土地利用を進めるにあたって、水路を構築し、自然流路から取水、各水田等へ配水していた様子がうかがわれます。また、弥生時代後期の土器が多量に出土する溝跡が確認された他、縄文土器や古墳時代から奈良時代の遺物も出土しており、周辺の遺跡の資料と合わせ、本地域周辺での人々の活動の様子を知る手懸りとなるものです。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県袋井土木事務所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2015年３月

静岡県埋蔵文化財センター所長
赤　石　達　彦

例　　言

1　本書は静岡県菊川市吉沢430-4他に所在する海戸田遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は平成24・25年度(主)吉田大東線社会資本整備総合交付金(県道道路改築)及び平成26年度(主)吉田大東線防災・安全交付金(県道道路改築)に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所の依頼を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。

3　海戸田遺跡の本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

本調査　　平成24年７月～平成25年３月　　調査対象面積　939㎡
　　平成25年７月～平成25年10月　　調査対象面積　374㎡
資料整理　平成25年11月～平成26年３月
　　平成26年７月～平成27年３月

4　調査体制は以下のとおりである。

静岡県埋蔵文化財センター

平成24年度(現地調査)

所長　勝田順也　　次長兼総務課長　八木利眞　　調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　　前田雅人　　総務係長　瀧みやこ
調査第一係長　富樫孝志　　指導主事　福島正志

平成25年度(現地調査・資料整理)

所長　勝田順也　　次長兼総務課長　南谷高久　　調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　　前田雅人　　主幹兼総務係長　大坪淳子
主幹兼調査第一係長　及川　司　　指導主事　福島正志

平成26年度(資料整理)

所長　赤石達彦　　次長兼総務課長　長谷川明子　　調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　　杉山智彦　　主幹兼総務係長　大坪淳子
主幹兼調査係長　及川　司　　主査　岩本　貴

5　本書の執筆は、第４章第２節の弥生土器部分を岩本　貴が行い、他は及川　司が行った。

6　本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7　外部委託については以下のとおりである

遺跡測量業務　　株式会社フジヤマ
掘削等業務　　(平成24年度)株式会社イビソク　　(平成25年度)国際文化財株式会社
整理作業・保存処理業務委託　　株式会社パソナ

8　出土した木製品の樹種同定は、東北大学と受託研究契約を締結し、実施した。

9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1　本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。

2　調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
（Ｘ＝－136,210.000　Ｙ＝－35,410.000）＝（１，Ａ）

3　出土遺物は３桁～４桁の通し番号（ＴＫＴ００１～ＴＫＴ１０９７）を付して取り上げた。報告書中の挿図番号とは同一でない。

4　遺構図の縮尺は、図ごとに適当な縮尺とし、それぞれにスケールを付した。遺物については、土器・木製品は1/3を原則としたが、杭については1/6とする等、適当な縮尺としたものもある。

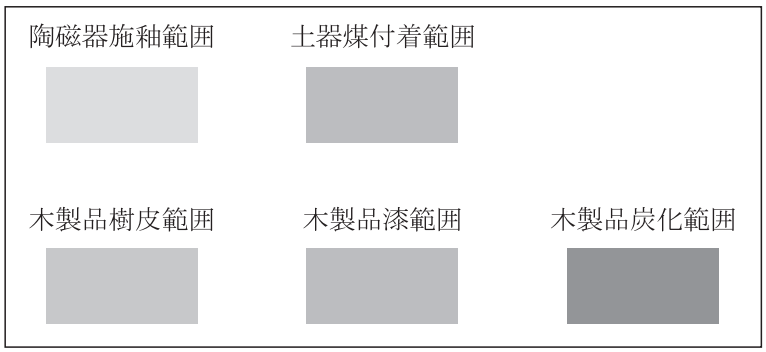
5　色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修1992）を使用した。

6　土層名は第３章第２節の基本土層図（第５図）に表示した名称を用いる。

7　第２章の周辺地形図（第２図）・周辺遺跡分布図（第３図）は、国土地理院発行１：25,000地形図「掛川・下平川・島田・相良」を複写し加工・加筆した。

8　遺構記号については、以下のように表記した。
溝状遺構…ＳＤ　　流路…ＳＲ　　小穴遺構…ＳＰ　　不明遺構…ＳＸ
遺構番号は、遺構ごとに各区通しで付している。なお、ＳＲ０１内の堰状遺構については特に遺構記号・番号は付していない。

9　出土遺物の実測図に入れたトーンは、下記の状況を表現している。



目　　次

序
例　言
凡　例
第１章　調査に至る経緯 …… 1
第２章　地理的環境・歴史的環境
第１節　地理的環境…… 2
第２節　歴史的環境…… 2
第３章　調査の方法と経過
第１節　調査の方法…… 7
第２節　基本土層…… 8
第３節　調査の経過…… 9
第４章　調査の成果
第１節　検出された遺構…… 11
1　上層の遺構…… 11
2　下層の遺構…… 22
第２節　出土遺物…… 31
1　上層の出土遺物…… 31
2　下層の出土遺物…… 53
第５章　まとめ …… 64
付　編　海戸田遺跡出土木製品の樹種について …… 69
写真図版
抄　録

挿図目次

第１章
第１図　遺跡位置図…… 1
第２章
第２図　周辺地形図…… 3
第３図　周辺遺跡分布図…… 5
第３章
第４図　グリッド配置図…… 7
第５図　基本土層図…… 8
第４章
第６図　２・３区遺構全体図……12
第７図　ＳＤ０１実測図……13
第８図　ＳＤ０２・ＳＤ０３・ＳＤ０４実測図
……14
第９図　ＳＤ０６・ＳＤ０７実測図……15
第10図　ＳＲ０１・堰状遺構実測図……16
第11図　堰状遺構実測図１……18
第12図　堰状遺構実測図２……19
第13図　１区遺構全体図（上層遺構）……20
第14図　ＳＸ０１実測図……21
第15図　ＳＤ０５実測図……23
第16図　１区・２区遺構全体図（下層遺構）
……23
第17図　ＳＤ０８実測図……24
第18図　ＳＤ１２実測図……25
第19図　ＳＤ１０実測図……26
第20図　ＳＤ１１・ＳＤ１３・ＳＸ０２・
ＳＸ０３実測図……27
第21図　１区中央部分南北土層状況図……28
第22図　１区南西部分落ち込み部分実測図
……29
第23図　ＳＸ０４焼土遺構・土器出土状況図
……30
第24図　ＳＤ０１出土遺物実測図１（土器・
銭貨）……33
第25図　ＳＤ０１出土遺物実測図２（木製品）
……35
第26図　ＳＲ０１出土遺物実測図１（土器）
……37
第27図　ＳＲ０１出土遺物実測図２（土器）
……39
第28図　ＳＲ０１出土遺物実測図３（木製品）
……43
第29図　ＳＲ０１出土遺物実測図４（木製品）
……44
第30図　ＳＲ０１出土遺物実測図５（木製品）
……45
第31図　上層包含層出土遺物実測図１（土器・
陶磁器）……47
第32図　上層包含層出土遺物実測図２（瓦・土
錘・銅製品）……49
第33図　ＳＤ１２及び下層包含層出土遺物
実測図（須恵器・土師器）……54
第34図　ＳＤ１０出土遺物実測図１（弥生土器）
……56
第35図　ＳＤ１０出土遺物実測図２（弥生土器）
……58
第36図　ＳＤ１１・ＳＸ０３・ＳＸ０４・
下層包含層出土遺物実測図（弥生
土器・縄文土器・石器）……61
第５章
第37図　海戸田遺跡周辺中世初頭期水路配置
想定図　……65

挿表目次

第２章
第１表　周辺遺跡一覧表…… 6
第３章
第２表　発掘調査工程表…… 9
第４章
第３表　小穴遺構（ＳＰ）計測表……21
第４表　ＳＤ０１出土土器・陶磁器破片数一覧表……31
第５表　ＳＤ０２・０３・０４・０６・０７出土土器・陶磁器破片数一覧表…35
第６表　ＳＲ０１出土土器・陶磁器破片数一覧表……36
第７表　上層包含層出土土器・陶磁器破片数一覧表……46
第８表　上層遺構・包含層出土遺物観察表１（土器）……50
第９表　上層遺構・包含層出土遺物観察表２（土器・陶磁器）……51
第10表　上層遺構・包含層出土遺物観察表３（土錘・瓦）……51
第11表　上層遺構・包含層出土遺物観察表４（銭貨・銅製品）……51
第12表　上層遺構・包含層出土遺物観察表５（木製品）……52
第13表　下層遺構・下層包含層出土遺物観察表１（土器）……55
第14表　下層遺構・下層包含層出土遺物観察表２（土器）……63
第15表　下層遺構・下層包含層出土遺物観察表３（石器）……63

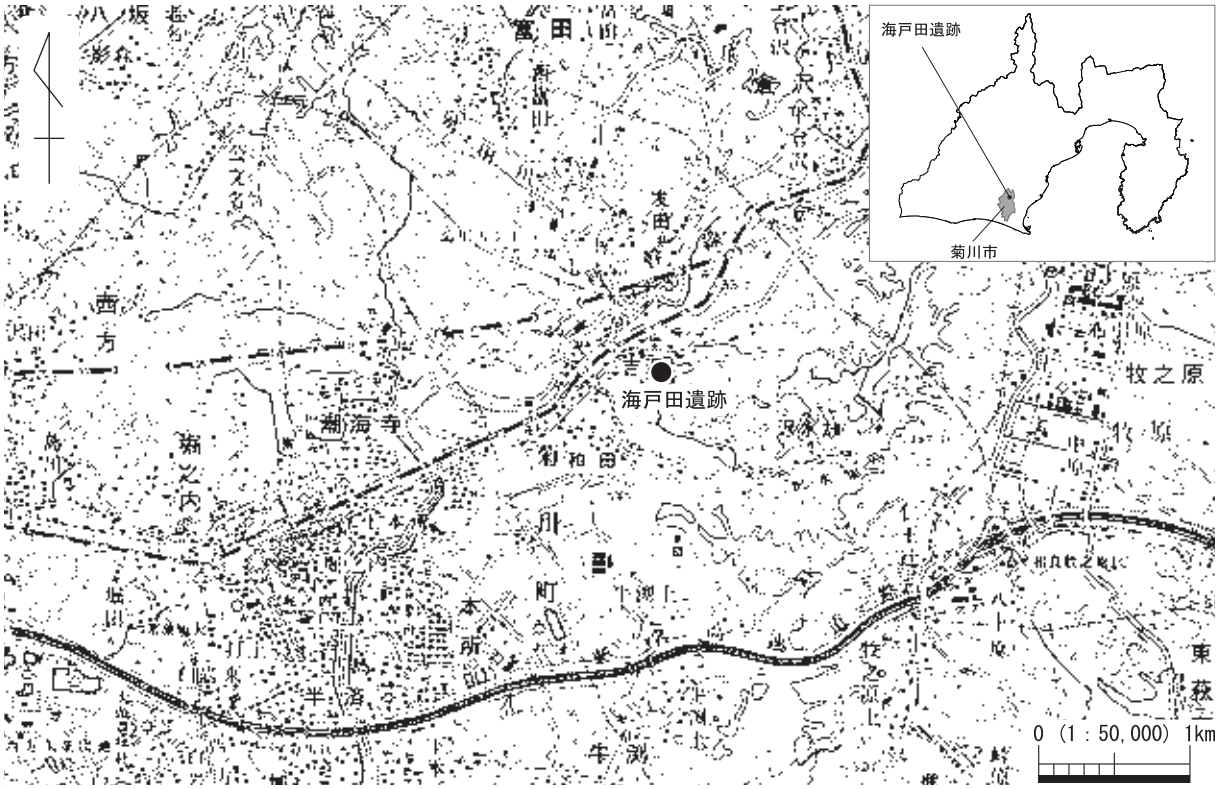
写真図版目次

図版１　（カラー）
　１　海戸田遺跡遠景（南西より）
　２　海戸田遺跡遠景（北東より）
図版２　（カラー）
　１　３区全景（南西より）
　２　３区ＳＤ０１（北東より）
図版３　（カラー）
　１　３区ＳＤ０１土層堆積状況（東より）
　２　３区完掘状況（西より）
図版４　（カラー）
　１　２区全景（西より）
　２　２区ＳＲ０１（南東より）
図版５　（カラー）
　１　２区ＳＲ０１堰状遺構（北東より）
　２　２区ＳＲ０１堰状遺構（西より）
図版６　（カラー）
　１　２区ＳＤ１０（西より）
　２　１区ＳＤ１０（西より）
　３　１区下層遺構全景（西より）
図版７　（カラー）
　１　１区全景（南西より）
　２　１区ＳＸ０４（焼土遺構）（西より）
図版８　（カラー）
　１　２区ＳＲ０１出土山茶碗集合写真
　２　上層遺構・包含層出土貿易陶磁器（青磁・青白磁・白磁）
　３　上層遺構・包含層出土国内産陶器（瀬戸美濃・常滑・志戸呂）
図版９
　１　３区ＳＤ０１土器出土状況（北東より）
　２　３区ＳＤ０１漆椀出土状況（北東より）
　３　３区ＳＤ０３土層断面（南より）
　４　３区ＳＤ０４（北東より）

５　３区ＳＤ０６・ＳＤ０７北側石列(南東より)
６　３区ＳＤ０６・ＳＤ０７南側石列(北東より)
７　２区ＳＲ０１土器出土状況(南西より)
８　２区ＳＤ０５土層(北東より)
図版10
１　２区ＳＲ０１堰状遺構の杭列(東より)
２　２区ＳＲ０１堰状遺構(北より)
３　２区ＳＲ０１堰状遺構(北西より)
４　２区ＳＲ０１堰状遺構(１層目)(東より)
５　２区ＳＲ０１堰状遺構(２層目)(東より)
６　２区ＳＲ０１堰状遺構(２層目)(南より)
７　２区ＳＲ０１堰状遺構(３層目)(東より)
８　２区ＳＲ０１堰状遺構(３層目)(南より)
図版11
１　１区小穴遺構(ＳＰ１７～１９)(東より)
２　２区ＳＤ１０遺物出土状況１(北西より)
３　２区ＳＤ１０遺物出土状況２(北西より)
４　１区ＳＤ１０遺物出土状況３(北より)
５　１区ＳＸ０１完掘状況(南西より)
６　２区ＳＤ１２遺物出土状況(北西より)
７　１区ＳＤ１３遺物出土状況(北東より)
８　１区ＳＸ０３遺物出土状況(南より)
図版12　出土遺物１(山茶碗・銭貨)
図版13　出土遺物２(山茶碗)
図版14　出土遺物３(山茶碗)
図版15　出土遺物４(山茶碗・陶器・土師器・瓦・土錘・銅製品)
図版16　出土遺物５(漆椀・農具・曲物・板状木製品・杭)
図版17　出土遺物６(杭)
図版18　出土遺物７(杭)
図版19　出土遺物８(土師器)
図版20　出土遺物９(弥生土器)
図版21　出土遺物10(弥生土器)
図版22　出土遺物11(弥生土器・縄文土器・石器)

第１章　調査に至る経緯

地方主要道吉田大東線(県道79号線)は、吉田町大幡からＪＲ菊川駅前を通過し、掛川市小貫に至る道路である。平成19年度の県教育委員会文化課(平成22年度より文化財保護課)による開発部局への事業照会において、菊川市吉沢地内の吉田大東線を南側に迂回する工事計画が袋井土木事務所掛川支所から回答された。工事計画路線内には、周知の埋蔵文化財包蔵地である海戸田遺跡が所在していたが、必ずしも遺跡の広がりや性格についてははっきりしていなかった。そのため、試掘確認調査を行ない、その結果を基にその取り扱いを協議することとした。平成21年３月に文化課による試掘確認調査が行われたが、対象区域内に設定された３ヶ所の試掘坑では、わずかな土器片が確認されたのみであった。その後、平成23年１月、文化財保護課による対象区域内の仮設工事の立ち会いを実施するとともに、菊川市教育委員会に依頼し、仮設工事部分の試掘確認調査を行った。工事立ち会いでは、表土下0.25 ～ 0.3mで遺物包含層を確認し、菊川市教委の試掘確認調査においても、やはり表土下0.25 ～ 0.3mで遺物包含層が確認された。しかし、遺物包含層の広がりは確定できず、畑となっていた西側部分の試掘確認調査も必要とされた。文化財保護課としては、本調査が必要と考え、より細かな確認調査を実施することとし、平成23年６月に対象区域内に８ヶ所の試掘坑を設定して実施した。この確認調査の結果、対象区域の中央部から西側部分にかけては、中世の遺物包含層が広がるとともに、東西に延びる溝状遺構を確認、東側部分では、古墳時代の遺物包含層の広がりも確認した。この結果を受けて、袋井土木事務所掛川支所と文化財保護課は協議を行い、平成24・25年度の２か年に亘って、本発掘調査を行うこととし、その実施を静岡県埋蔵文化財センターが行うこととなった。本発掘調査は、調査対象区域を便宜上、東から１区、２区、３区とし、平成24年度は２・３区を、平成25年度は１区を行うこととした。



第１図　遺跡位置図

第２章　地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境

海戸田遺跡は、ＪＲ菊川駅から東北東2.8㎞程の菊川市北東部の吉沢地区に所在する。

静岡県中西部に位置する掛川丘陵の粟が岳（標高532m）を源とする菊川は、富田川、沢水加川、西方川、下平川、牛渕川等多くの支流を集めながら、南に向かって流れ、遠州灘へと注ぐ。この菊川の中・下流域の沖積平野に菊川市の市街地が広がる。この沖積平野を囲むように、北には掛川丘陵、東に牧之原台地、西に小笠山丘陵が広がり、それらの丘陵の周辺には、菊川とその支流によって作り出された段丘が所在する。沖積平野部分は、市街地や水田として、段丘上や台地は茶畑や果樹園等、丘陵部は山林等の土地利用がなされてきている。

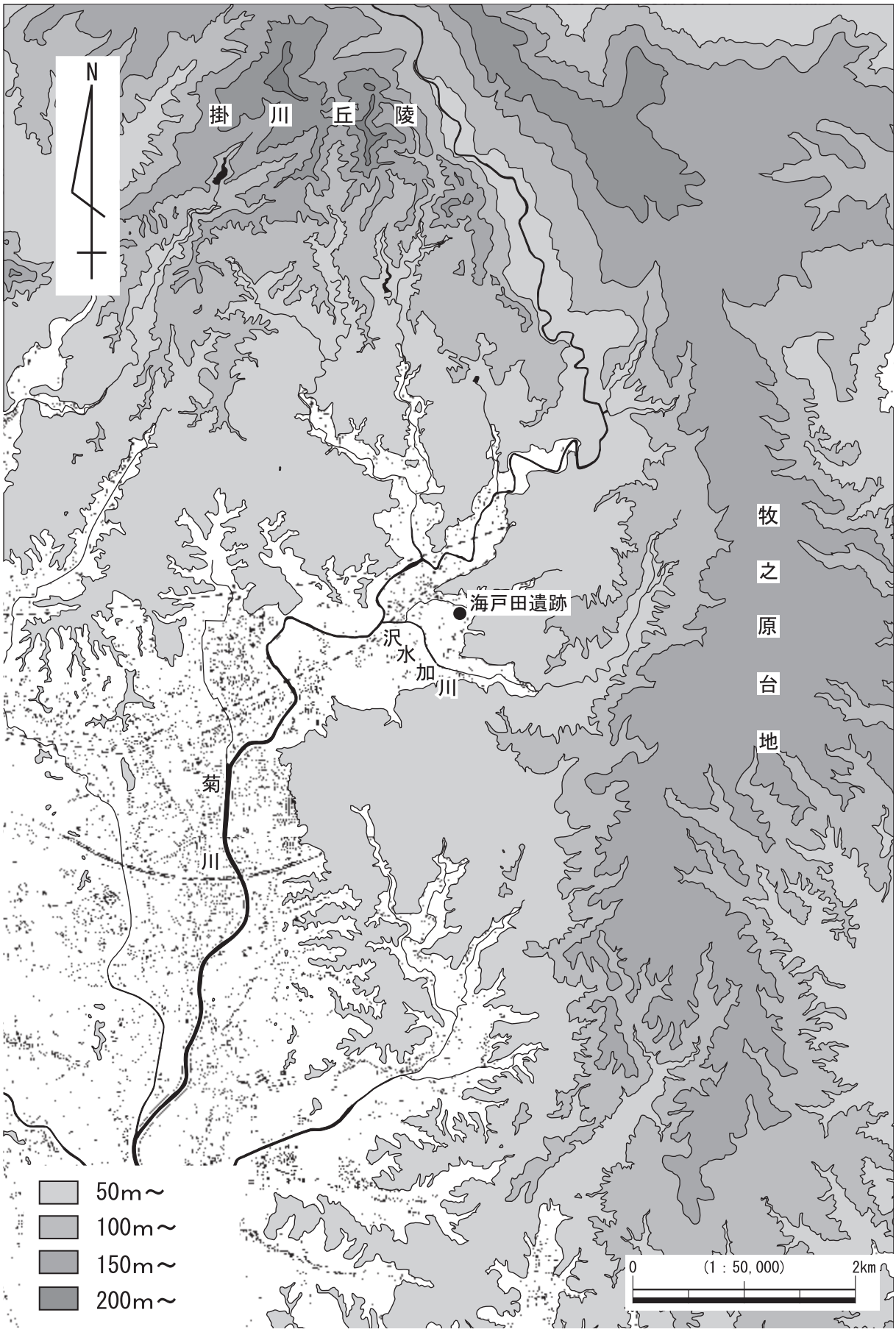
菊川の中流域となる海戸田遺跡が所在する周辺の状況を見てみると、北側には牧之原台地から千駄ヶ原の段丘が延びており、東側には同じく牧之原台地から続く赤谷の段丘が所在する。千駄ヶ原の段丘の南側を沿うように吉沢川が流れ、牧之原台地にその源流をもつ沢水加川が赤谷の段丘の南側を流れるが、これらの川は海戸田遺跡の西方で合流し、その後菊川と合流する。また、沢水加川の南側には、牧之原台地から舌状に長者ヶ原の段丘が東西に延びている。海戸田遺跡は千駄ヶ原と赤谷の丘陵の間の谷口から吉沢川と沢水加川に挟まれた沖積地に広がっているが、現状この付近一帯は水田となっており、周辺の丘陵及び段丘上は、茶畑の景観を呈している。

第２節　歴史的環境

前節でも述べたように、海戸田遺跡は菊川中流域の千駄ヶ原の段丘と赤谷の段丘に挟まれた谷口部分の沖積地に所在するが、周辺には古くから人々の生活の痕跡である遺跡が多く残されている。それらの遺跡の分布状況を概観することにより、海戸田遺跡を取り巻く歴史的環境を述べていくこととする。

縄文時代の遺跡としては、菊川を挟んだ北側の富田地区の丘陵及び段丘上に井上段遺跡(2)、向林遺跡(3)、六反田遺跡(5)、御霊神社遺跡(10)、善福寺遺跡(11)、西原シデト遺跡(14)等が所在する。この中で平成５年河川改良工事により発掘調査された善福寺遺跡では、中期から後期の竪穴住居跡１棟、土坑や溝状遺構が確認されている。海戸田遺跡の北側に延びる千駄ヶ原の段丘上には、秋常段遺跡(6)、千駄ヶ原遺跡(15)、池ヶ谷遺跡(16)、西峯Ⅰ遺跡(18)、西峯Ⅱ遺跡(19)、上ノ段遺跡(20)、西福寺遺跡(22)、吉沢段遺跡(23)等が所在する。海戸田遺跡の東側の赤谷の段丘上には、赤谷遺跡(33)、祢宜屋敷遺跡(34)が所在する。赤谷遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期の集落であるが、縄文時代の遺物も出土しており、祢宜屋敷遺跡では、平成16年度の調査で早期の集石土坑が確認されている。海戸田遺跡の南側に東西に延びる段丘上には、本地域の後・晩期の代表的な遺跡である石畑遺跡(36)がある。昭和57・58年の調査では後期中葉から晩期前半の竪穴住居跡６軒、土坑27基が確認されている。さらに沢水加川を挟んだ南西の低い段丘上には、縄文時代の遺物が採集できる遺跡として、原段遺跡(37)、胡麻壇遺跡(38)が所在する。また、沢水加川の南側に牧之原台地から和田地区に向かって延びる長者原の段丘上には、縄文時代の遺物が散布する上ノ原遺跡(41)が所在する。

弥生時代の遺跡の分布状況をみると、富田地区の丘陵及び段丘上に井上段遺跡(2)、向林遺跡(3)、善



第２図　周辺地形図

福寺遺跡(11)が所在し、沖積地に所在する遺跡として殿前遺跡(13)がある。調査が行われた善福寺遺跡では、弥生時代の竪穴住居跡６、溝状遺構等が確認されている。千駄ヶ原の段丘上では、樽ヶ谷遺跡(17)が所在する。また、赤谷の段丘上には、赤谷遺跡(33)、祢宜屋敷遺跡(34)がある。赤谷遺跡の昭和29年の中学校用地造成の際の発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡９軒等が検出されている。また、その南西部の農業研修会館の建設に伴う昭和57年の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡34軒や掘立柱建物跡５棟等が検出されている。祢宜屋敷遺跡の平成16年のファームポンド建設に伴う発掘調査では、後期の竪穴住居跡11軒等を検出している。また、沢水加川を挟んで海戸田遺跡の南西側に所在する原段遺跡(37)でも弥生時代の遺物が出土している。この時期の遺跡のあり方をみると、菊川右岸部の善福寺遺跡等は比較的低い段丘面に立地し、赤谷遺跡や祢宜屋敷遺跡等は、やや高い段丘上に集落を形成していたと考えられるが、縄文時代の遺跡の数に比べ、その数は少ないものとなっている。この時期の大規模な集落は、菊川ではさらに下流の西方川・上小笠川流域に形成されている。海戸田遺跡周辺のこの時期の遺跡が少ないのは、生産の場所である沖積平野の広さも関係しているのであろう。

古墳時代の遺跡の分布をみると、海戸田遺跡周辺の遺跡数はさらに少なくなっている。赤谷遺跡や祢宜屋敷遺跡は一部前期まで続いているが、その後は衰退している。古墳時代後期の遺構が確認された遺跡としては、沢水加川と菊川の合流点の南東部に広がる原段遺跡(37)がある。昭和62年の調査では、後期の竪穴住居跡が５軒検出されている。また、古墳は千駄ヶ原の段丘の先端部に所在する上ノ段古墳(21)、原段遺跡の西側に所在する法明寺古墳(39)、菊川右岸部の潮海寺の段丘先端に所在する下ノ段古墳がある。いずれも円墳と考えられるが、平成20年に道路改良工事のため、墳丘の一部が調査された法明寺古墳は、直径35.5mから36mと推定され、菊川上流域最大級の円墳と考えられている。菊川地域の古墳の分布をみると、下流域にその中心が見られる。地域最古の古墳とされる下平川大塚古墳をはじめ、それに続く菊川市神尾の庚神塚古墳、菊川市高橋の船久保古墳等の前方後円墳が所在する。菊川中流域の前方後円墳としては、菊川市半済の大徳寺古墳がある。これらの周辺には、古墳時代後半にも古墳群や横穴群が所在する。こうした状況からみると開発の方向は、こうした菊川下流域の広く広がる沖積平野へ向かっていったものと考えられる。

海戸田遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡としては、菊川を挟んだ対岸の沖積平野に広がる堂ノ前遺跡(24)、さらに西方の潮海寺の段丘上に広がる潮海寺門前町遺跡(28)、南側の石畑遺跡(36)等があるが、その状況が明らかにされたものは少ない。石畑遺跡において縄文時代の遺構とともに、奈良・平安時代の竪穴住居跡が確認されているのみである。なお、平安時代の後期になると海戸田遺跡の南方、沢水加川南側の長者ヶ原の段丘南斜面に山茶碗の窯である皿山古窯跡群が大きく操業されはじめる。

中世段階になると、海戸田遺跡周辺においても、この時期の遺物を出土する遺跡が多くなる。富田地区の丘陵及び段丘上に六反田遺跡(5)、善福寺遺跡(11)、殿前遺跡(13)等が所在する。善福寺遺跡では、中世の掘立柱建物跡７棟が検出されている。千駄ヶ原の段丘上では、千駄ヶ原遺跡(15)、西峯Ⅱ遺跡(19)から中世の遺物が確認されている。菊川を挟んで西の潮海寺の段丘上には、潮海寺の隆盛とともにそれに伴う潮海寺薬師堂跡(25)、潮海寺薬師堂瓦窯跡(26)、潮海寺門前町遺跡(28)等の遺跡が広く展開する。また、潮海寺の段丘下の沖積地に所在する堂ノ前遺跡(24)では、平成12年の調査で、中世の溝状遺構と土器が確認されている。東から南に延びる赤谷の段丘上及びその先の沖積地部分には、後久遺跡(35)、石畑遺跡(36)、原段遺跡(37)、胡麻段遺跡(38)、法明寺古墳(39)等がある。この中で沖積地に所在する後久遺跡では、平成６年の水路工事に伴う調査で、中世の時期の旧流路と水田跡を確認している。また、原段遺跡では、平成元年の調査では、中世から近世と考えられる大溝と遺物が確認されている。胡麻段遺跡や法明寺古墳では、中世墓等の遺構を確認している。平安時代後期から操業された山茶碗の窯であ

第３図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	山中遺跡	縄文	35	後久遺跡	中世
2	井上段遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良	36	石畑遺跡	縄文・奈良・平安・中世
3	向林遺跡	縄文・弥生	37	原段遺跡	縄文・弥生・古墳・中世・近世
4	山賊屋敷遺跡	室町・戦国	38	胡麻段遺跡	縄文・中世
5	六反田遺跡	縄文・中世	39	法明寺古墳	古墳・中世・近世
6	秋常段遺跡	縄文・弥生	40	八王子遺跡	中世
7	寺段遺跡	縄文	41	上ノ原遺跡	縄文
8	東峯遺跡	縄文	42	皿山古窯跡群	平安・中世
9	蔵田段遺跡	弥生・中世	43	御兎谷古窯跡群	中世
10	御霊神社遺跡	縄文	44	長者屋敷遺跡	中世
11	善福寺遺跡	縄文・弥生・中世	45	長者原遺跡	旧石器
12	富田城跡	室町・戦国	46	仁王辻遺跡	縄文
13	殿前遺跡	弥生・中世	47	山田遺跡	縄文
14	西原シデト原遺跡	縄文	48	仲島遺跡	中世
15	千駄ヶ原遺跡	縄文・中世	49	島経塚	中世
16	池ヶ谷遺跡	縄文	50	下本所横穴群Ｂ群	古墳
17	樽ヶ谷遺跡	弥生	51	アラコ原遺跡	縄文
18	西峯Ⅰ遺跡	縄文	52	坊ノ谷古窯跡	中世
19	西峯Ⅱ遺跡	縄文・中世	53	松木遺跡	縄文
20	上ノ段遺跡	縄文・古墳・平安	54	新井遺跡	古墳
21	上ノ段古墳	古墳	55	古田横穴群	古墳
22	西福寺遺跡	縄文	56	四ツ枝遺跡	弥生・古墳・中世・近世
23	吉沢段遺跡	縄文	57	白坂横穴群	古墳
24	堂ノ前遺跡	奈良・中世	58	下田遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
25	潮海寺薬師堂跡	中世・近世	59	下田横穴群	古墳
26	潮海寺薬師堂瓦窯跡	中世・近世	60	榎下遺跡	奈良・平安・中世
27	堂橋遺跡	縄文・古墳・中世	61	段原遺跡	弥生・平安・中世
28	潮海寺門前町遺跡	弥生・奈良・平安・中世・近世	62	里遺跡	古墳・奈良・平安・中世
29	下ノ段遺跡	弥生	63	神尾原遺跡	縄文
30	下ノ段古墳	古墳	64	行田ヶ谷古窯跡	平安・中世
31	矢田部遺跡	縄文	65	一の坪遺跡	平安・中世
32	海戸田遺跡	今回調査	66	深川横穴群	古墳
33	赤谷遺跡	縄文・弥生・古墳	67	松竹谷遺跡	縄文
34	祢宜屋敷遺跡	縄文・弥生			

る皿山古窯跡群(42)は、中世に入ると衰退し、御兎谷古窯跡群(43)、坊ノ谷古窯跡(52)等の小規模な窯や他地域へ移動している状況も窺われる。このような中世段階の遺跡の状況をみると、菊川の中流域である海戸田遺跡周辺の沖積平野の土地利用があらためて活発になっていった状況が想定される。

第３章　調査の方法と経過

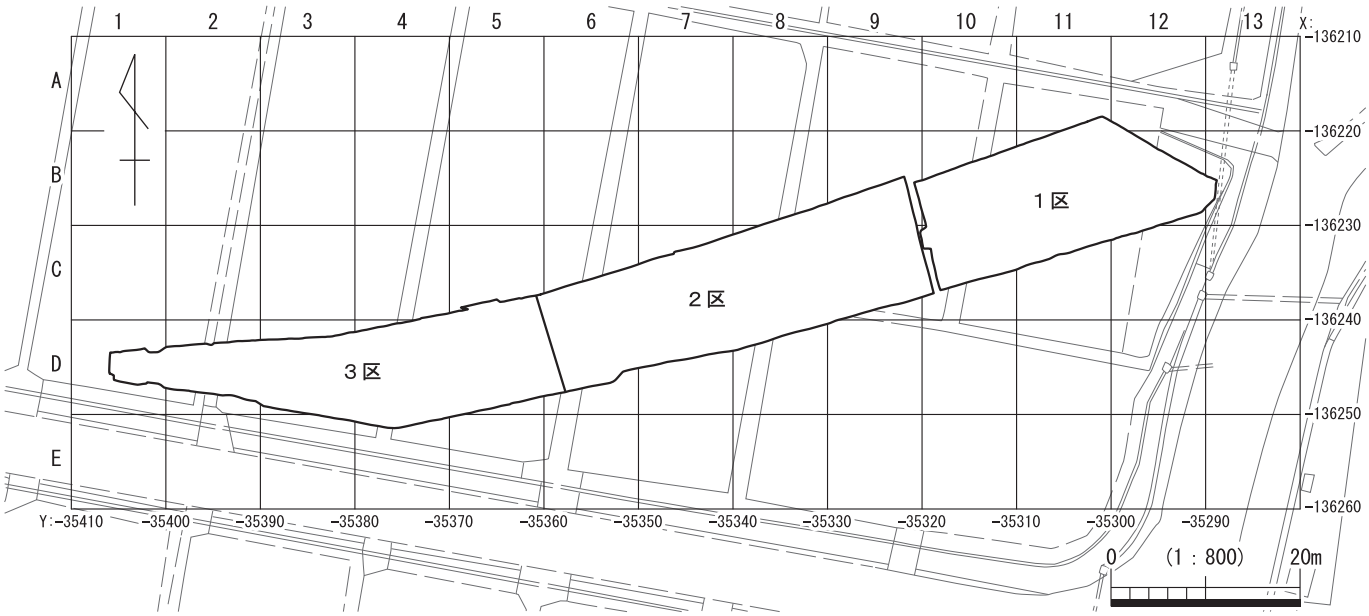
第１節　調査の方法

吉田大東線改良工事に伴う海戸田遺跡の発掘対象範囲は、東西約120m、南北約13.5mとなるが、便宜上３分割して調査を進めることとした。調査区は、東から１区(436㎡)、２区(503㎡)、３区(374㎡)とし、平成24年度に２区・３区の調査を行い、東側の１区は平成25年度に行うこととした。

平成24年度の発掘調査は、入札の結果、掘削業務を株式会社イビソクに、測量業務を株式会社フジヤマに委託して実施した。調査は３区から始め、その排土は調査区内である２区に仮置きした。３区の調査完了後、そこを埋め戻し、２区の排土の仮置き場として、２区の調査を進めた。なお、１区は平成24年度調査の作業ヤードとした。これらの調査は、表土除去を重機により行い、その後人力による包含層掘削・遺構検出・遺構掘削を進めた。また、これらと並行して、調査区への基準杭の設置、個別遺構の実測を最終的にラジコンヘリによる空中写真測量を実施して、１/20の平面図と1/100の全体図を作成した。調査の記録としての写真撮影は、中型カメラ(６×７判)のモノクロネガフィルム及びカラーポジフィルムを基本とし、35㎜版小型カメラのカラーポジフィルムを補助としてセンター職員が行った。また、必要に応じて大型カメラ(４×５版)のカラーポジフィルムによる撮影も行った。なお、ラジコンヘリによる空中写真測量時に併せて景観写真の撮影も行っている。現地においては、出土遺物や写真記録類の基礎整理作業も併せて実施している。

平成25年度の発掘調査は、入札の結果、掘削業務を国際文化財株式会社に、測量業務を株式会社フジヤマに委託して実施した。調査は１区を対象とし、前年度調査を完了している２区を排土仮置場、３区部分を作業ヤードとして行われた。調査方法は、平成24年度と同様である。なお、平成25年度は、資料整理の一部を株式会社パソナに委託して実施している。

平成26年度は、資料整理作業と出土遺物の保存処理作業を株式会社パソナに委託して実施した。



第４図　グリッド配置図

第２節　基本土層

確認調査の結果等を基に、調査区の基本土層を次のように把握して、調査を進めた。

第１層…盛土

第２層…田畑耕作土、にぶい黄褐色砂質シルト層である。

第３層…鉄分を含む灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト層である。

第４層…鉄分を少量含む灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト層である。

第５層…鉄分を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト層である。

第６層…鉄分と部分的に黄色土塊・黒褐色土塊を含む暗褐色(10YR3/3)粘質シルト層である。

第４～６層を、中世の遺物包含層として把握したが、第５層は３区から１区の北側に広がり、第６層は、３区に広がっている。ＳＤ０１やＳＲ０１の遺構はこれらの層の下から検出している。

第７層…鉄分を含む黒褐色(10YR3/2)粘質シルト層である。鉄分の量により分層可能。ａは鉄分が多く、ｂは鉄分が少量含まれる。

第８層…鉄分を含む褐色(10YR4/4)粘質シルト層である。

第９層…鉄分を少量含む暗褐色(10YR3/3)粘質シルト層である。

第10層…褐色土混じりの灰黄褐色(7.5YR5/4)シルト層である。

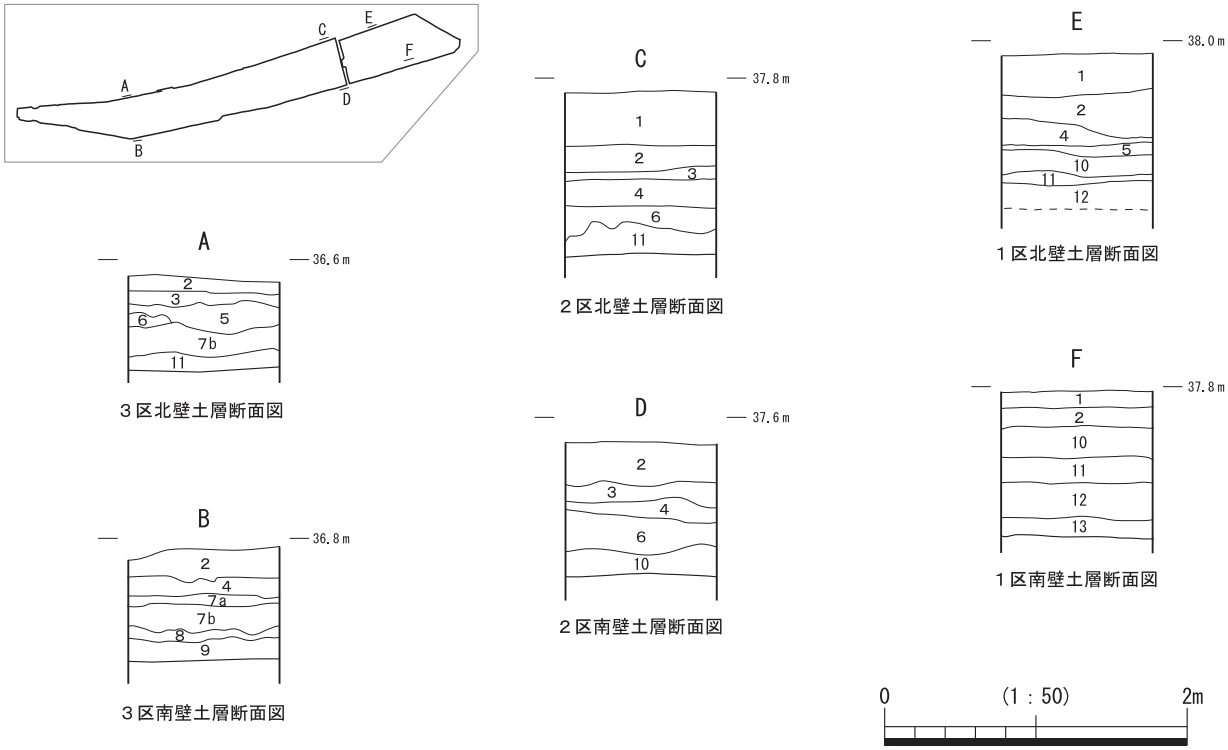
第７～９層は３区部分を中心に広がり、また第10層は１区を中心に広がり、古墳時代から奈良・平安時代の遺物を包含する層である。

第11層…暗褐色土塊及び少量の鉄分を含むにぶい黄褐色(7.5YR5/4)粘質シルト層である。

第12層…黄褐色(7.5YR5/4)粘質シルト層である。

第13層…暗褐色(7.5YR3/3)粘質シルト層である。

第11～13層は無遺物層となり、第13層は1区のみで確認されている。



第５図　基本土層図

第３節　調査の経過

１　平成24年度

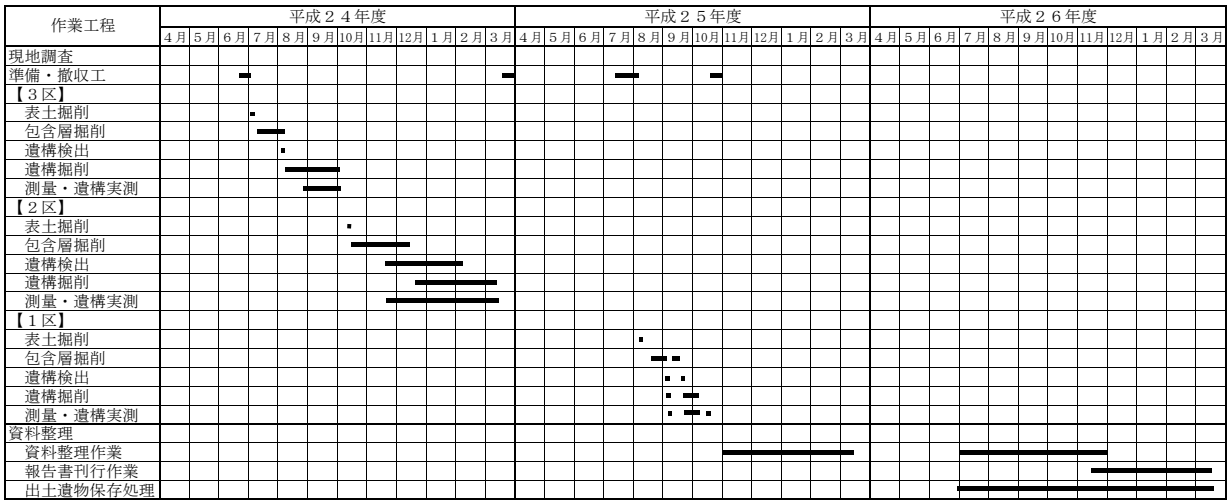
３区の調査

７月６日(金)	３区重機による表土除去。
７月９日(月)～８月５日(月)	作業員を導入し、排水溝掘削とともに上層の包含層掘削を進める。
８月６日(火)～８月８日(木)	遺構検出作業を実施し、ＳＤ01・ＳＤ０２・ＳＤ０３・ＳＤ０４等の上層遺構を確認。
８月９日(月)～10月１日(月)	ＳＤ０１等の遺構掘削を進める。
10月２日(火)	上層遺構全体の空中写真撮影及び空中写真測量を実施。
10月９日(火)・10月10日(水)	下層の包含層掘削を行い、ＳＤ０５を検出。遺構掘削を行い、その後実測作業を実施。
10月12日(金)・10月15日(月)	３区の埋め戻しを行う。

２区の調査

10月15日(月)・10月16日(火)	２区重機による表土除去。
10月22日(月)～11月21日(水)	排水溝掘削と合わせ、上層の包含層掘削を実施する。試掘調査時の試掘坑を再掘削するとともにトレンチを設定し、掘削する。
11月22日(木)～11月30日(金)	ＳＤ０１・ＳＤ０５・ＳＤ０６・ＳＤ０７等の遺構を検出、遺構掘削を進め、ＳＤ０６の実測を行う。
12月３日(月)～12月５日(水)	ＳＤ０６・ＳＤ０７を含む包含層を掘削する。
12月17日(月)～12月26日(水)	自然流路(ＳＲ０１)を検出、堰状遺構の一部を確認。堰状遺構の状況を見ながら、ＳＲ０１の遺構掘削を行う。
１月７日(月)～１月29日(火)	ＳＲ０１の遺構掘削を進めながら、並行してＳＤ０１及びＳＤ０５の遺構検出、遺構掘削を行う。
２月５日(火)～３月12日(火)	下層の包含層を掘り進め、ＳＤ０８・ＳＤ１０を検出。それぞれの遺構掘削を進めるとともに、ＳＤ１０の遺物出土状況を記録。並行してＳＲ０１の堰状遺構の検出と解体を進める。

第２表　発掘調査工程表



３月13日（水）　　２区の全景写真撮影、完掘状況の空中写真測量を実施。
３月15日（金）・３月16日（土）　　重機による埋め戻し。
なお、現地作業と並行して、遺物水洗・注記等の基礎整理作業を実施した。

２　平成25年度

１区の調査

８月７日（水）・８月８日（木）　　重機による表土除去作業。
８月19日（月）～８月30日（金）　　排水溝掘削及び上層の包含層掘削。
９月３日（火）・９月４日（水）　　上層の遺構、小穴及びＳＸ０１を検出し、遺構掘削作業を進め、個別実測を行う。
９月６日（金）～９月13日（金）　　下層の包含層掘削。
９月17日（火）～10月２日（水）　　遺構検出を行い、ＳＤ１０の続き、ＳＤ１１・ＳＤ１３等の遺構を確認、遺構掘削を進めるとともに、個別実測を行う。
10月３日（木）～10月10日（木）　　南西部の落ち込み部分の調査を進め、焼土遺構を含むＳＸ０４等を検出、遺構掘削、遺構実測を進める。
10月18日（金）　　完掘状況の空中写真撮影、空中写真測量を実施。
10月22日（火）・10月23日（水）　　重機により埋め戻し。
このあと、静岡県埋蔵文化財センターにて平成25年11月から平成26年３月に資料整理作業を一部実施した。

３　平成26年度

静岡県埋蔵文化財センターにて、資料整理作業･報告書刊行作業、木製品等の保存処理作業を進めた。

写真１　包含層掘削作業（３区）

写真２　遺構検出作業（２区）

写真３　遺構掘削作業（２区　ＳＲ０１）

写真４　資料整理（土器接合）

第４章　調査の成果

第１節　検出された遺構

１　上層の遺構

（１）遺構の検出状況

今回の調査では、上層の遺物包含層である基本土層の第４層（鉄分を少量含む灰黄褐色粘質シルト層）・第５層（鉄分を含むにぶい黄褐色粘質シルト層）・第６層（鉄分と部分的に黄色土塊・黒褐色土塊を含む暗褐色粘質シルト層）下から検出された遺構を上層遺構とした。３区の調査では、ＳＤ０１、ＳＤ０２、ＳＤ０３、ＳＤ０４等の溝状遺構を検出している。また、２区の調査では、西端部に３区から続くＳＤ０１を、中央部には南北に延びる自然流路と考えられるＳＲ０１を検出した。ＳＲ０１内には杭列と丸太の横木、細かい枝木によって構築された遺構を検出している。なお、ＳＲ０１の東側に石列を伴う溝状遺構であるＳＤ０６・ＳＤ０７を検出した。２区東端部から１区にかけて北東方向に向かって徐々に高くなっているが、径0.2 ～ 0.5mの小穴遺構（ＳＰ）を検出した。これらの小穴遺構の一部は、下層の遺物包含層を外した段階で検出したものもあるが、その形状や埋土の状況から上層の遺構と考え、まとめて記述している。以下、各遺構の状況について述べていく。

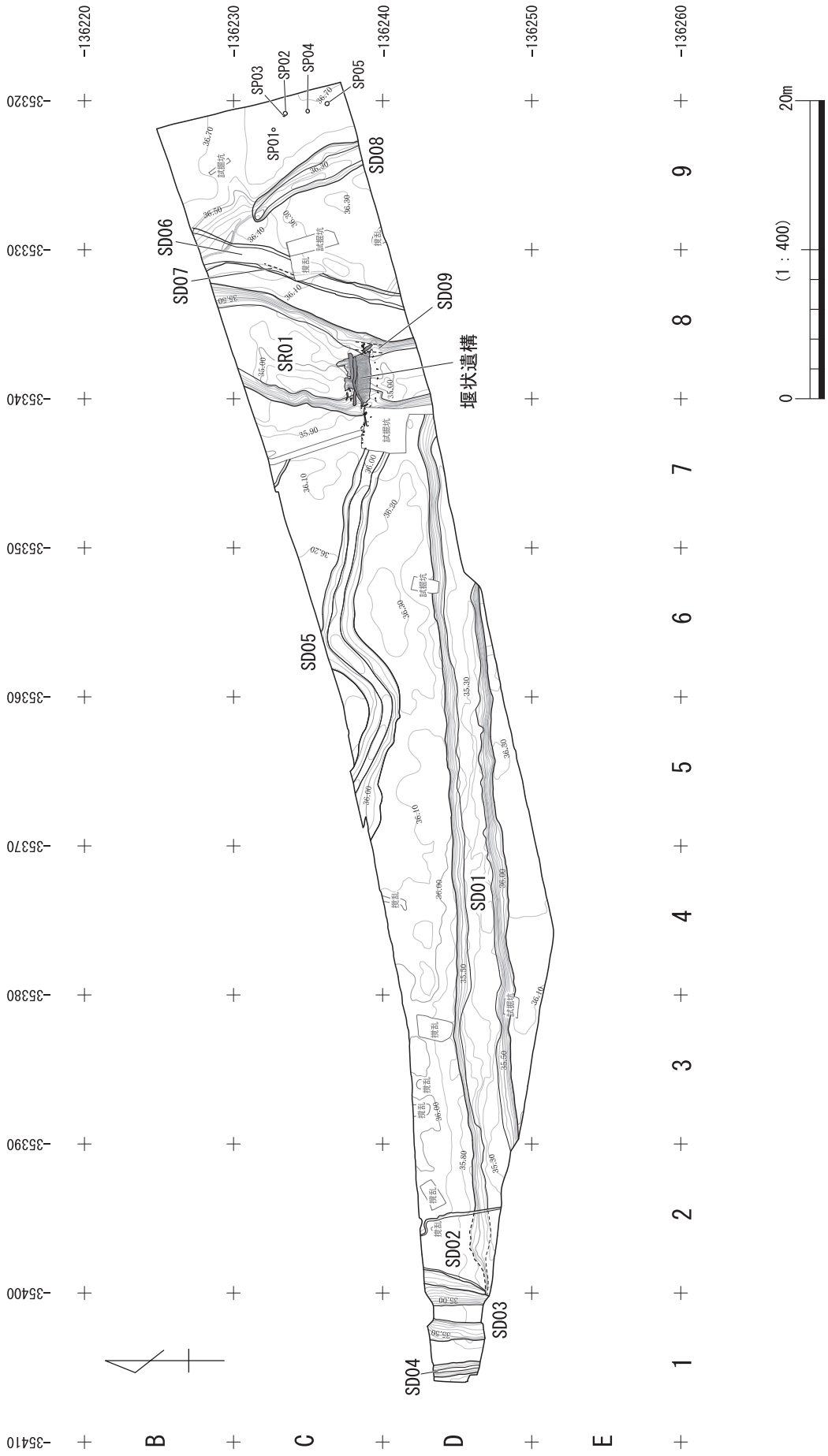
（２）各遺構の状況

ＳＤ０１　３区Ｄ２グリッド南半部から２区Ｄ７グリッド南半部に上層の遺物包含層である暗褐色粘質シルト層（基本土層６層）下より検出された東西に延びる溝状遺構である。延長60m程を確認したが、それぞれの先は調査区外に延びている。幅3.0 ～ 3.6m、検出面からの深さは0.8 ～ 1.0mを測るしっかりとした溝である。断面形状は、底部が平底を呈する逆台形に近い形を呈している。土層は、基本的に上層から①鉄分を少量含む黒褐色粘質シルト②灰黄褐色粘質シルト③鉄分・黄色土塊を含む黒褐色粘質シルト④褐灰色粘質シルト⑤白色土塊・細礫を含む黒褐色砂質シルト⑥黒褐色粘質シルト⑦褐灰色砂質シルト⑧褐灰色砂（最下層に１㎝以下の礫を含む）となっている。底部に砂が認められることから、この溝には、水が流れていたものと考えられる。また、底部のレベルは、東から西に向かって、わずかではあるが、低くなっている。

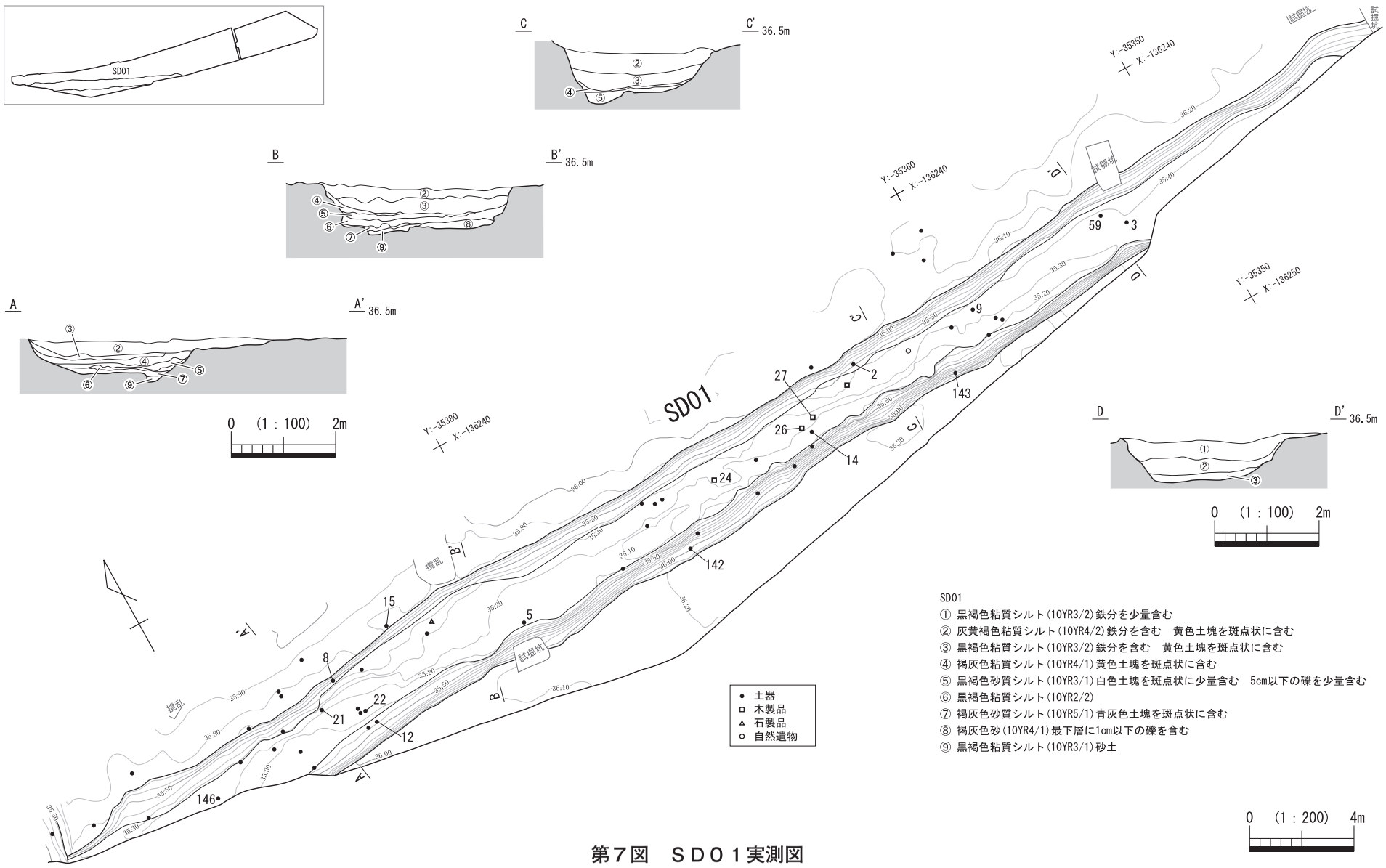
ＳＤ０１内からは、山茶碗、陶磁器、灰釉陶器、土師器、須恵器、漆椀、曲物の一部、農具と考えられる木製部材、板材、銭貨など多くの遺物が出土している他、下層の遺物包含層から混入したと考えられる古墳時代の土師器や弥生土器が見られる。弥生土器の中には、完形に近いものもあり、単純にその時期の遺物包含層と考えるより、今回の調査では確認することができなかったが、下層にその時期の遺構があったのかもしれない。出土遺物の主体をなすものは、山茶碗であり、その特徴から東遠の窯（皿山古窯跡か？）の製品と考えられるものである。時期的には、12世紀末から13世紀初頭と考えられるものが、下層から出土しており、ＳＤ０１もその時期に構築されたものと考えられる。

ＳＤ０１は、前述のように土層の状況、底部に砂が見られることから、水が流れていたと考えられ、また、幅３ｍというその規模やしっかりとした構造から、この一帯に水を配水する基幹的水路ではないかと考えられる。

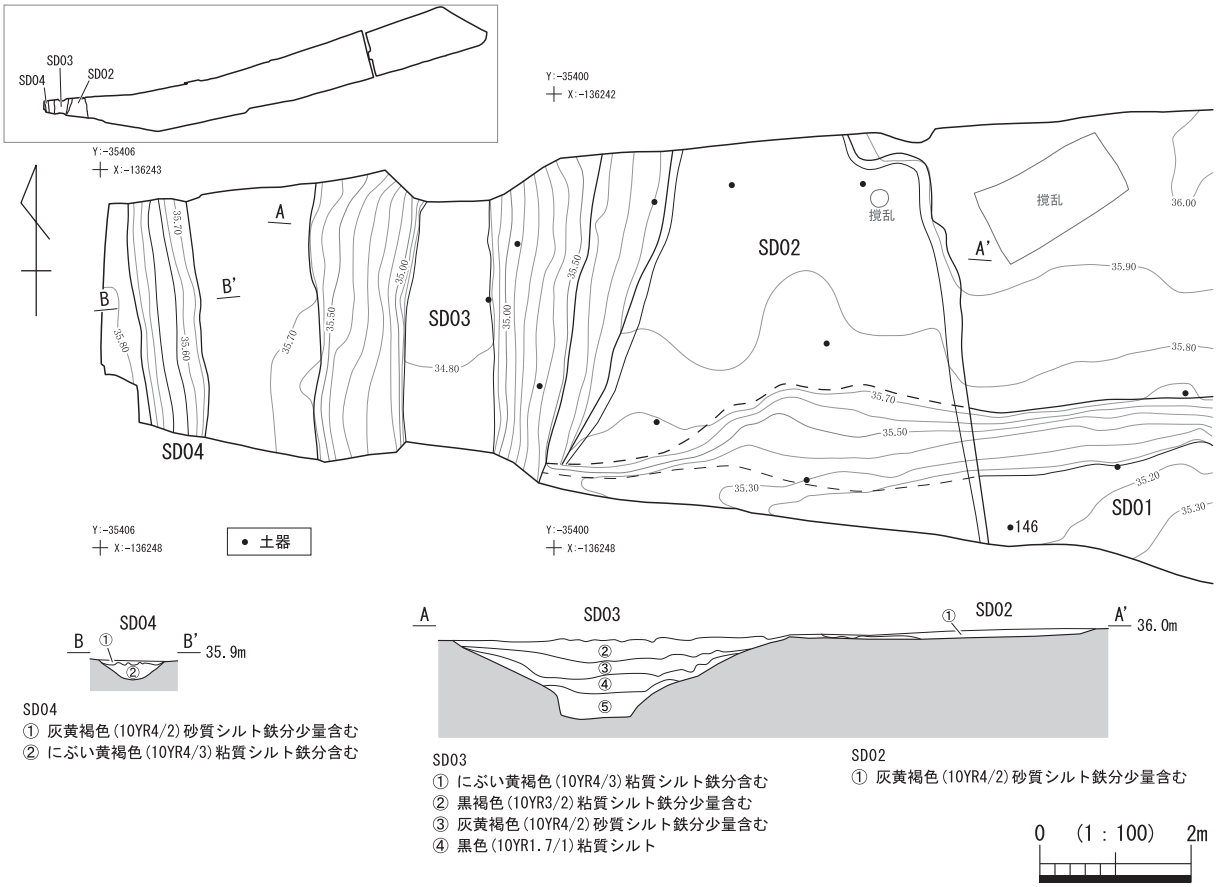
ＳＤ０２　３区Ｄ２グリッド西半部に確認された南北に延びる溝状遺構である。調査区北壁付近での幅3.5m、南壁付近での幅5.7m、深さ0.1mと検出された範囲で、平面台形を呈する幅の広い非常に浅い溝状遺構である。覆土は灰黄褐色砂質シルトの1層であり、ＳＤ０１を切る形となっており、ＳＤ０１よ



第６図　２・３区遺構全体図


SD01
A
A'
36.5m
B
B'
36.5m
C
C'
36.5m
D
D'
36.5m
0 (1 : 100) 2m
Y:-35380
X:-136240
Y:-35360
X:-136240
Y:-35350
X:-136240
Y:-35350
X:-136250
試掘坑
攪乱
146
15
8
21
22
12
5
24
142
27
26
14
2
143
9
59
3
土器
木製品
石製品
自然遺物
SD01
① 黒褐色粘質シルト(10YR3/2)鉄分を少量含む
② 灰黄褐色粘質シルト(10YR4/2)鉄分を含む　黄色土塊を斑点状に含む
③ 黒褐色粘質シルト(10YR3/2)鉄分を含む　黄色土塊を斑点状に含む
④ 褐灰色粘質シルト(10YR4/1)黄色土塊を斑点状に含む
⑤ 黒褐色砂質シルト(10YR3/1)白色土塊を斑点状に少量含む　5cm以下の礫を少量含む
⑥ 黒褐色粘質シルト(10YR2/2)
⑦ 褐灰色砂質シルト(10YR5/1)青灰色土塊を斑点状に含む
⑧ 褐灰色砂(10YR4/1)最下層に1cm以下の礫を含む
⑨ 黒褐色粘質シルト(10YR3/1)砂土
0 (1 : 200) 4m

第７図　ＳＤ０１実測図

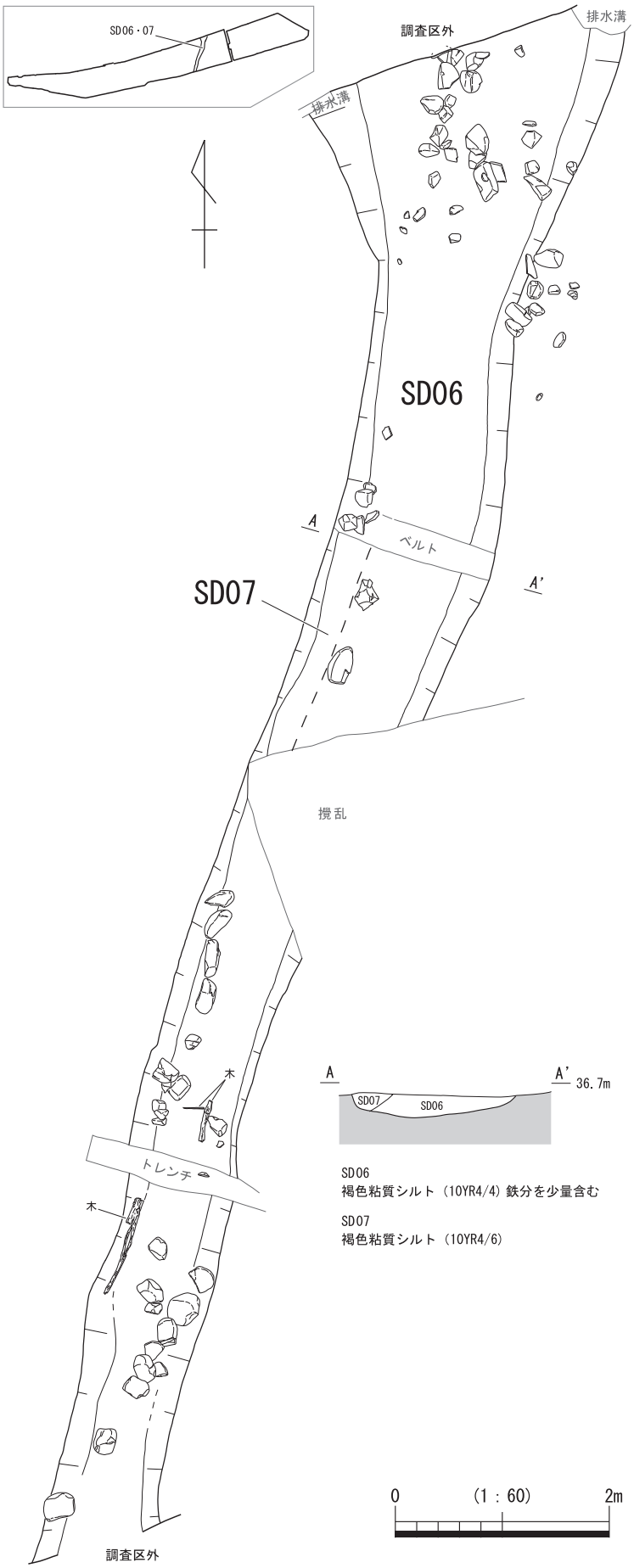


第８図　ＳＤ０２・ＳＤ０３・ＳＤ０４実測図

り新しい時期のものと考えられる。いずれも小破片ではあるが、東遠型の山茶碗、土師器、叩き目のある須恵器甕の胴部片が出土している。その性格は不明である。

ＳＤ０３　３区Ｄ１グリッド東半部に検出された南北方向に延びる溝状遺構である。検出面での幅は、調査区北壁付近で3.7m、南壁付近で3.0mを測る。深さは検出面から1.0mを測る。底部は箱型に掘り込まれ、その後直線的に開き、断面形は逆台形に近い形を呈する。覆土は、上層から①にぶい黄褐色粘質シルト②黒褐色粘質シルト③灰黄褐色砂質シルト④黒色粘質シルトとなっており、自然堆積の状況を呈する。出土遺物は、いずれも小破片であるが、山茶碗、かわらけ、土師器（伊勢鍋と考えられるものも含む）等とともに、流れ込みと考えられる土師器球胴甕片や高坏片、縄文土器片等も出土している。その位置関係は、ほぼ直角に交わるものとなっている。調査区外のため、明確には確認することはできなかったが、調査段階ではＳＤ０１に切られる形となっており、時期的には、ＳＤ０１よりやや古い時期、12世紀末頃のものと考えられるが、それほど違わない時期と考えられる。全体としてしっかり掘り込まれた溝であり、ＳＤ０１と同様の水路的性格をもつ溝であると考えられるとともに、その位置関係から、ある段階では、ＳＤ０１の支線的なものであった可能性も考えられる。

ＳＤ０４　３区Ｄ１グリッド、ＳＤ０３の西側に検出された溝状遺構である。ＳＤ０３とはわずかに方向を違えており、北に向かってやや開く形となっている。検出面での幅は0.8～0.9m、深さは0.25mを測る。底部は丸底を呈し、断面形状は半円形を呈する。覆土は、①灰黄褐色砂質シルト②にぶい黄褐色粘質シルトとなっている。覆土中から、山茶碗の小破片などが出土しており、時期的にはＳＤ０３等と同時期と考えられるが、その新旧関係は不明である。この溝の性格は、ＳＤ０３等と比べ小規模なことから、水路というよりは、ある意味での区画溝ではないかと考えられる。

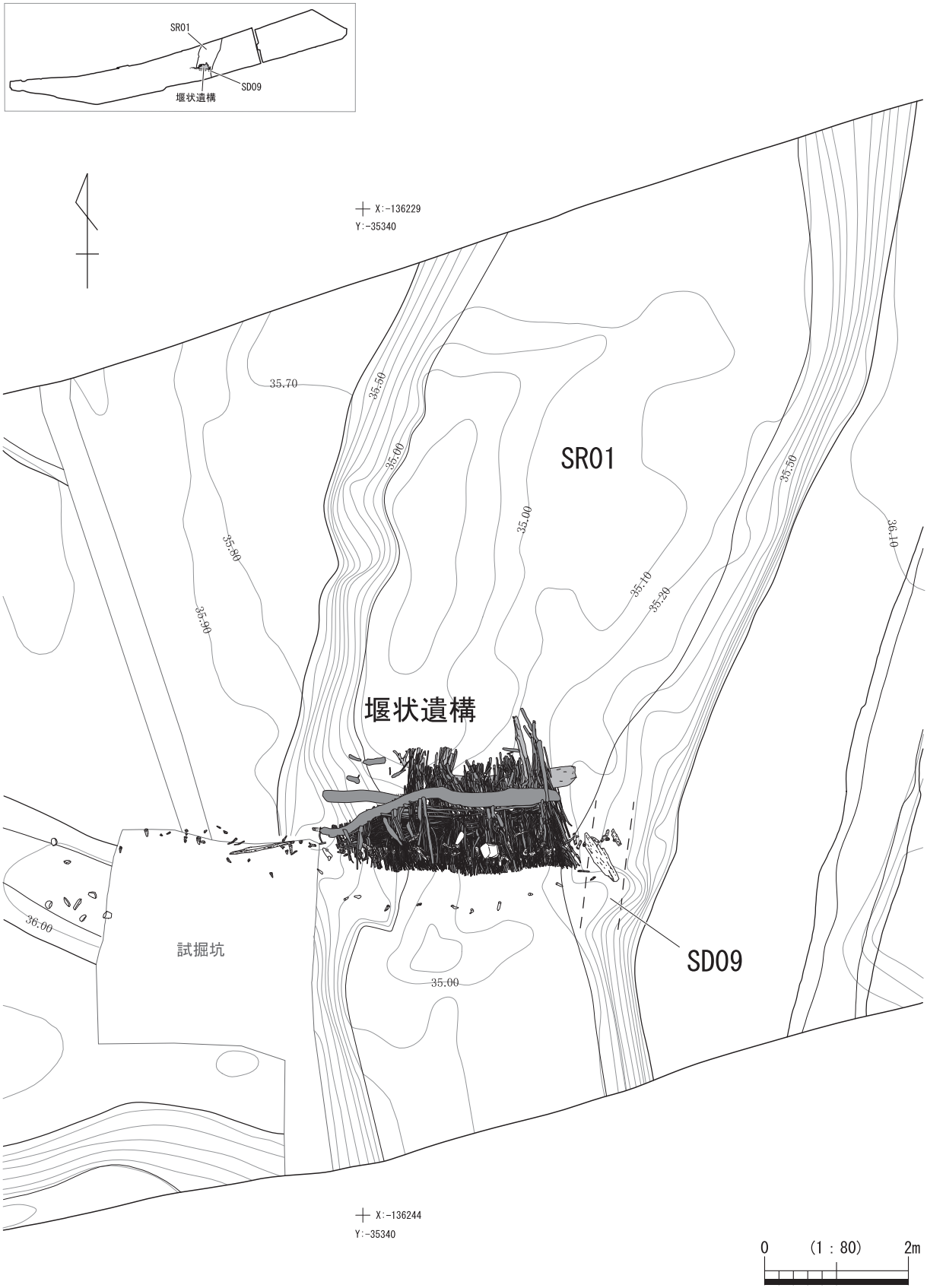


第９図　ＳＤ０６・ＳＤ０７実測図

ＳＤ０６・０７　２区Ｂ８グリッド南西隅からＤ８グリッド中央北部に南南西から北北東へとわずかに屈曲して延びる溝状遺構であり、中世の遺物包含層と考えた層の途中で検出されている。ＳＤ０７は、ＳＤ０６がある程度埋まった段階で、ＳＤ０７に沿うように掘られた溝状遺構である。ＳＤ０６は、南壁部分での幅0.95m、北壁部分では幅3.0mを測る。北に向かって徐々に幅を広げ、北壁部分で大きく開く形の平面形を呈する。深さは0.2mと浅い溝であり、底部は緩やかな丸底となる。

ＳＤ０６の西側にＳＤ０７が確認されたわけであるが、土層断面からの確認であり、その平面プランは必ずしも明確ではない。土層断面から測った幅は0.35m、深さ0.15mと細い溝となっている。ＳＤ０６の覆土は、褐色粘質シルトであり、鉄分を少量含む。ＳＤ０７の覆土は、ＳＤ０６と同様の褐色粘質シルトであるが、鉄分は含まない。ＳＤ０６の覆土中からは、叩き目のある須恵器甕や山茶碗の細片が出土している。ＳＤ０６・ＳＤ０７には、15～25cm大の河原石が一部並ぶ形で検出されており、またＳＤ０６の西側部分に木杭がまばらに検出されているが、その性格は明確ではなく、あるいは土留め等の機能をもつものかと考えられる。こうした石列や木杭は、ＳＤ０６に伴うものもあると考えられるが、ＳＤ０７に伴うものもあると考えられ、明確ではない。

ＳＤ０６・ＳＤ０７の性格であるが、石列を伴う点等を考慮した場合、あるいは何らかの区画溝かと考えられる。時期的には、その検出層位からＳＲ０１やＳＤ０１等よりも新しい時期のものと考えられる。

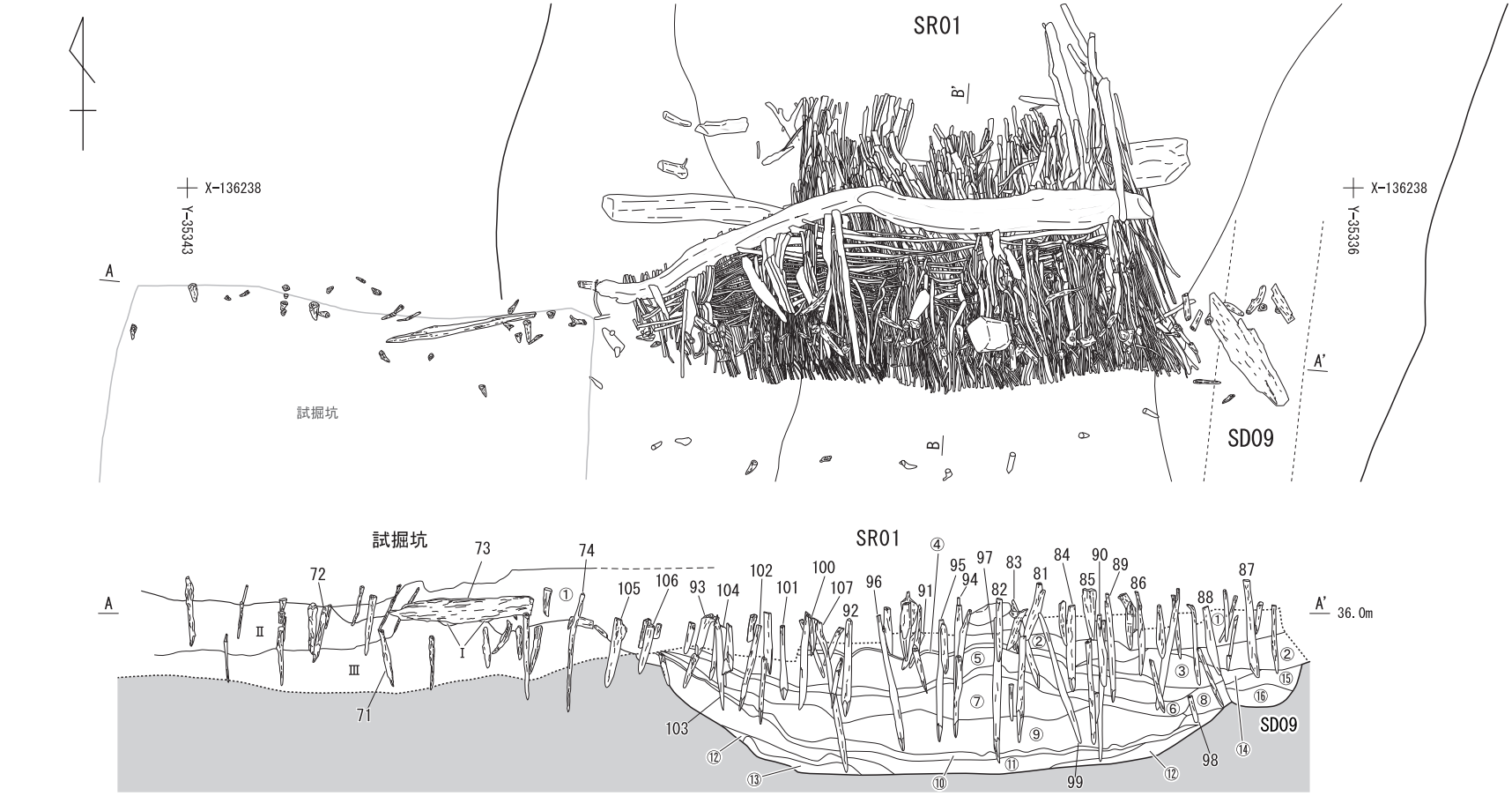


第10図　ＳＲＯ１・堰状遺構実測図

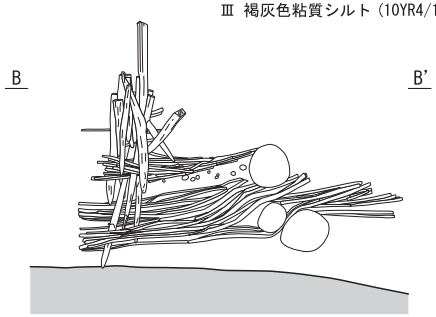
ＳＲ０１　２区中央部のＣ・Ｄ８グリッドに検出された南北に延びる自然流路である。平面プランは、途中で緩やかに東に振れる形であり、北側に広がる形となっている。調査区北側部分での幅は6.4m、オーバーフローする部分の幅は約11mを測る。南側部分の幅は4.8mである。深さは北側部分で1.2m、南側部分で1.1mと後述する堰状遺構の北と南ではわずかに北が深くなる。底部は礫層となり、底部近くには、砂利が堆積している部分も見られた。ＳＲ０１の断面形は、そこが丸底を呈する半円形を呈する。深さ等から考えて、南から北に向かって流れる流路と考えられる。このＳＲ０１からは豊富な遺物が出土しており、山茶碗・叩き目のある須恵器甕、陶磁器、灰釉陶器等がある。特に川底近くから完形の山茶碗が多く出土している。遺物の主体をなすのは山茶碗であるが、それらはＳＤ０１出土のものよりやや古い様相を示すものも含まれ、12世紀後半から13世紀前半の年代が考えられる。このＳＲ０１は、古代から中世の時期にこの一帯に形成された小河川であり、北に向かって流れ、現在の吉沢川に合流するものかと考えられる。前述のようにＳＲ０１の川底近くからは、完形の山茶碗が多く出土しているが、単に廃棄されたものか、あるいは何らかの意図をもってそこに投げ込まれたものか定かではない。後述する堰状遺構や前述のＳＤ０１等を考え合わせると、水利等と関係する祭祀かもしれない。

堰状遺構　その検出状況をまとめてみると、当初はＳＲ０１を横断する形で杭列を検出している。この杭列は西の試掘坑部分にも延びていた。杭列の北側には径25㎝程の丸太が横倒しになっており、その上に細かな枝木が被さる状態であった。また、木杭列の南側には、木の葉が大量に重なり合って埋まっていた。これらの枝木や木の葉については、調査時に流木や流れ込んだものと判断して、その一部については除去した。その後枝木は重層的にあり、杭列はそれらの枝木に打ち込まれていると判断された。構造的には、枝木の層を３層確認することができた。現地では、堰あるいは簗の遺構ではないかと想定され、当センター発行の考古通信等では、簗遺構であるとの見解で報告した。しかし、後述する理由から簗ではなく、堰であると考え、堰状遺構として記載する。

次に、堰状遺構の構造について見ていくこととする。前述するようにＳＲ０１を横切る形で径10㎝程の杭が２列に打たれ、一部は西側の試掘坑部分まで延びている。杭列前方（南側）には、木の葉が集中していたが、この遺構に伴うものか、流れ込んで溜まったものかははっきりしない。また杭列の後方には、丸太の横木と細かい枝木を並べたものが、間に土を挟む形で３層認められた。上から第１層とするが、第１層は径15～25㎝、長さ3.4m程の丸太を横にし、細かい枝木を一部横木と平行に置き、その上に横木と直行する形に幅3.2m程に並べている。第１層と第２層の間には、黒褐色土塊を斑点上に含む灰黄褐色シルト質土がある。第２層目は、やはり径18㎝、長さ2.7m程の丸太を横木とし、それを枕にするように細かい枝木を直交する方向で幅3.2m程並べている。枝木は元を北側にする形で、枝先を南側にするように並べられている。第２層と第３層との間には、暗灰黄色粘質シルトと黒褐色粘質シルト、褐灰色砂質シルトがモザイク状に混じる層と暗黄灰色砂質土塊が斑点状に混じる黒褐色粘質シルト層が挟まれている。第３層についても、径23㎝、長さ2.4m程の丸太を横木とし、それを枕とするように細かい枝木を幅2.6mの範囲に並べている。これらの枝木の層は、横木を枕にする形の分、北側が高くなっており、流れに対して斜めとなっている。また、北側の杭列であるが、これらの枝木の層を突きぬく形で打ち込まれており、これらの枝木の層が構築されたのちに打ち込まれたものと考えられる。なお、枝木については特に蔓や縄状のもので編まれているという状況は確認されていない。これらの構築物について、３層あることから３時期にわたって構築されたというより、間の土層も含めて１度に構築されたものではないかと考えられる。堤や堰等を強固に構築する工法として、細かい枝木や木の葉等と土を交互に積み重ねて盛土していく「敷葉工法」という古くからの工法があるが、今回発見された構築物が一体のものであると考えれば、この「敷葉工法」が使われていると考えられる。この構築物が、川の流れを堰き止めて、その水位をコントロールするための堰と考えた場合、流れに対して強固なものにするため、



試掘坑北壁面
Ⅰ　黒褐色粘質シルト（10YR3/1）
Ⅱ　灰黄褐色粘質シルト（10YR6/2）　鉄分を含む
Ⅲ　褐灰色粘質シルト（10YR4/1）

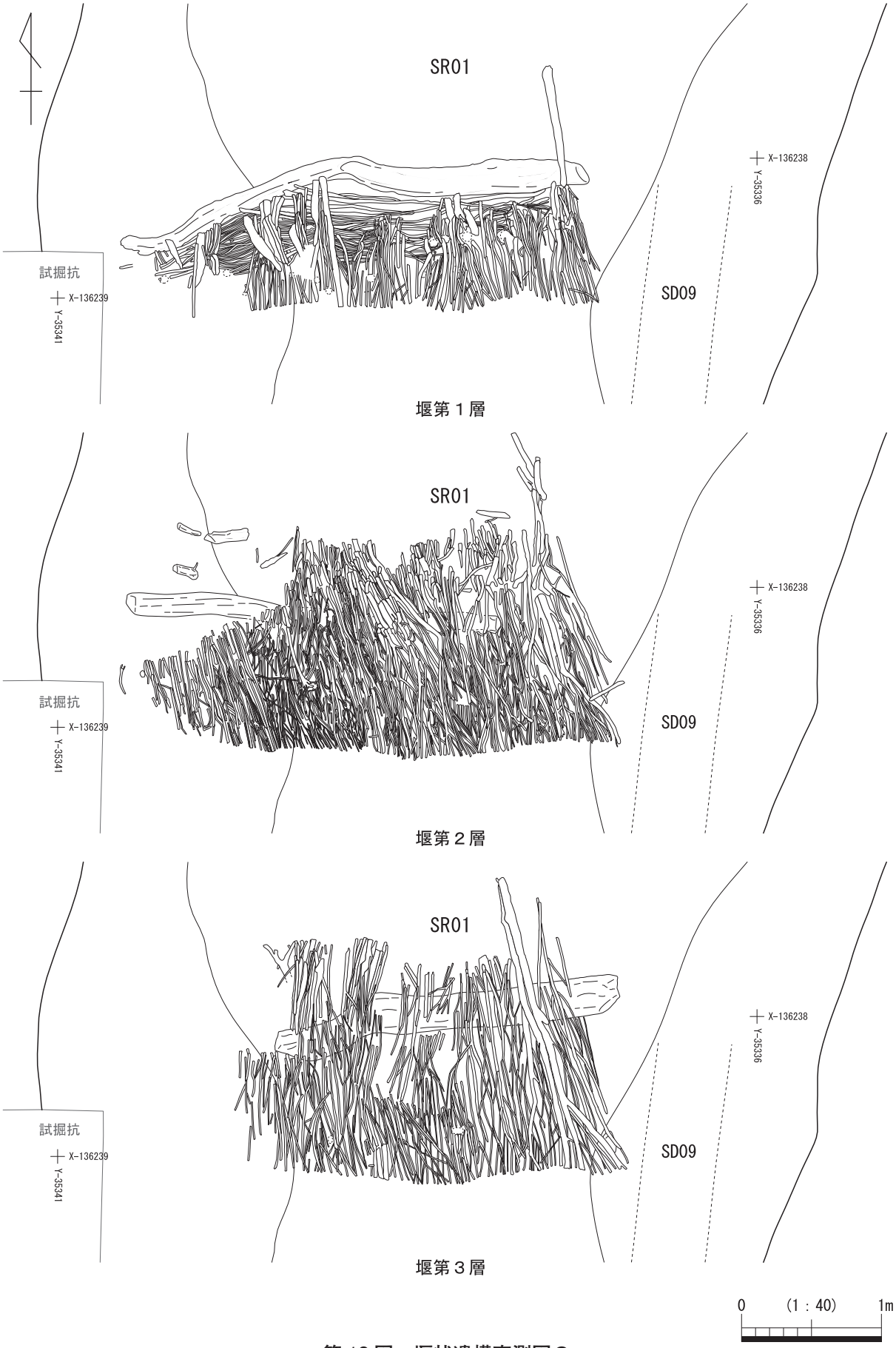


SR01 堰状遺構断面
① にぶい黄褐色砂質シルト（10YR4/3）と黒色砂質シルト（10YR2/1）と褐色砂質シルト（10YR4/1）のまだら　鉄分を含む
② 黒色砂質シルト（10YR2/1）とにぶい黄褐色砂質シルト（10YR4/3）のまだら
③ 黒褐色砂質シルト（10YR3/2）
④ 植物遺体の層
⑤ 灰黄褐色粘質シルト（10YR4/2）黒褐色土塊を斑点状に含む
⑥ 植物遺体の層
⑦ 暗灰黄色粘質シルト（2.5YR5/2）と黒褐色粘質シルト（10YR2/2）と褐灰色砂質シルト（10YR4/1）のモザイク状に混じり
⑧ 灰白色砂質シルト（2.5YR8/1）と黒褐色砂質シルト（10YR3/1）の互層
⑨ 黒褐色粘質シルト（10YR2/2）暗灰黄色砂質土塊を斑点状に含む
⑩ 植物遺体の層
⑪ 黒色粘質シルト（10YR2/1）黒褐色土塊を斑点状に含む
⑫ 褐灰色粘質シルト（10YR4/1）黒褐色土塊を斑点状に含む
⑬ 褐灰色粘質シルト（10YR4/1）

SD09
⑭ 暗灰黄色砂質シルト（2.5Y4/2）
⑮ オリーブ褐色砂質シルト（2/5Y4/3）30mm 以下の礫を多数含む
⑯ 黄灰色砂質シルト（2.5Y4/1）鉄分を含む

0　（1：40）　1m

第 11 図　堰状遺構実測図 1

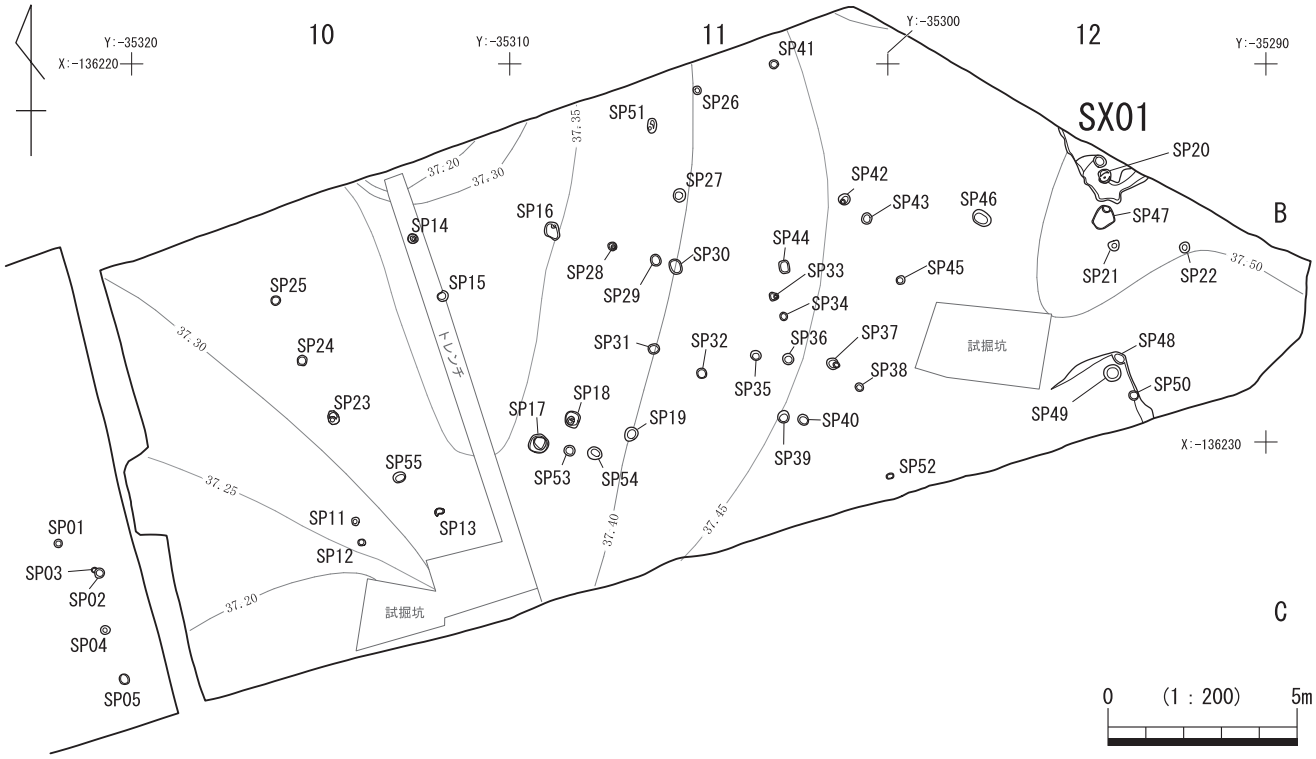


第 12 図　堰状遺構実測図２

渡来人がもたらしたとされるこの伝統工法がとられたものと考えられる。
なお、当初検討した簗という可能性については、以下の観点から、はずすこととした。
・ＳＲ０１自体、それほど大きな河川ではなく、流れもそれほど速いものではなかったと考えられ、そうした小河川を全面的に塞ぎ、簗を構築することは考えられず、流れをコントロールして魚を誘導する施設も見られない。
・この遺構を簗とした場合、少なくとも３時期全く同じ個所に間の堆積土を除去することもなく、新たな簗を構築したことになり、簗を通して水が流れにくい状況となる。
・ＳＲ０１の南西に延びるＳＤ０１を水路と考えた場合、その位置関係から見て、このＳＲ０１から取水していた可能性は高く、この構築物は取水のための水位調節を行う堰と考えた方の妥当性が高い。

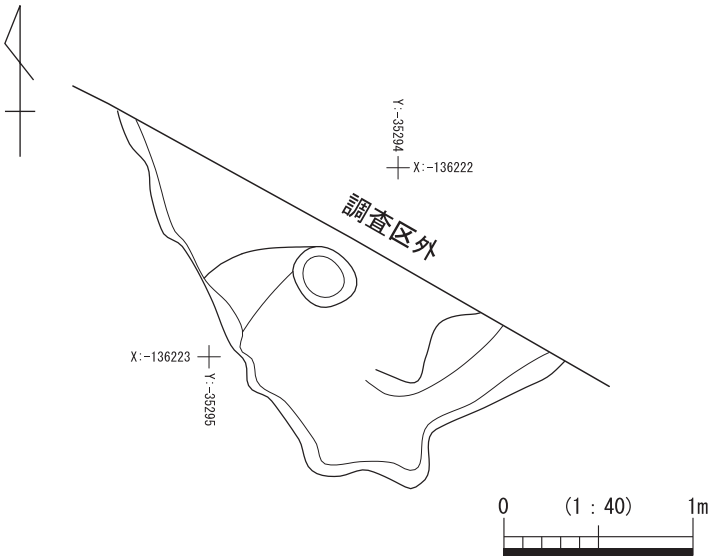
今回この堰とした構築物に用いられた材は､残念ながら加工痕のある杭のみしか取上げてきておらず、枝木や木の葉については、サンプリングしてこなかった。そのため、樹種同定を行ったのは、杭のみであるが、その結果は極めて興味深いものとなっている。このような構築物を構築する際は、ある程度材を選別しているのではないかと考えたが、結果は多種多様の材を使っていることが判明した。詳細については、付編の東北大学植物園鈴木三男先生の樹種同定報告を見ていただきたいが、同定された樹種は集落近くの雑木林を構成するものであり、そうした場所からさまざまな木々を伐採して、この堰状遺構の構築材としたと考えられる。このような状況から考えると、海戸田遺跡で確認されたＳＤ０１やこの堰状遺構等の利水施設の建設は、大規模に行われたというよりは、この一帯の開発集団によるものと考えられる。海戸田遺跡の上層の包含層からは、古代末から中世の遺物が豊富に出土しており、その中には青磁等の貿易陶磁もある。そのことから考えると､周辺にそうした集落等が展開するのかもしれない。

ＳＤ０９　ＳＲ０１の堰状遺構が構築された後に東側法面部分に掘り込まれた溝状遺構である。幅0.5ｍ、深さ0.2ｍを測るが、あくまでも土層断面で確認されたものであり、独立するものか、あるいは堰状遺構に伴うものなのか、不明である。



第 13 図　１区遺構全体図（上層遺構）

ＳＸ０１　１区Ｂ12グリッド北側、調査区東端で、中世の遺物包含層である基本土層第５層を掘り下げた段階に検出された遺構。その大半が調査区外に広がっており、全容は明確ではないが、検出された部分から平面方形を呈するものと考えられる。覆土は暗褐色シルトと黄褐色シルトが混じったものであり、炭化物がブロック状に混入する。検出された範囲では、特に床面状を呈する状況は見られず、壁際がやや深くなっていた。一部に中世の小穴遺構（ＳＰ２０）が掘り込まれている。覆土中から山茶碗・弥生土器の小破片が出土している。中世段階の遺構と考えられる。



第14図　ＳＸ０１実測図

第３表　小穴遺構（ＳＰ）計測表

№.	遺構名	挿図	調査区	グリッド	検出層位	長径（m）	短径（m）	深さ（m）	平面形状	覆土	備考
1	ＳＰ０１	第13図	２区	Ｃ９	第９層下	0.22	0.22	0.13	円形		
2	ＳＰ０２	第13図	２区	Ｃ９	第９層下	0.27	0.25	0.15	楕円形		
3	ＳＰ０３	第13図	２区	Ｃ９	第９層下	(0.16)	0.14	0.05	楕円形		ＳＰ０２に切られる
4	ＳＰ０４	第13図	２区	Ｃ９	第９層下	0.26	0.22	0.14	楕円形		
5	ＳＰ０５	第13図	２区	Ｃ９	第９層下	0.28	0.25	0.07	楕円形		
6	ＳＰ１１	第13図	１区	Ｃ10	第５層下	0.22	0.21	0.28	円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土・炭化物混じり	
7	ＳＰ１２	第13図	１区	Ｃ10	第５層下	0.2	0.17	0.23	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	山茶碗・土師器片
8	ＳＰ１３	第13図	１区	Ｃ10	第５層下	0.25	0.17	0.32	空豆形	暗褐色シルト質土、黒味が強い部分が上層	土師器片
9	ＳＰ１４	第13図	１区	Ｂ10	第５層下	0.28	0.25	0.23	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
10	ＳＰ１５	第13図	１区	Ｂ10	第５層下	0.3	(0.3)	0.47	円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
11	ＳＰ１６	第13図	１区	Ｂ11	第５層下	0.5	0.4	0.16	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	土師器片
12	ＳＰ１７	第13図	１区	Ｂ・Ｃ11	第５層下	0.52	0.49	0.44	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土・炭化物混じり	山茶碗・土師器片
13	ＳＰ１８	第13図	１区	Ｂ11	第５層下	0.42	0.39	0.23	隅丸方形	暗褐色シルト質土、黄褐色土・炭化物混じり	
14	ＳＰ１９	第13図	１区	Ｂ11	第５層下	0.4	0.35	0.16	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土・炭化物混じり	土師器片
15	ＳＰ２０	第13図	１区	Ｂ12	第５層下	0.37	0.33	0.32	だるま形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	弥生土器片
16	ＳＰ２１	第13図	１区	Ｂ12	第５層下	0.3	0.29	0.24	円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
17	ＳＰ２２	第13図	１区	Ｂ12	第５層下	0.29	0.26	0.13	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土・炭化物混じり	
18	ＳＰ２３	第13図	１区	Ｂ10	第10層下	0.38	0.3	0.35	楕円形	黒褐色シルト質土、褐色土混じり	
19	ＳＰ２４	第13図	１区	Ｂ10	第10層下	0.27	0.25	0.21	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
20	ＳＰ２５	第13図	１区	Ｂ10	第10層下	0.25	0.25	0.21	円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
21	ＳＰ２６	第13図	１区	Ｂ12	第10層下	0.23	0.21	0.22	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
22	ＳＰ２７	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.35	0.32	0.21	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
23	ＳＰ２８	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.24	0.22	0.24	楕円形	暗褐色シルト質土・黒褐色シルト質土	
24	ＳＰ２９	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.32	0.28	0.12	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
25	ＳＰ３０	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.42	0.33	0.16	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
26	ＳＰ３１	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.3	0.28	0.09	円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
27	ＳＰ３２	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.28	0.25	0.09	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
28	ＳＰ３３	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.24	0.23	0.17	円形	暗褐色シルト質土、灰黄褐色ブロック混じり	
29	ＳＰ３４	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.23	0.2	0.14	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土・炭化物混じり	土師器片
30	ＳＰ３５	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.29	0.26	0.16	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
31	ＳＰ３６	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.3	0.28	0.21	円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
32	ＳＰ３７	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.35	0.3	0.21	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
33	ＳＰ３８	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.23	0.2	0.2	楕円形	暗褐色シルト質土、上層黄褐色ブロック混じり	
34	ＳＰ３９	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.32	0.3	0.22	円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
35	ＳＰ４０	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.3	0.26	0.2	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
36	ＳＰ４１	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.25	0.23	0.12	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	
37	ＳＰ４２	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.3	0.3	0.29	円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	弥生土器片
38	ＳＰ４３	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.3	0.28	0.2	円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	弥生土器片
39	ＳＰ４４	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.34	0.27	0.16	隅丸方形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	弥生土器片
40	ＳＰ４５	第13図	１区	Ｂ12	第10層下	0.25	0.22	0.12	楕円形	暗褐色シルト質土、下層黄褐色土混じり	弥生土器片
41	ＳＰ４６	第13図	１区	Ｂ12	第10層下	0.52	0.38	0.09	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	弥生土器片
42	ＳＰ４７	第13図	１区	Ｂ12	第10層下	0.65	0.6	0.13	楕円形	暗褐色シルト質土、上層黄褐色ブロック混じり	
43	ＳＰ４８	第13図	１区	Ｂ12	第10層下	0.4	0.27	0.16	楕円形	褐灰色シルト質土・暗褐色シルト質土	
44	ＳＰ４９	第13図	１区	Ｂ12	第10層下	0.47	0.44	0.17	円形	暗褐色シルト質土、褐色土混じり	
45	ＳＰ５０	第13図	１区	Ｂ12	第10層下	0.25	0.25	0.11	円形	暗褐色シルト質土、褐色土混じり	
46	ＳＰ５１	第13図	１区	Ｂ11	第10層下	0.39	0.24	0.26	楕円形	暗褐色シルト質土	
47	ＳＰ５２	第13図	１区	Ｃ12	第10層下	0.2	0.16	0.06	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色ブロック・炭化物混じり	土師器片
48	ＳＰ５３	第13図	１区	Ｃ11	第10層下	0.3	0.28	0.09	楕円形	暗褐色シルト質土、褐色土・黄褐色土混じり	
49	ＳＰ５４	第13図	１区	Ｃ11	第10層下	0.4	0.33	0.3	楕円形	暗褐色シルト質土、褐色土・黄褐色土混じり	
50	ＳＰ５５	第13図	１区	Ｃ10	第10層下	0.33	0.26	0.19	楕円形	暗褐色シルト質土、黄褐色土混じり	

小穴遺構（ＳＰ０１～ＳＰ０５、ＳＰ１１～ＳＰ５５）

径0.2 ～ 0.5mの平面プランが円形ないしは楕円形の穴を小穴遺構（ＳＰ）としてまとめた。これらは２区東側のＣ９グリッド東側で検出されたＳＰ０１～ＳＰ０５の他、主として１区のやや高くなった微高地上に検出されている。２区で検出されているＳＰ０１～ＳＰ０５については、下層の包含層である暗褐色粘質シルト層（第９層）を掘削した段階で、検出しているが、形状等から１区の小穴遺構と同様、上層遺構を下層の段階で、確認したものと考えた。１区のものをみると、B11グリッド付近にやや集中している状況が窺われる。１区の小穴遺構で、中世の包含層と考えた鉄分を含むにぶい黄褐色粘質シルト層（第５層）を除去した段階で検出されたのが、ＳＰ１１～ＳＰ２２の11基である。ＳＰ２３～ＳＰ５５は､褐色混じりの灰黄褐色シルト層（第10層）を除去した段階で検出している。１区の中世の包含層下は、後世の耕作痕により、遺構を検出するのが難しい状況であった。そのため、ＳＰ２３～ＳＰ５５については、下層の包含層を外した段階で確認できた状況であった。これらの小穴遺構の埋土は、基本的には暗褐色シルト質土に黄褐色土ないしは褐色土が混入し、一部のものには炭化物の混入も認められる。また、これらの小穴遺構には、山茶碗、土師器、弥生土器の細片が出土しているものもある。弥生土器片については、付近の包含層からの混入と考えられる。これらの小穴遺構について、多少大きさにばらつきもあるが、微高地部分に広がるものは、あるいは建物の柱穴と考えたい。しかしながら、建物としてまとまるものはなかった｡時期的には山茶碗の細片が混入している点から中世段階のものと考える｡個々の状況については、第３表にまとめたので参照していただきたい。

２　下層の遺構

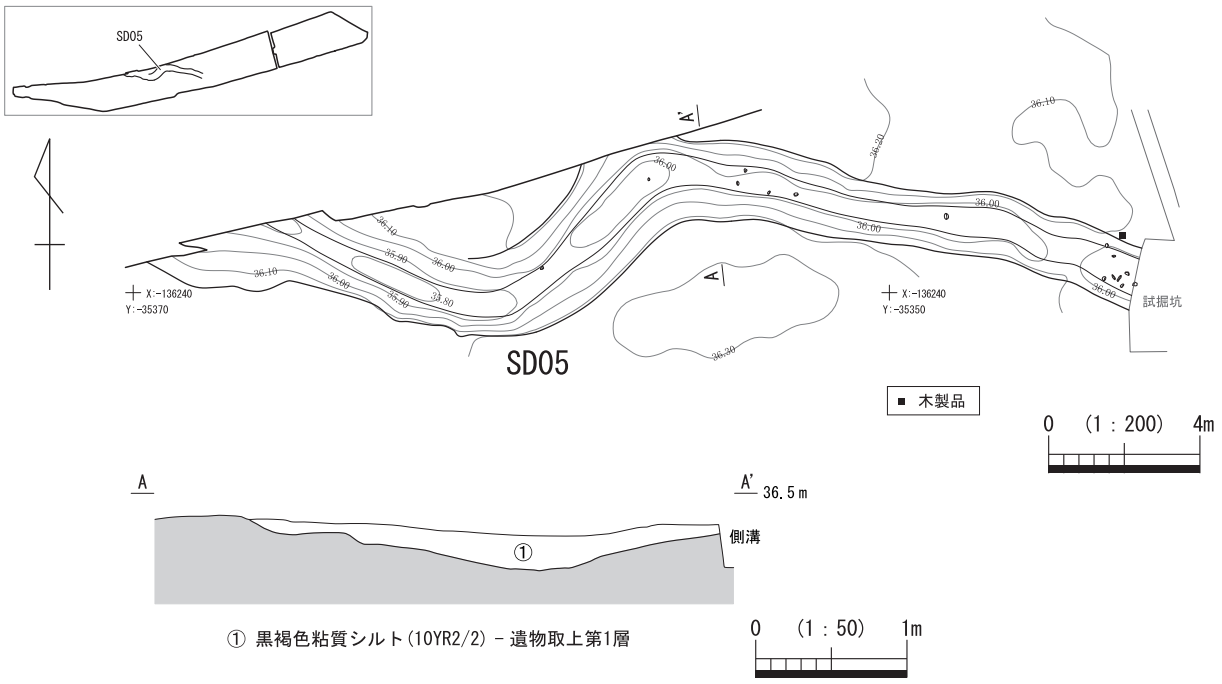
（１）遺構の検出状況

古墳時代から奈良・平安時代の遺物包含層と考えた第７層（鉄分を含む黒褐色粘質シルト層）、第８層（鉄分を含む褐色粘質シルト層）、第９層（鉄分を少量含む暗褐色粘質シルト層）、第10層（褐色土混じりの灰黄褐色シルト層）の下から検出された遺構であり、小穴遺構を除くＳＤ０５、ＳＤ０８、ＳＤ１０、ＳＤ１１、ＳＤ１２、ＳＤ１３等の溝状遺構、ＳＸ０２、ＳＸ０３、ＳＸ０４等がある。主として２区から１区にかけて検出されている。なお、これらの遺構のうち、出土した遺物等から、ＳＤ０５は、古墳時代、ＳＤ０８、ＳＤ１２は奈良・平安時代のものと考え、他のＳＤ１０、ＳＤ１１、ＳＤ１３、ＳＸ０２、ＳＸ０３、ＳＸ０４は弥生時代のものと考えた。

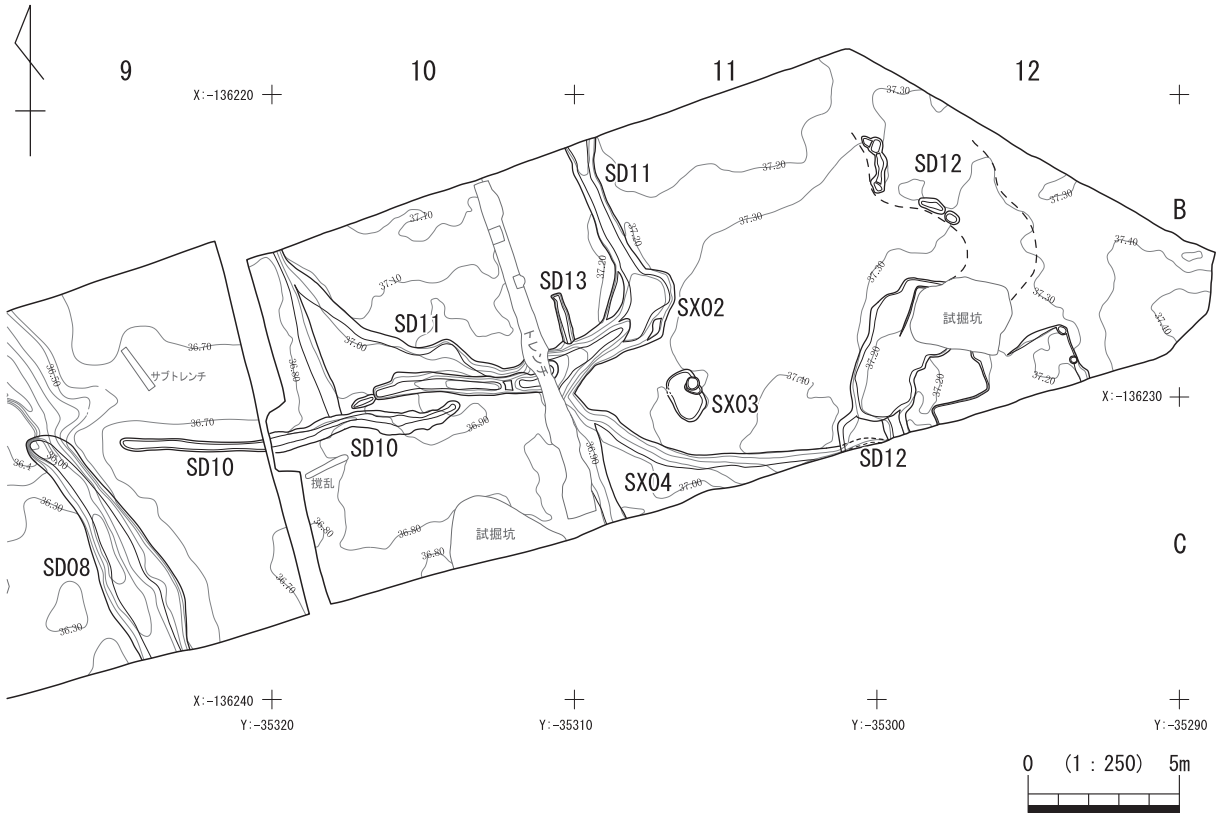
（２）各遺構の状況

ＳＤ０５　古墳時代から奈良・平安時代の包含層と考えた鉄分を含む黒褐色粘質シルト層（第７層）を取り除いた段階で検出された遺構であるため、下層遺構として扱った。３区Ｃ５グリッド南半部分から２区Ｄ７グリッド北半部へ途中屈曲しながら、平面プランが緩い「Ｓ」の字状を呈して延びる溝状遺構である。幅1.5 ～ 2.4m、深さ0.25mを測る、広く浅い溝である。覆土は、黒褐色粘質シルトであり、遺物としては、土師器の細片とともに、古墳時代の高坏の脚部と思われるものも出土している。東端は試掘坑に当たり、西端は調査区外に延びている。他の遺構との関係も不明であり、特に試掘坑北壁に確認された杭列や横木との関係がはっきりせず、ＳＤ０５に伴うものなのか、あるいはＳＲ０１の堰状遺構に伴うものなのか、明確にすることができなかった。そうした状況からこの溝の性格も明らかにすることができなかった。時期的にはその検出状況や出土遺物から、古墳時代のものかと考えられる。

ＳＤ０８　２区Ｃ９グリッドに検出された溝状遺構である。古墳時代から奈良・平安時代の包含層と考えた暗褐色粘質シルト層（第９層）下で確認されている。最大幅2.5mを測り、南南東方向から北北西方向に延びて、北端部分は丸く納まり、消失する。南端部は調査区外へと延びている。深さ0.3m程で黄褐色粘質土に分けることができる。ＳＤ０８からは、細かい叩き目のある須恵器甕の口縁部及び胴部

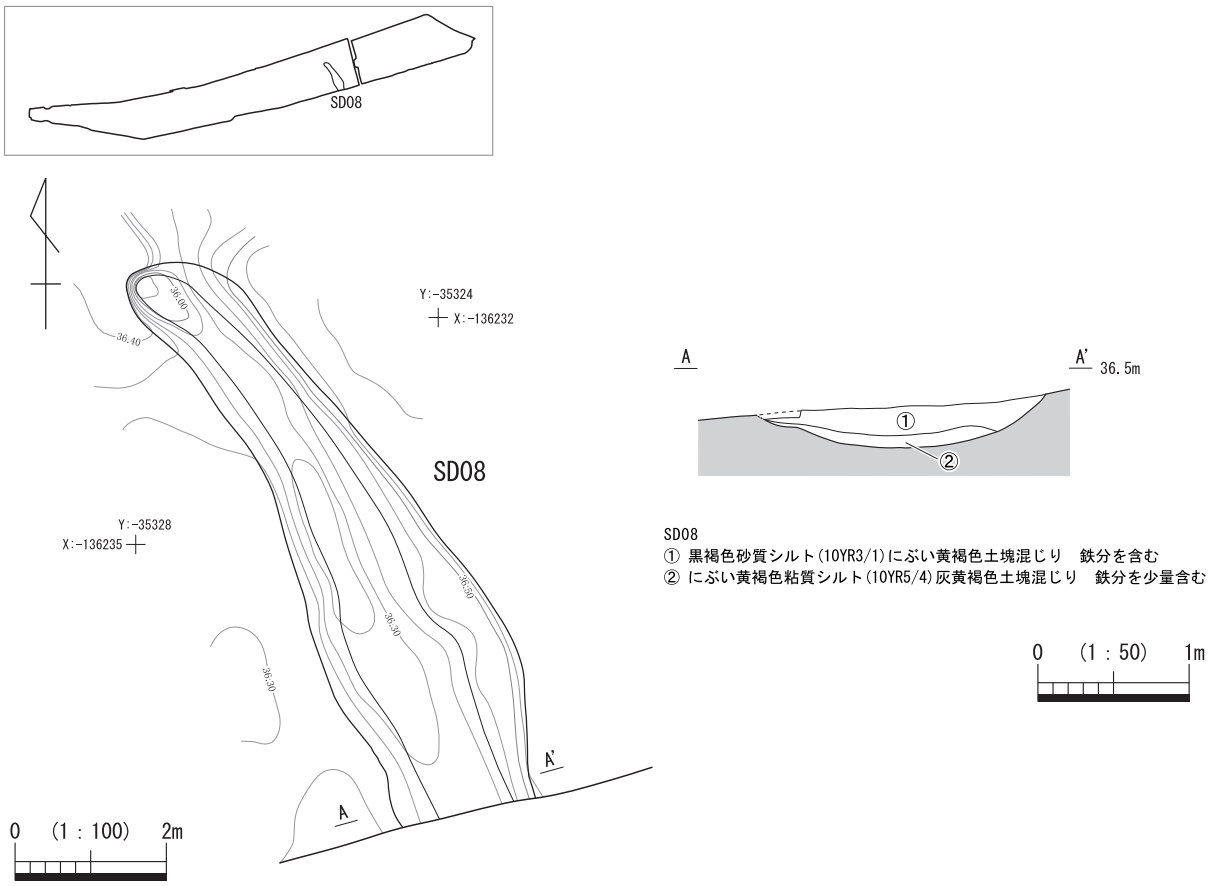


第 15 図　ＳＤ０５実測図



第 16 図　１区・２区遺構全体図（下層遺構）

片や長頸壺の頸部及び底部片、土師器の細片等が出土している。また、細片ではあるが、深鉢の口縁部と考えられる縄文土器が出土している。このＳＤ０８の性格は明確ではないが、第９層下で検出された

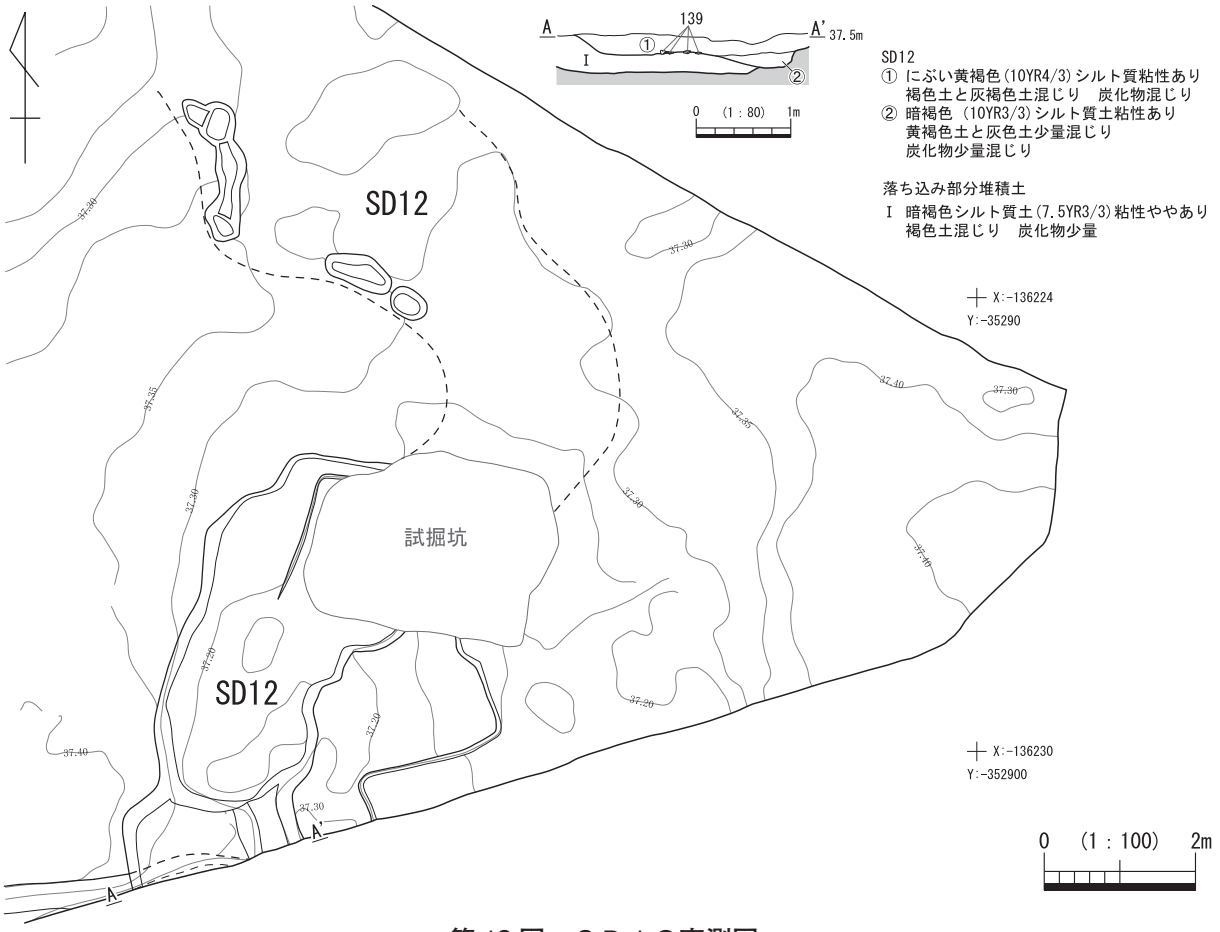


第17図　ＳＤ０８実測図

遺構ではあるが、覆土内の遺物の状況から見ると、中世まではいかないと考えられ、奈良・平安時代の遺構ではないかと考えられる。

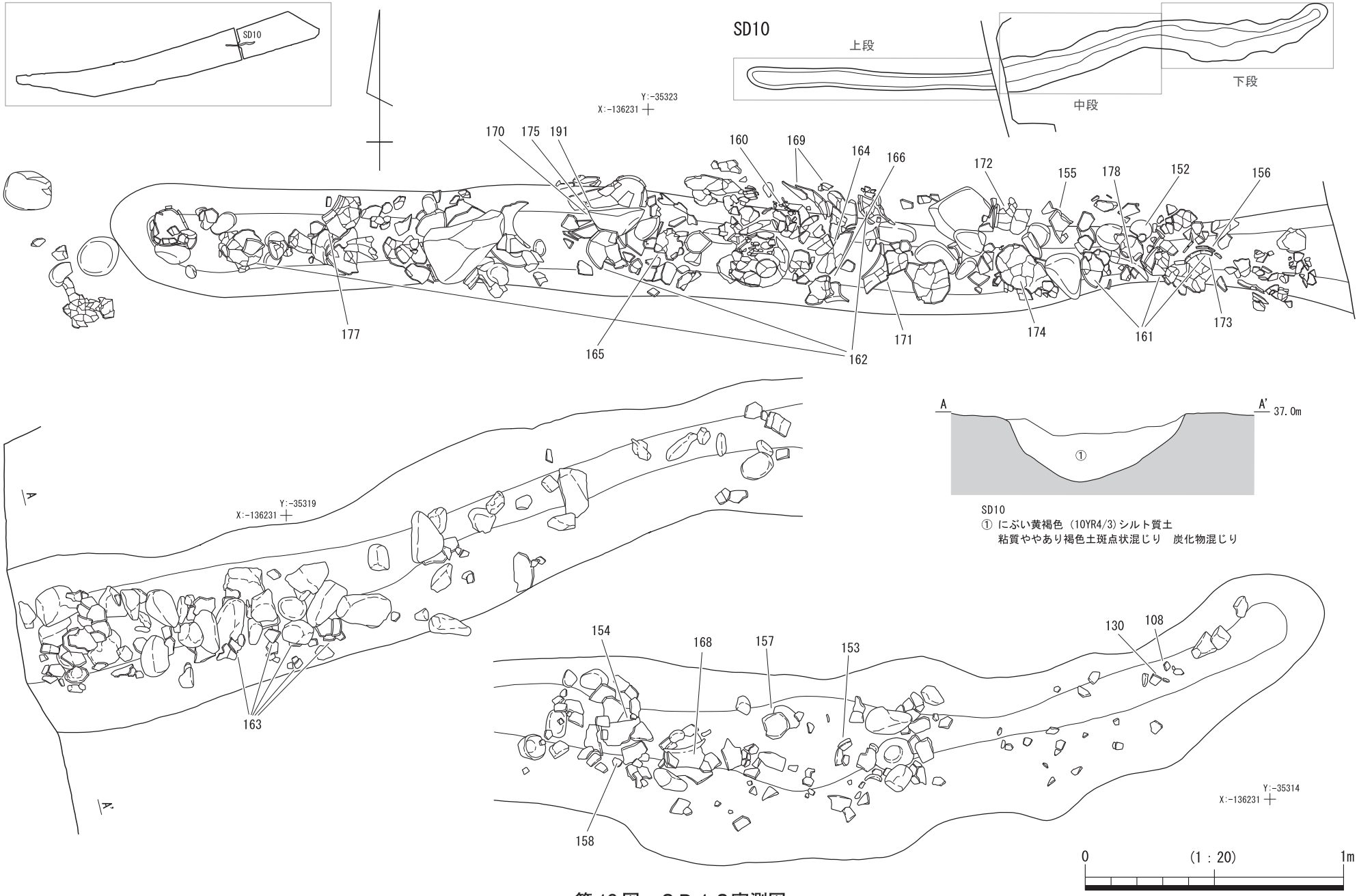
ＳＤ１２　C11～C12グリッドの調査区南壁の土層を検討する中で確認された遺構。断面に土器が所在しており、その北側のB11～B12グリッドに土器が点在して確認されたことから、南北に蛇行する形の溝状遺構があったのではないかと想定したものである。南壁の土層断面から幅2.6m、深さ0.3m程の溝と考えられる。覆土は、上層が褐色土・灰褐色土・炭化物の混じるにぶい黄褐色シルト質土、下層が黄褐色土・灰色土・炭化物が少量混じる暗褐色シルト質土である。土層断面での遺物は、上層下部から出土している。しかしながら、調査区内では、断面に近いC12グリッド北西隅部分で、ある程度プランを追うことができたが、他の部分では必ずしも明確にそのプランを検出することはできず、掘り過ぎによってなくなってしまったか、あるいは溝として連続したものではなかった可能性もある。また、その想定されるプランからみると、溝というより流路に近いものである可能性もある。点在する形で出土した遺物は、土師器や弥生土器の破片であり、土層断面で見つかった土師器は、口縁部が横方向に開く奈良時代の長胴甕であった。弥生土器片には､台付甕の脚部に近い部分のものもあった。遺物の時期は、弥生時代後期から古墳時代、奈良時代のものであり、遺構の時期としては、奈良から平安時代のものと考えられるが、遺構の性格については、不明である。

ＳＤ１０　２区Ｃ９グリッド北側部分から１区C10グリッド北側部分にほぼ東西方向に延びる溝状遺構である。このＳＤ１０内には、弥生土器が割れた状態で20～30cm大の河原石とともに密集する形で確認された。２区の調査時は、周囲の遺物包含層を掘り進める中で、弥生土器や石を確認することとなったが､その時点では溝のプランを確認することができず､弥生土器と石が並ぶ状態のみ確認されている。１区の調査時は、溝のプランの確認を最重点に行った結果、１区の南西部に広がる暗褐色シルト層の落

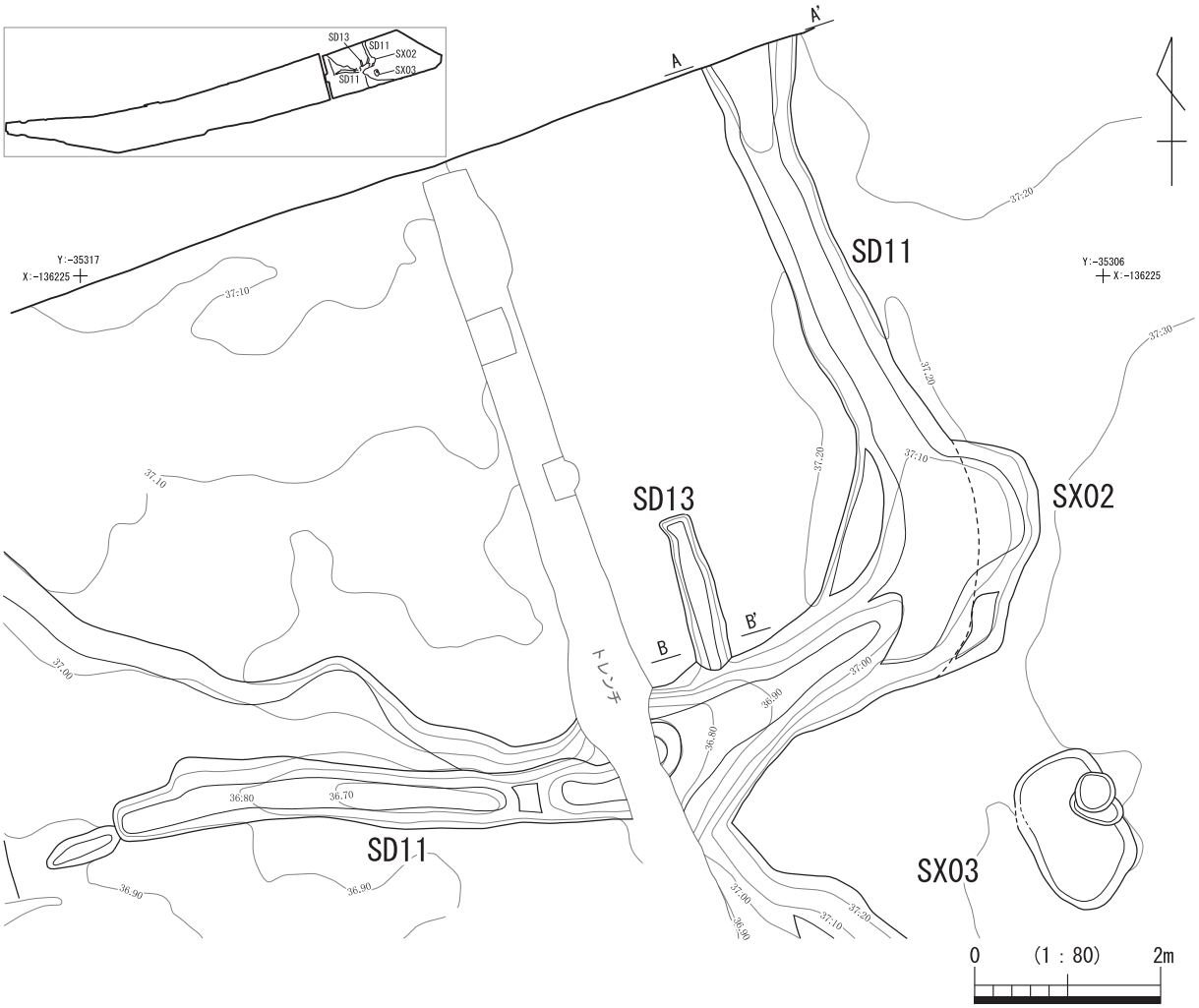


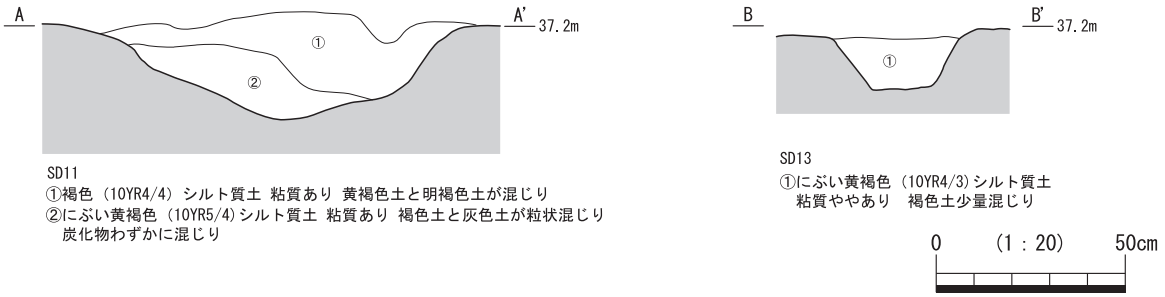
第18図　ＳＤ１２実測図

ち込みに掘り込まれていることが明らかになった。溝としての全長は、11.5m程であり、Ｃ９グリッド部分では、ほぼ東西に直線的に延び、Ｃ10グリッド部分では、わずかに「Ｓ」の字状に屈曲して延びている。その両端は、徐々に浅くなり消失している。１区部分で確認された幅は0.5～0.7m、深さ0.3m程を測る。覆土は褐色土・炭化物混じりの暗褐色粘質シルト質土の１層である。遺物及び石の出土状況をみると、溝の西半部の方が東半部よりもその密集度は高く、東端部はほとんど疎らとなっている。なお、遺物や石の出土位置は、覆土上部であり、溝がある程度埋まった段階でそこに置かれた、あるいは棄てられたものかと考えられる。出土状態をみると、土器はかなり細かく割れた状態であり、その上や間に石が見られる。あるいは、土器を先に廃棄し、さらに石を投げ込んで人為的に細かく砕いている可能性もある。ＳＤ１０から出土した遺物は、弥生土器のみで、器種としては、壺や台付甕であり、中には、ミニチュア土器と思われる壺も見られる。出土した段階では、かなりまとまっており完形に近い状態と考えられたが、なかなか完形に近い状態まで接合できるものは少なかった。時期的には、いずれも弥生時代後期中葉頃のものであり、この地域に分布するいわゆる菊川式土器と呼ばれるものである。溝としての性格ははっきりとはしないが、ミニチュア土器がある点やその出土状態から見ると、何らかの祭祀に使用された土器をこのＳＤ１０に廃棄し､それを石で破壊するような行為が行われたのかもしれない。ＳＤ１０の遺物が祭祀に使われたものとすると、そういった祭祀が行われた場所はどこであろうか。また、どのような目的の祭祀が、どのような集団によって行われていたのであろうか。海戸田遺跡という沖積地に所在する遺跡のＳＤ１０等のこの時期の遺構については、海戸田遺跡の東側の段丘上の同時期の集落である赤谷遺跡や祢宜屋敷遺跡等との関連を踏まえ、この時期のこの一帯の開発状況と合わせて検討していく必要があろう。



第19図　ＳＤ１０実測図





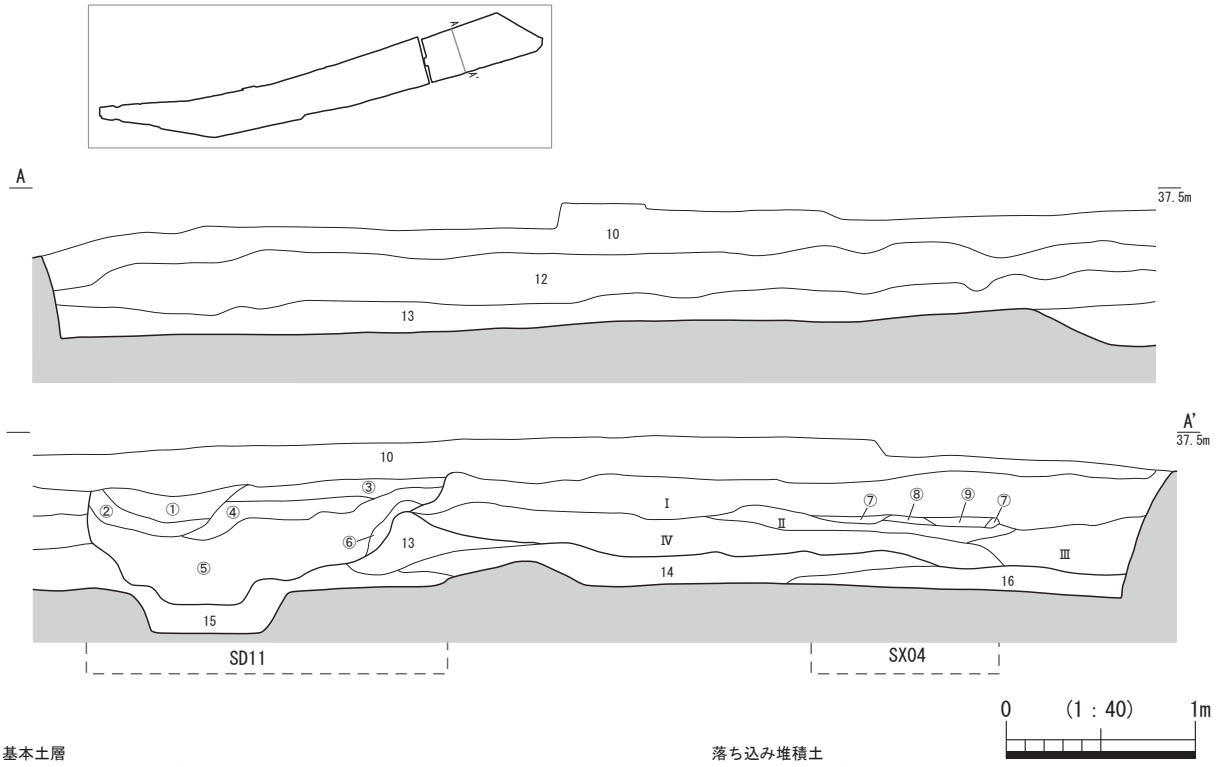
第20図　ＳＤ１１・ＳＤ１３・ＳＸ０２・ＳＸ０３実測図

ＳＤ１１　B11グリッドから南南東に向かって延び、途中で大きく方向を変え、西に向かって延びる溝状遺構であり、その西端はＳＤ１０の北側部分に達する。ＳＤ１０と同様、その西側部分は、１区南西部の落ち込み部分に掘り込まれている。調査区北壁部分では、幅1.0m、深さ0.3mを測り、西に屈曲して延びる先のトレンチとの交差部分では、幅1.85m、深さ0.6mとなっている。北壁部分から南に向かう部分は、幅0.8～1.0mと比較的幅が狭く、屈曲して西に向かう部分は、幅も広くなり深さも深くなる。覆土は、東側の微高地部分では、①褐色シルト質土②にぶい黄褐色シルト質土となっており、トレンチ交差部分では、①暗褐色シルト質土②褐色シルト質土③にぶい黄褐色シルト質土④暗褐色シルト質土⑤黒褐色シルト質土⑥にぶい黄褐色シルト質土に分けられる。ＳＤ１１からは、台付甕等の弥生土器片が出土している。時期的には、ＳＤ１０で出土している遺物とほぼ同時期のものであり、ＳＤ１１の時期

はＳＤ１０とほぼ同時期のものと考えられる。その形状からみてなんらかの区画の溝と考えられる。あるいは微高地上から低地に向かってＳＤ１１の底の部分が低くなっていることから、排水関係の遺構の可能性もある。いずれにしてもＳＤ１１について考えた場合、この溝の微高地側に何らかの施設があった可能性もある。微高地と低地部分の境に祭祀に使われたと考えられる土器が廃棄されたＳＤ１０があり、それとの関係も考慮すれば、祭祀等の場が所在した可能性も考えられる。

ＳＤ１３　１区B10グリッド南東部に検出された溝状遺構である。ＳＤ１１の屈曲部分の西側部分で、ＳＤ１１から分岐して北に延びている。幅0.4m、検出面からの深さ0.12m、延長1.6mを測る。底部が平底を呈する逆台形の断面形となっている。覆土はにぶい黄褐色シルト質土であり、遺物は弥生土器の小片が出土している。このＳＤ１３は、その位置から考えて、区画溝あるいは排水溝かと考えたＳＤ１１に付随するものであり、排水等の機能を有していたものではないかと考えられる。前述の微高地側の何らかの施設からＳＤ１１に繋がるものであった可能性も考えられる。

ＳＸ０２　ＳＤ１１の屈曲部を掘り進める段階で、遺物が出土する範囲を追いかけていった結果、円形の土坑状を呈するものとなった。平面プランは、2.6m×2.0m程の楕円形を呈する。深さはＳＤ１１からはずれた部分で、0.2m程である。ＳＤ１１を掘り上げた後に検出されたことから、ＳＤ１１より古い時期のものと考えられる。出土した弥生土器は甕や壺が見られるもののほとんどが細片であり、時期



基本土層
10 にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト質土　粘質少々あり　褐色土混じり
12 黄褐色（2.5Y5/4）　シルト質土　粘質あり　褐色土と灰色土が細かく混じり
13 暗褐色（7.5YR3/3）シルト質土　粘質少々あり　褐色土混じり
14 灰褐色（7.5YR4/2）シルト質土　粘質少々あり　褐色土少量混じり　褐灰色土混じり
15 褐灰色（10YR5/1）　シルト質土　粘質少々あり　黄褐色土ブロック状混じり
16 褐灰色（10YR4/1）　シルト質土　粘質あり

落ち込み堆積土
Ⅰ 暗褐色（10YR3/3）　シルト質土
粘質少々あり　褐色土混じり
Ⅱ 暗褐色（10YR3/3）　シルト質土　粘質少々あり
褐色土と褐灰色土が混じり　炭化物少量混じり
Ⅲ 暗褐色（7.5YR3/3）シルト質土　粘質少々あり　褐色土筋状混じり
Ⅳ 暗褐色（7.5YR3/3）　シルト質土　粘質あり　褐色土少量混じり

SD11
① 暗褐色（10YR3/4）シルト質土　粘質少々あり　黒褐色土粒状混じり
黄褐色土少量混じり　炭化物少量混じり
② 褐色（10YR4/4）　シルト質土粘質あり　灰黄褐色土と褐色土が粒状混じり
炭化物少量混じり
（遺物取上 第１層）
③ にぶい黄褐色（10YR4/3）　シルト質土　粘質あり　黄褐色土混じり
④ 暗褐色（10YR3/3）　シルト質土　粘質あり　黄褐色土ブロック状混じり
⑤ 黒褐色（10YR3/2）　シルト質土　粘質少々あり　褐色土少量混じり
⑥ にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質土　粘質あり　黄褐色土少量混じり
（遺物取上 第２層）

SX04
⑦ 黒色（10YR2/1）シルト質土　粘質少々あり
暗褐色土混じり　炭化物混じり
⑧ 明黄褐色（2.5Y6/8）　シルト質土　粘質少々あり
暗褐色土ブロック状混じり
⑨ 赤褐色（2.5YR4/6）　シルト質土　粘質少々あり
黄褐色土混じり
（焼土）

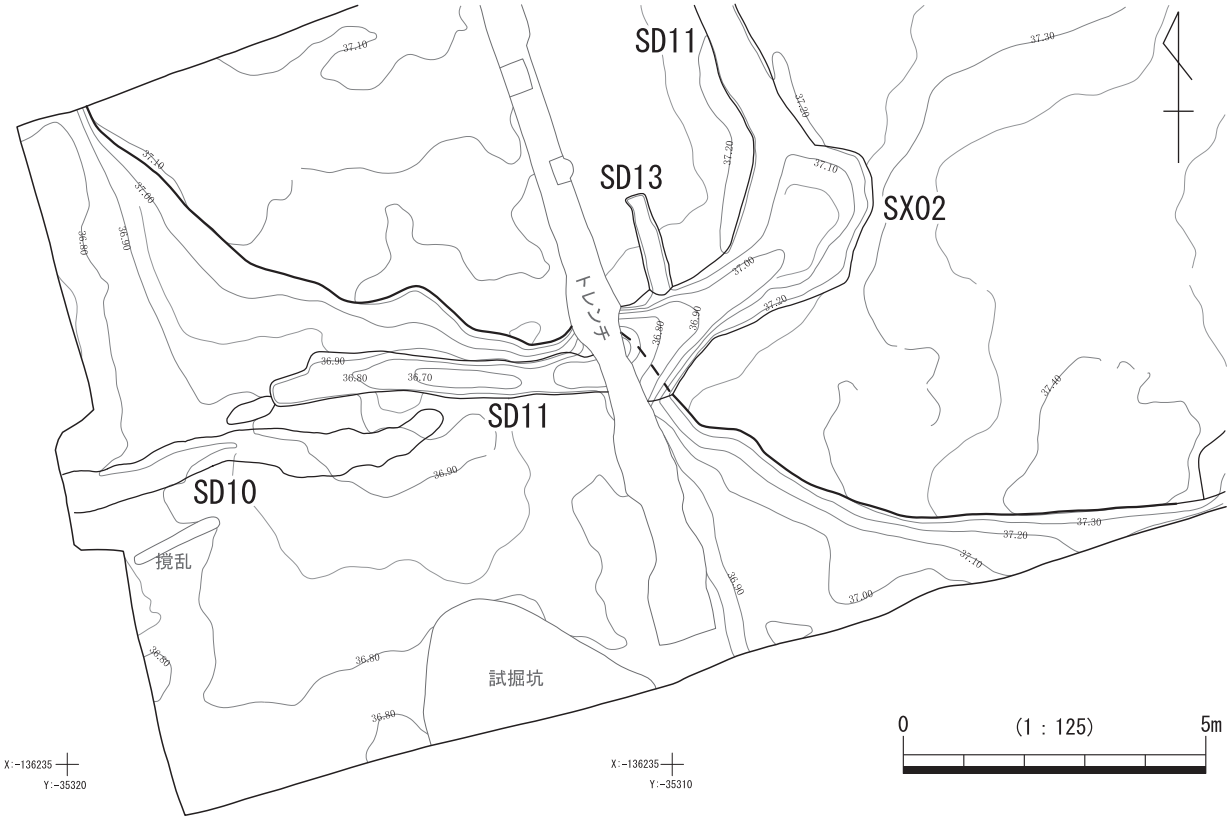
第21図　１区中央部分南北土層状況図

的にはＳＤ１１のものとほとんど時期差はないものと思われる。

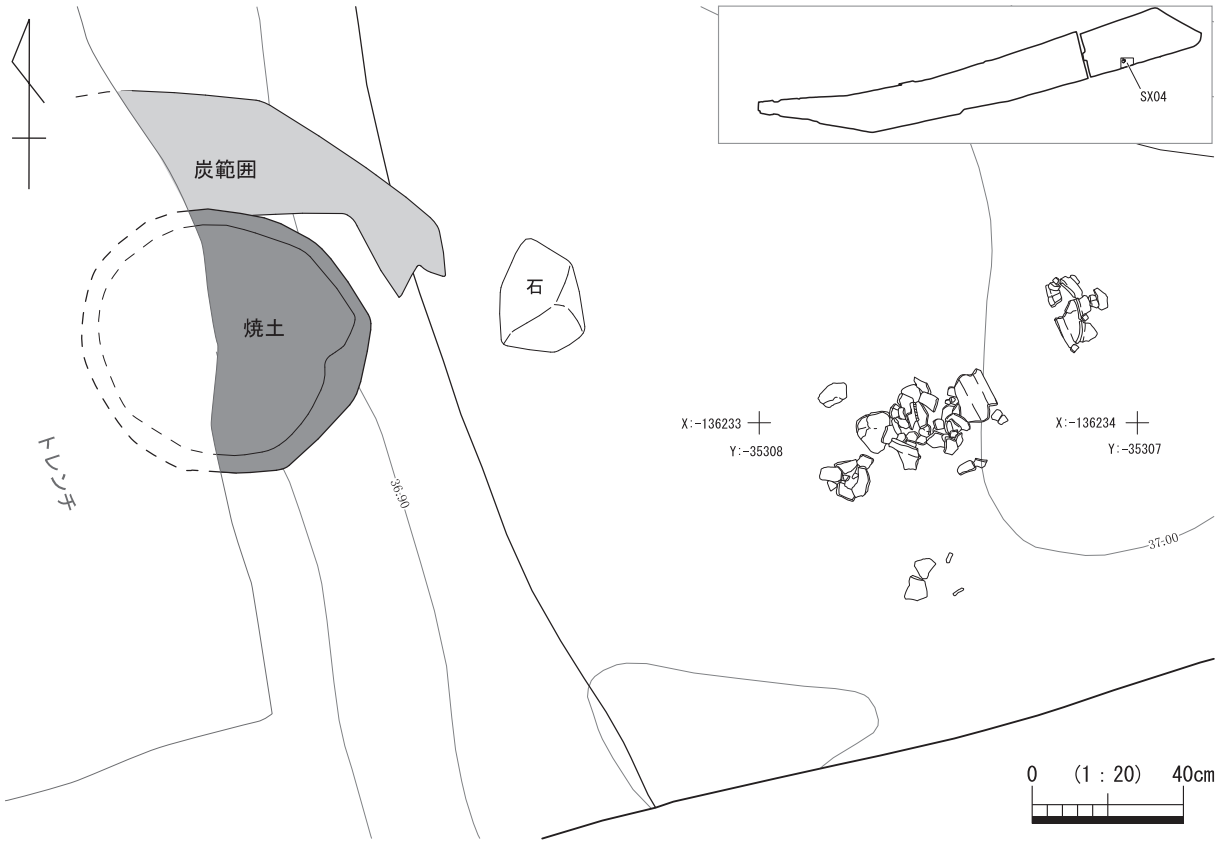
ＳＸ０３　１区Ｂ11グリッドとＣ11グリッドの境付近に検出された遺構である。当初は、包含層に遺物がわずかに顔を出しているものと思われたが、それらを追っていくと土坑状を呈する遺構となった。平面プランは、1.7m×1.1mの隅丸長方形に近い形を呈する。ＳＸ０３からは、弥生土器が集中して出土しているが、磨滅したものが多く、形がわかるものが少なかった。時期的には、弥生時代中葉ないしこれに前後する時期のものであり、遺構自体もその時期と考えられる。性格的には、ＳＤ１０等の祭祀的なものと関連する遺構と考えられ、ＳＸ０２も同様のものかと考えられる。

１区南西部落ち込み　1区の南西、Ｂ10グリッド南半からＣ10・Ｃ11グリッド北半にかけて、南西方向に斜めに落ち込んでいる状況が確認された。ＳＤ１０やＳＤ１１が、この落ち込み部分に掘り込まれており、時期的には、それらの遺構よりも古いものとなる。南北トレンチで観察されたこの落ち込みの堆積土は、Ⅰ…褐色土混じりの暗褐色シルト質土、Ⅱ…褐色土と褐灰色土・炭化物が混入する暗褐色シルト質土、Ⅲ…褐色土が筋状に混じる暗褐色シルト質土、Ⅳ…褐色土が少量混じる暗褐色シルト質土となっており、緩やかに南西方向に下がっている。こうした落ち込みが自然に形成されたものであるのか、あるいは人為的なものであるかは、不明である。これらの堆積土中からは、弥生土器片が出土しているが、細片で磨滅しており、その時期は判然としない。弥生時代後期頃には、低湿地となっていたのであろうか。この付近が弥生時代の微高地と低湿地との境であり、北東方向に高く、南西方向に低くなっていたと考えられる。なお、２区の南東部でもこの堆積を確認しているが、古墳時代包含層との分層が明確でなく、錯綜している部分もある。

ＳＸ０４　１区の落ち込みのＣ11グリッド付近の堆積層上部に、焼土の塊を確認した。それを覆う形となる落ち込みの堆積土Ⅰを取り除いたところ、焼土の集中個所と土器の集中が確認された。焼土については、一部をトレンチによって掘ってしまったが、残された部分をみると、0.76m×0.7mのほぼ円形の



第22図　１区南西部分落ち込み部分実測図



第 23 図　ＳＸ０４焼土遺構・土器出土状況図

プランであり、厚さは3～6cmで堆積していた。明黄褐色ないしは赤褐色を呈する。その厚さをみると、かなりの期間この場所で火が焚かれていたのではないかと考えられる。焼土の周辺には焼土の混じる炭化物が広がっている。焼土のすぐ東側には、約30cm大の石があり、さらに東側には、土器が集中して出土している。この焼土及び石、土器が一体のものである確証はないが、何らかの遺構であろうと考え、ＳＸ０４とした。出土している土器は、弥生土器の甕であり、その時期は後期中葉ないしはこれと前後する時期と考えている。出土した遺物から見た場合、ＳＤ１０、ＳＤ１１、ＳＸ０３とこのＳＸ０４は、遺構の切り合い関係から見て、新旧関係はあるにしても、それほど時期差はないものと考えられる。そうした観点で見ていくと、それぞれの遺構は、同じような、例えば祭祀関連というような性格をもつものではなかろうか。焼土の状況をみると、かなりの期間と頻度で火が焚かれたようであり、この場所が生活の場所とは考えられないとすれば、その行為はやはり祭祀的なものではなかったかと考えられる。微高地上から低湿地の境にあたる周辺で、明確ではないが、祭祀的様相を窺うことができる遺構と遺物の出土状況が見られるということになる。その当時の状況を考えると、低湿地は稲作等の生産の場所となっていたと考えられ、そうしたものに対する豊作の祈り、感謝する行為もあったと考えられる。弥生時代後期中葉ないしその前後の時期と考えられるこれらの遺構は、その痕跡を表すものと考えてみた。

第２節　出土遺物

１　上層の出土遺物

（１）遺物の出土状況

上層の遺構としたＳＤ０１、ＳＤ０２、ＳＤ０３、ＳＤ０４、ＳＤ０６、ＳＤ０７及び自然流路であるＳＲ０１から遺物が出土しているが、特にＳＤ０１及びＳＲ０１から山茶碗を中心として豊富な遺物が出土している。また、上層の遺物包含層とした第４層（鉄分を少量含む灰黄褐色粘質シルト層）、第５層（鉄分を含むにぶい黄褐色粘質シルト層）、第６層（鉄分と部分的に黄色土塊・黒褐色土塊を含む暗褐色粘質シルト層）から中世以降の陶磁器も含めて、豊富な遺物が出土している。

（２）各遺構の出土遺物

ＳＤ０１（第24・25図）

地元の東遠産の山茶碗を中心に、灰釉陶器、須恵器甕、土師器等の土器類、貿易陶磁や国内産陶器、漆椀、曲物や板材等の木製品、銭貨等豊富な遺物が出土している。土器・陶磁器については、第４表に破片数と個体数一覧を示した。しかしながら、土師器については、後述する古墳時代の土師器も含めて、磨滅した細片がほとんどであり、古代末から中世のものとそれ以前のものとなかなか判別がつかなかった。そのため破片数は、明らかにこの時期のものと考えられる破片数のみ、表示している。

また、現地調査では、覆土を以下のように分け、遺物を取り上げている。①鉄分を少量含む黒褐色粘質シルト層…遺物取上げ第１層、②灰黄褐色粘質シルト層、③鉄分・黄色土塊を含む黒褐色粘質シルト層…遺物取上げ第２層、④褐灰色粘質シルト層、⑤白色土塊・細礫を含む黒褐色砂質シルト層…遺物取上げ第３層、⑥黒褐色粘質シルト層…遺物取上げ第４層、⑦褐灰色砂質シルト層、⑧褐灰色砂層…遺物取上げ第５層である。

なお、ＳＤ０１では、古墳時代の土師器や弥生土器がかなりまとまった形で出土しているが、遺構の部分でも述べたように、下層の遺物包含層もしくは今回確認はできなかった遺構からの混入と考えられる。それらについては、下層の包含層の遺物として扱い、後述する。

以下、古代末から中世の遺物として図示したものについてその概要を述べる。

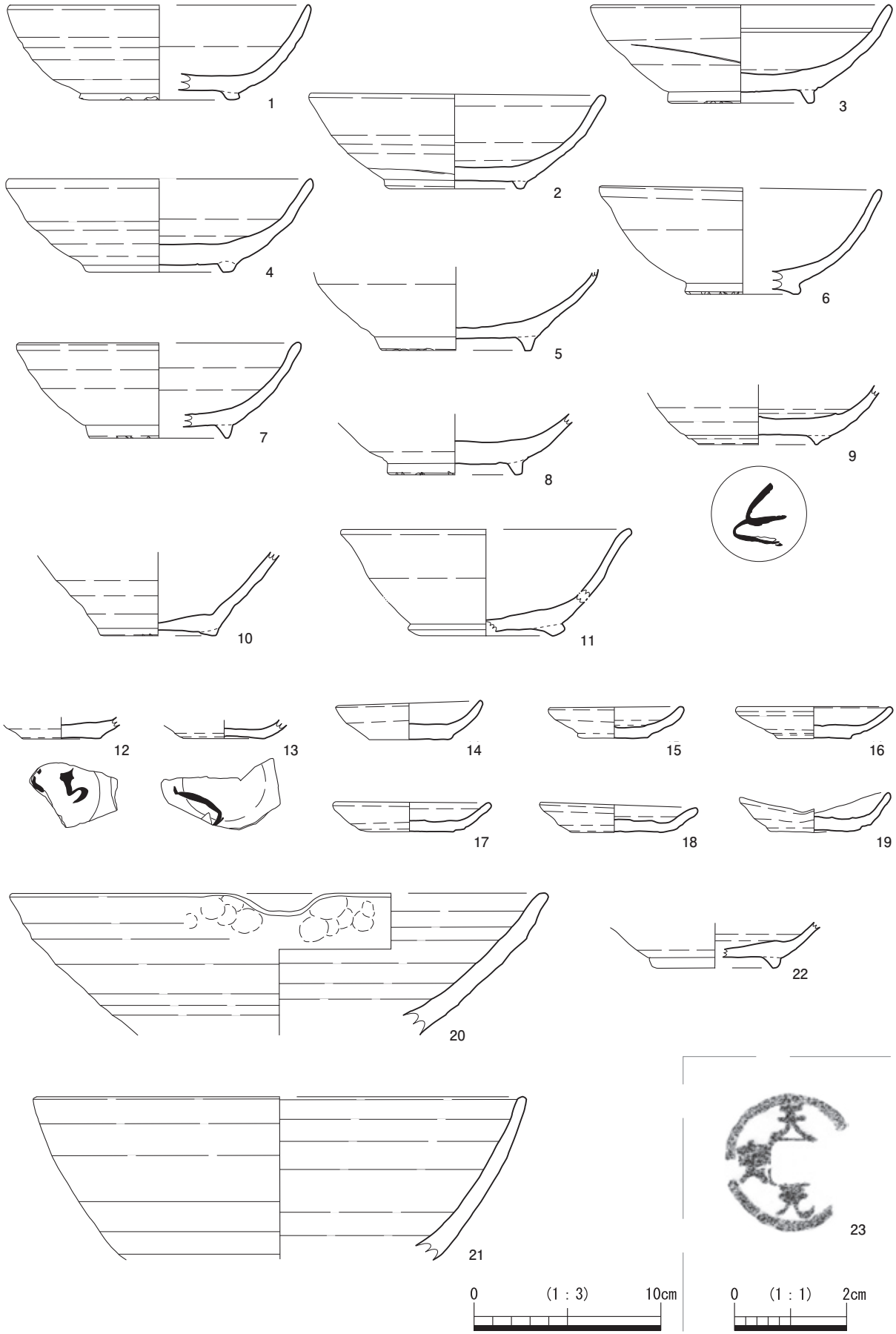
山茶碗（1 ～ 21）　１～ 11は山茶碗の碗である。１は推定口径16.0cm、器高5.1cmを測る。口体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。高台は断面方形の低いものであり、下端部には籾殻痕が見られる。底部外

第４表　ＳＤ０１出土土器・陶磁器破片数一覧表

	地元産山茶碗					知多半島産山茶碗	渥美・湖西産山茶碗	灰釉陶器	須恵器	貿易陶磁	国内産陶器			土師器
	碗	小碗	小皿	鉢	甕						瀬戸・美濃	常滑	その他	
第１層														
破片数	92		19	10		5		1	13	1	1	3		5（伊勢鍋）
個体数	17		8	2		1		1						
第２層														
破片数	54		9			2	6	9	22					
個体数	18		5					1						
第３層														
破片数			5	1				2						
個体数			4	1				1						
第５層														
破片数	27		1	2				3						
個体数	10		1											

面には回転糸切り痕が見られる。全体に回転ナデ調整であり、高台に貼り付けのナデが見られる。灰色を呈する。２は口径15.4㎝、器高5.0㎝を測る。口体部は内湾気味に外上方に開くように立ち上がる。断面逆台形の高台が貼り付けられ、下端部に籾殻痕がわずかに見られる。底部外面には回転糸切り痕が見られる。全体に回転ナデ調整である。焼成やや不良でにぶい黄橙色を呈する。３は口径15.8㎝、器高5.2㎝を測る。口体部は緩やかに内湾して立ち上がり、途中わずかに屈曲して外上方に開く。高台はやや高く外に開く形で貼り付けられ、下端部には籾殻痕が見られる。底部外面にはわずかに糸切り痕が見られる。全体に回転ナデ調整であり、灰色を呈する。４は推定口径16.2㎝、器高5.0㎝を測る。口体部は緩やかに内湾気味に立ち上がり、途中わずかに屈曲して外上方に開く。断面逆台形の低い高台が貼り付けられており、その下端部には籾殻痕が見られる。底部外面には回転糸切り痕が見られる。全体に回転ナデ調整であり、灰色を呈する。口縁部内面に斑点状に自然釉が見られる。５は口縁部を欠くものである。体部が緩やかに内湾して立ち上がり、途中わずかに屈曲する。断面三角形に近い高台が貼り付けられており、下端部には籾殻痕が見られる。底部外面には回転糸切り痕が見られる。全体に回転ナデ調整であり、灰色を呈する。６は推定口径14.8㎝、器高5.6㎝を測る。口体部は内湾気味に外上方に向かって立ち上がる。高台は断面扁平な外に向かって開く形のものであり、下端部には籾殻痕が見られる。全体に回転ナデ調整であるが、口体部内面には斑点状に自然釉が分厚く付着している。内面褐灰色、外面黄灰色を呈する。７は推定口径15.2㎝、器高5.1㎝を測る。口体部は内湾気味に外上方に向かって立ち上がる。断面三角形を呈する高台が貼り付けられており、下端部には籾殻痕が見られる。全体に回転ナデ調整であり、灰色を呈する。８は底部片であるが、体部がわずかに内湾気味に立ち上がる。断面逆台形に近い高台が貼り付けられ、下端内側に籾殻痕が顕著に認められる。底部外面には回転糸切り痕が認められる。全体に回転ナデ調整で、体部内面に自然釉が付着している。灰色を呈する。９は底部片であるが、体部が内湾気味に立ち上がる。断面低い逆三角形を呈する雑な高台が貼り付けられている。底部外面に回転糸切り痕が残り、墨書が確認される。ひらがなの「と」に近いものである。内面にも墨状のものが付着している。灰白色を呈し、全体に白っぽいものである。１から９は、いずれも須恵器質の焼成であり、地元の皿山窯のものと考えられる。口径が16㎝前後の１・３・４と15㎝前後の２・６・７があるが、高台や全体の形状や作りから見て、１～４がいわゆる山茶碗Ⅱ期のものと考えられ、12世紀末～13世紀初頭頃のものかと考えられる。５～９は、高台も華奢で雑なものとなっており、山茶碗Ⅲ期のものであり、13世紀前半頃のものかと考えられる。10は知多窯産の山茶碗であり、体部が直線的に外上方に開き、断面扁平な逆三角形の高台が貼り付けられている。高台下端には、籾殻痕かと考えられる痕跡が見られる。胎土は密であり、内外面灰白色を呈する。体部内面には自然釉が付着している。こうした特徴から尾張型の第７形式にあたるものと考えられる。11は、渥美湖西窯産の山茶碗である。図示したものは、同一個体と考えられる口縁部と底部を復元実測したものである。口体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部が外反して開く。扁平な逆台形に近い断面形の高台がつけられており、高台周辺から底部外面はナデられている。細かい白色砂粒を含む胎土であり、内面黄灰色、外面灰白色を呈する。口体部内面には、自然釉が付着する。渥美湖西窯編年でいえば、碗Ｂ４に当たるものと考えられ、第Ⅲ期ａ段階のものと考えられる。

12から19は小皿である。12と13は、いずれも底部片であり、底部外面に墨書がある。12は、ひらがなの「ち」もしくは「ら」に近いものであり、13は、はっきりしない。いずれも底部外面に糸切り痕を有し、灰白色を呈するものである。底部外縁に段差がなく、小皿Ｂ類と考えられる。14は口径7.6㎝、器高2.0㎝、底径4.3㎝を測る。口体部が短く内湾気味に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、底部外縁にわずかに段差を持つ。全体に回転ナデ調整であり、灰色を呈する。15は口径7.3㎝、器高1.7㎝、底径3.7㎝を測る。口体部が短く内湾気味に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、底部外



第 24 図　ＳＤＯ１出土遺物実測図１（土器・銭貨）

縁に段差を持つ。全体に回転ナデ調整で、灰白色を呈する。16は推定口径8.4cm、器高1.7cm、推定底径4.0cmを測る。口体部が短く、わずかに内湾して立ち上がる。底部外面には、回転糸切り痕が見られ、底部外縁に段差を持つ。全体に回転ナデ調整が施され、薄手である。灰色を呈する。17は口径8.5cm、器高1.6cm、底径4.8cmを測る。口体部が短くわずかに内湾気味に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、底部外縁にわずかに段差が見られる。全体に回転ナデ調整が施されるが、やや扁平な器形である。灰色を呈する。18は口径9.4cm、器高1.6cm、底径4.9cmを測る。口体部が短くわずかに外反気味に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、底部外縁に段差をもたず、底部中央がわずかに窪む。全体に回転ナデ調整であり、扁平な器形である。灰色を呈する。19は焼き歪みで大きくゆがんでいる。口径8.1 ～ 9.0cm、器高1.1 ～ 2.2cm、底径5.0cmを測る。口体部は短くわずかに内湾気味に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、底部外縁に段差が認められる。全体に回転ナデ調整であり、内面の一部に自然釉が付着している。灰色を呈する。これらの小皿は、碗同様、須恵器質の焼成であり、地元の皿山窯のものと考えられる。口径が７cm代のものと８cm代のものが見られるが、14 ～ 17と19が底部に段差を持つものであり、18は底部が扁平になるものである。時期的には、口径が大きく、底径の小さい16・17が山茶碗Ⅱ期、他は山茶碗Ⅲ期のものと考えられる。

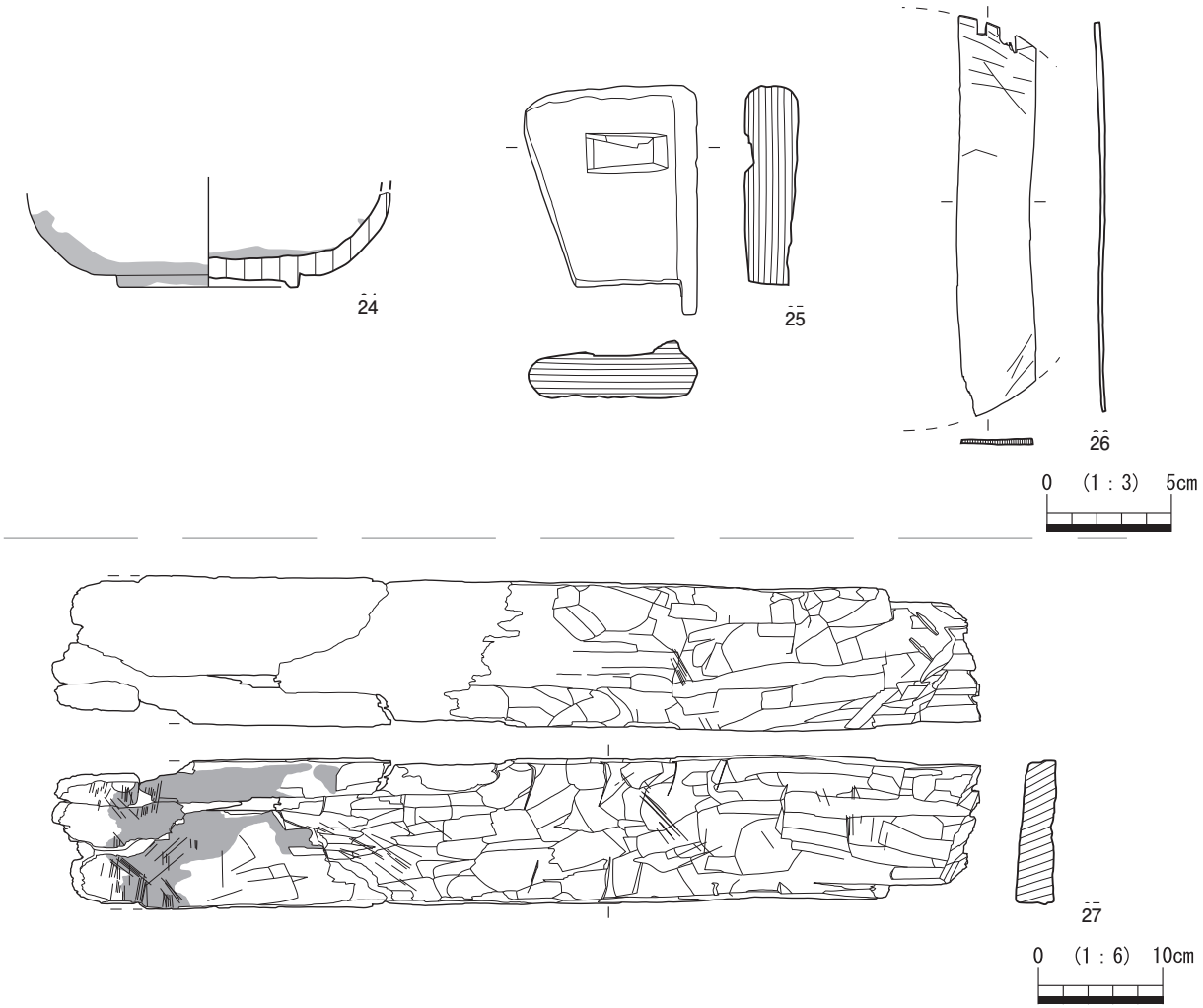
20は片口鉢である。全体の15％残存の口体部片である。推定口径28.6cmを測る。口体部はわずかに内湾して外上方に立ち上がる。口縁の一端に注口が作り出され、製作の際の指頭圧痕が見られる。全体は回転ナデ調整であり、色調は灰色を呈し、須恵器質の焼き上がりである。21は鉢である。口体部の約25％の破片である。推定口径26.4cmを測り、口体部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁端部は丸く納められている。体部下半外面には回転ヘラケズリ調整が見られ、他は回転ナデ調整である。色調は内面灰黄色、外面黄灰色を呈し、須恵器質の焼き上がりである。いずれも碗などと同様、皿山窯で焼かれたものかと考えられる。

灰釉陶器(22)　22は灰釉陶器の碗の底部片である。断面逆台形のやや外に開く形の高台を持つ。底部外面にはかすかに糸切り痕が残る。焼成は良好であり、全体に灰白色を呈する。内外面に部分的に黒色の斑点状の釉が認められる。

銭貨(23)　23は右側部分を欠いているが、残された文字から天聖元寶と考えられる。天聖元寶は、北宋銭であり、北宋の天聖元年(1023年)に始鋳された銭貨である。隷書体のものと真書体のものがあるが、今回出土したものは、真書体のものである。直径2.5cm、厚さ0.1cmであり、かなり磨滅しているものであり、いくつかに割れていたが、右側部分を欠いている。

漆器(24)　24は遺物取り上げ第３層としたＳＤ０１の中位から出土した漆椀である。体部から底部の2/3程が残存している。体部が内湾して立ち上がり、底部には断面逆台形の高台が挽き出されている。高台部径7.2cm、体部の厚さ0.8cmを測る。内面の見込み部分及び体部及び高台の外面に漆の塗膜が残るが、内外面とも黒漆である。木地の木取りは縦木取りであり、樹種はケヤキである。

木製品(25 ～ 27)　25 ～ 27はいずれも漆椀と同様、ＳＤ０１の中位から出土している。25は現状台形に近い形を呈するが、図の右側及び下側を欠損する。下側には四角状に切り込みが入れられ、上部には長方形を呈する抉りこみが見られる。上側と左側側面は使用によると思われる磨滅痕が見られる。抉りこみの面は材を割った面が残り、反対面にはケズリ痕が残る。残存長9.2cm、残存最大幅7.0cm、厚さ2.3cmを測る。材の樹種は杉である。どんな製品かははっきりしないが、農具の一部かと考えられる。26は曲物の底板の断片かと思われる。両端に円弧を呈する縁辺部が残る。残存長32.2cm、残存幅6.4cm、厚さ0.5cmを測る。想定される径は34cmである。一方の端部には、欠損が見られるが、端部には特に段差は見られず、「クレゾコ」のものと考えられる。材の樹種はスギと同定されている。27は残存長99.7cm、幅16.7cm、厚さ4.3cmを測る板材である。一方の端部は折損しており、一部が腐食、また部分的に炭化が認められる。



第 25 図　ＳＤ０１出土遺物実測図２（木製品）

他方の端部は、刃物により切断されている。表面全体に、手斧状の工具によるものかと 考えられる幅2.5～5.0cmほどの粗く雑な感じの加工痕が残る。板材と考えられるがその用途ははっきりとしない。樹種はイヌマキ属の樹木と同定されている。

第５表　ＳＤ０２・０３・０４・０６・０７出土土器・陶磁器破片数一覧表

	地元産山茶碗					知多半島産山茶碗	渥美・湖西産山茶碗	灰釉陶器	須恵器	貿易陶磁	国内産陶器			土師器
	碗	小碗	小皿	鉢	甕						瀬戸・美濃	常滑	その他	
ＳＤ０２														
破片数	1					1			1					
個体数	1					1			1					
ＳＤ０３														
破片数	12													2（かわらけ・伊勢鍋片）
個体数	2													
ＳＤ０４														
破片数	3													
個体数														
ＳＤ０６														
破片数	4								1					
個体数														
ＳＤ０７														
破片数	23							2	8					
個体数	1													

ＳＤ０２

13世紀代のものと考えられる地元産の山茶碗の口縁部片、知多窯産の山茶碗の底部片、叩き目のある須恵器甕の胴部片の他、土師器の細片が出土している。

ＳＤ０３

山茶碗の破片及び土師質土器と考えられる破片、伊勢鍋と思われる破片が出土している。出土している山茶碗の底部片をみると、わずかに高台が付けられているものであり、地元産の13世紀前半のものと考えられる。

ＳＤ０４

わずかに山茶碗の細片が出土している。

ＳＤ０６

山茶碗の細片、叩き目のある須恵器甕の破片が出土している。

ＳＤ０７

須恵器甕の口縁部片と叩き目のある胴部片、山茶碗片の他、灰釉陶器の細片が出土している。山茶碗は、内湾して立ち上がるものである。底部片をみると低い高台であり、籾殻痕が残るものである。

以上のＳＤ０２～ＳＤ０４・ＳＤ０６・ＳＤ０７の出土土器の破片数については、第５表にまとめた。

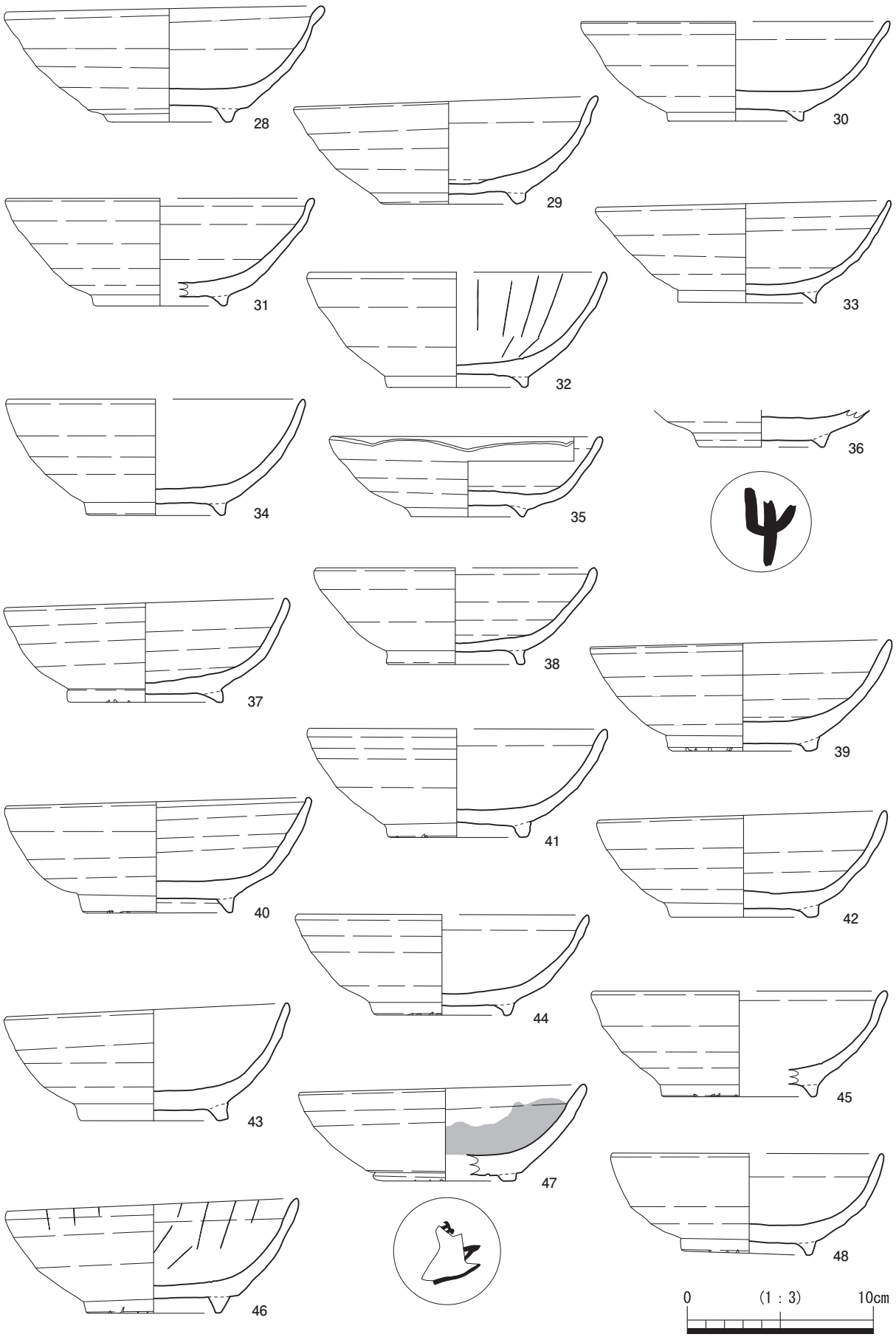
ＳＲ０１（第26 ～ 30図）

自然流路であるＳＲ０１からは、かなり豊富に遺物が出土している。現地での遺物の取上げについては、上位を遺物取上げ第１層、下位を遺物取上げ第２層としている。山茶碗を主体に、灰釉陶器、須恵器甕、常滑産の壺、伊勢鍋の他、土師器の細片が出土している。これらについて、その出土した破片数について、第６表に示してある。ＳＤ０１と同様、土師器については、明らかに古代末から中世と考えられるもののみ破片数を示している。また、ＳＲ０１から出土した木製品として、漆椀及び曲物と堰状遺構の杭を取上げている。以下、図示したものについて、その概要を述べる。

山茶碗（28 ～ 67）　ＳＲ０１の底近くで完形の碗が多く出土している。28は碗であり、口径16.9cm、器高6.1cmを測る、やや大型のものである。体部は緩く内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反気味に開く。底部外面には、回転糸切り痕が残り、その後断面逆台形を呈する高台が、底部外面やや内側に貼り付けられている。高台の造りはやや雑である。焼成はやや甘く、灰白色を呈する。29も碗であり、口径16.1cm、器高5.5cmを測る。体部は緩く内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反気味に開く。口縁端部はやや肥厚する。底部外面には回転糸切り痕が残り、その後断面逆台形の高台がやや外に開く形で貼り付けられている。全体に回転ナデ調整であるが、内面底部中央が窪むようにナデられている。焼成はやや甘く、灰白色を呈する。30は口径16.5cm、器高5.4cmを測る全体にやや扁平な碗である。体部は僅かに内湾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反して開く。底部には回転糸切り痕が残り、その後断面三角形に近い高台が貼り付けられる。丁寧な作りの高台である。焼成は良好で、須恵器質の灰色を呈する。31は推定口径16.6cm、器高5.8cmの碗である。体部は僅かに内湾して立ち上がり、口縁部は短く僅かに外反して開く。

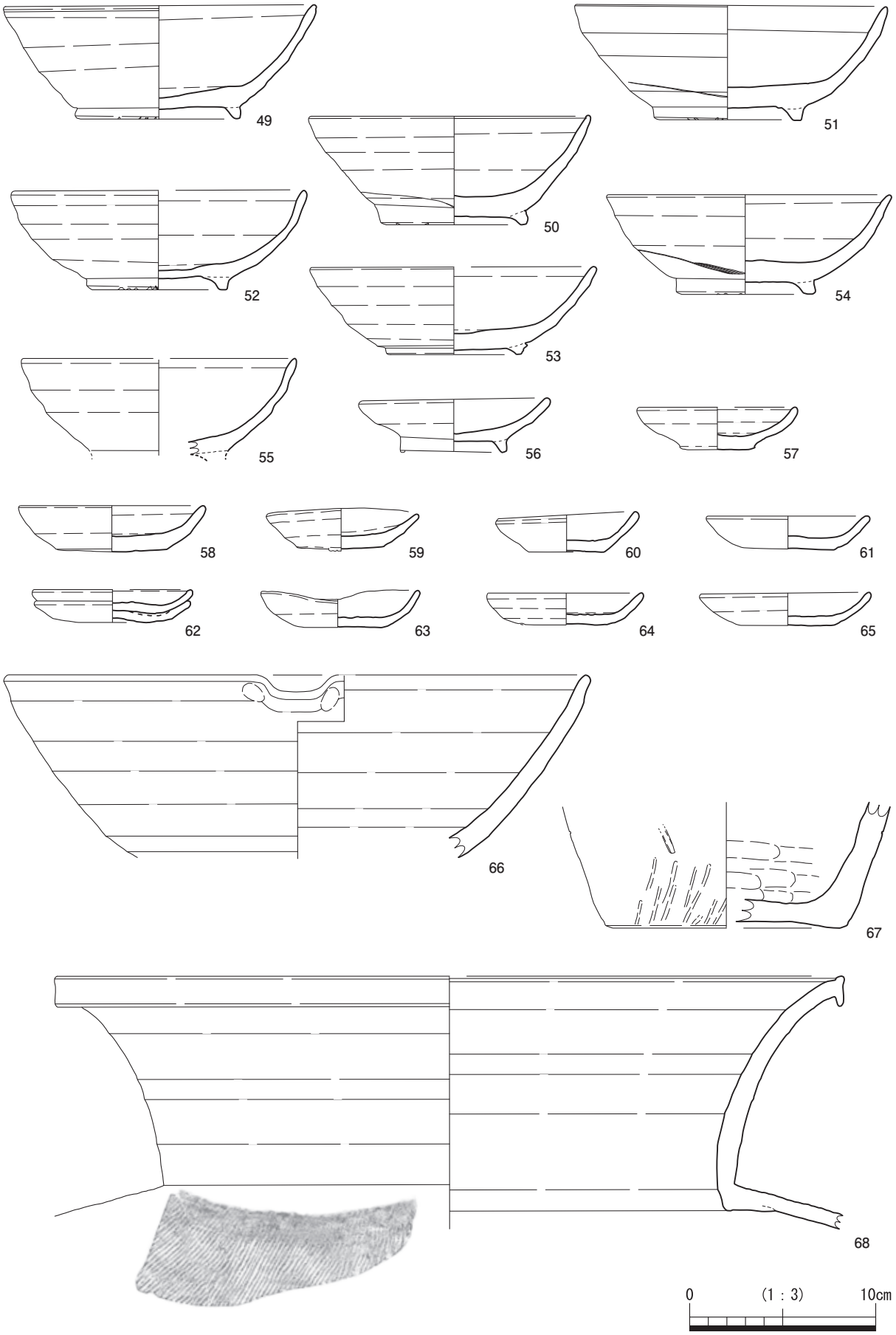
第６表　ＳＲ０１出土土器・陶磁器破片数一覧表

	地元産山茶碗						知多半島産山茶碗	渥美・湖西産山茶碗	灰釉陶器	須恵器	貿易陶磁	国内産陶器			土師器
	碗	小碗	小皿	鉢	壺	甕						瀬戸・美濃	常滑	その他	
第１層															
破片数	91		9			1			7	21					14（伊勢鍋）
個体数	28		2						2						
第２層															
破片数	76	1	23	5	5	1			1	16			2（壺）		
個体数	53	1	12	1	1										



第 26 図　ＳＲＯ１出土遺物実測図１（土器）

底部は断面逆台形の高台が貼り付けられ、高台周辺及び底部外面をナデている。焼成は部分的に不良で、黄灰色を呈し、全体に磨滅している。32は推定口径15.8cm、器高6.2cmとやや深い碗である。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は直線的に開く。底部外面には、回転糸切り痕が残り、断面逆台形の高台が貼り付けられるが、一部籾殻痕かと考えられる痕跡が見られる。全体に回転ナデ調整であるが、内面にヘラ状のものでナデたような痕跡が見られる。口縁部には、自然釉が掛かる。焼成は良好で、灰色を呈する。33は口径15.7cm、器高5.4cmを測る碗である。体部は緩やかに内湾気味に立ち上がり、口縁部は直線的に外上方に開く。底部外面には、静止糸切り痕状の痕跡が残り、断面三角形の高台が貼り付けられる。全体に薄手の造りである。焼成は良好であり、灰色を呈する。34は推定口径15.4cm、器高6.3cmを測るやや深い碗である。体部から口縁部へ内湾して立ち上がり、全体に断面半円形に近い形を呈する。底部外面には回転糸切り痕が見られ、断面逆台形の高台がやや外に開く形で貼り付けられている。高台の端部は平坦になっている。焼成はやや不良であり、灰白色を呈する。35は口径14.7cm、器高4.3cmを測る碗である。体部が僅かに内湾して立ち上がり、口縁部が直線的に開くが、口縁部の片側は、３カ所が窪む形の波状を呈するように削りとられており、この部分の口縁は薄くなっている。底部外面には、糸切り痕が見られ、断面三角形の華奢な高台が貼り付けられている。焼成は良好で、須恵器質の固い焼き上がりとなり、灰色を呈する。焼成後何らかの用途を持つものとして、加工がなされたものと考えられる。36は碗の底部である。底部外面は回転糸切りであり、断面三角形に近い高台が貼り付けられているが、一部潰れて逆台形を呈するところがある。焼成は良好であるが、にぶい橙色を呈する。底部外面には、「Ψ」の墨書があるが、文字であるのか記号であるのか、不明である。37は口径15.4cm、器高5.4cmを測る碗である。体部が途中わずかに屈曲し、内湾気味に立ち上がり、口縁部は直線的に外上方に開く。底部外面には回転糸切り痕が残り、断面逆台形でやや外に開く形の高台が貼り付けられる。高台の下端部には、籾殻痕が顕著に見られる。全体的に回転ナデ調整が施されるが、内面底部中央が丸くナデられている。焼成は良好で、内面黄灰色、外面灰色を呈する。38は推定口径15.2cm、器高5.2cmを測る碗である。体部は僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁部はさらに内湾気味となる。口縁端部はやや肥厚する。底部外面には糸切り痕が残り、断面逆台形のやや高い高台がやや開く形で貼り付けられる。高台下端部には籾殻痕が部分的に顕著に認められる。焼成は良好であり、灰色を呈する。39は口径16.3cm、器高5.8cmの碗である。体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がり、全体として断面半円形を呈する。口縁部がやや肥厚する。底部外面には糸切り痕が残り、断面低い逆台形の高台が貼り付けられる。高台下端部には、籾殻痕が顕著である。底部には、亀裂が生じている。焼成は良好であり、内面黄灰色、外面灰色を呈する。40は口径16.2cm、器高6.0cmを測る碗である。体部は下位でやや屈曲し、その後直線的に外上方に開く。口縁端部内側が僅かに窪み、丸くなる。底部は底径が大きく、全体としてはやや扁平な形を呈する。底部外面には回転糸切り痕が見られ、断面三角形に近い高台がやや開く形で貼り付けられている。高台下端部に籾殻痕が見られる。全体に回転ナデ調整が施されている。焼成は良好であり、特に口縁部外面が良く焼けている。41は推定口径15.8cm、器高5.9cmの碗である。体部から口縁部に内湾して立ち上がり、全体として半円形の断面形となる。底部には回転糸切り痕が見られ、断面逆台形に近い形の高台が貼り付けられるが、高台下端部には部分的に籾殻痕が見られる。内面見込み部には重ね焼きの痕跡が見られる。底部には亀裂が入っている。焼成は良好であるが、灰白色のやや白っぽい焼き上がりとなっている。42は口径15.7cm、器高5.5cmを測る碗である。体部下半にわずかに屈曲が見られるが、全体に内湾気味に立ち上がる。底部外面には糸切り痕が残り、断面扁平な逆台形の高台が貼り付けられる。高台の一部は剝がれており、その下端部には籾殻痕が見られる。焼成は良好であり、灰色を呈する。43は口径15.4cm、器高6.0cmの碗である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はそのまま上方に延びる。底部外面には糸切り痕が残り、断面逆台形の高台がやや外に開いて貼り付けられている。高台下端部には、



第 27 図　ＳＲ０１出土遺物実測図２（土器）

籾殻痕が顕著に認められる。内面に部分的に灰かぶりの自然釉が見られる。内面中央に炭化物が付着している。焼成は良好で灰色を呈する。44は推定口径15.6cm、器高5.4cmのやや扁平な碗である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はそのまま直線的に外上方に延びる。底部外面には回転糸切り痕が残り、爪型に近い形の高台が貼り付けられる。高台下端部には籾殻痕が見られる。焼成は良好であり、灰色を呈する。45は推定口径15.6cm、器高5.7cmを測る碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、途中弱く屈曲、口縁部はやや外反して外上方に開く。口縁部はわずかに肥厚する。残された底部外面には、回転糸切り痕が認められ、断面逆台形の高台が貼り付けられる。高台下端部には籾殻痕が見られる。焼成はやや不良であり、灰色を呈する。46は口径15.5cm、器高5.9cmを測る碗である。底部は平たく、やや大きい。口体部はわずかに内湾しながら、外上方に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、断面三角形の高台がやや内側に貼り付けられる。高台下端部には籾殻痕が認められる。口体部外面は回転ナデ調整であるが、内面にはナデの後、ヘラ状の工具でナデたような痕跡と重ね焼き痕跡が認められる。焼成は良好で、灰色を呈する。47は口径15.2cm、器高5.0cmを測る碗である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。底部外縁のやや内側に扁平な高台が貼り付けられる。高台下端部には籾殻痕が顕著に認められる。底部外面には墨書が認められるが、中央部を欠損しており、どういう字か不明である。48は推定口径14.4cm、器高5.3cmとやや小ぶりな碗である。体部は内湾して立ち上がり、そのまま直線的に口縁部となる。底部外面には回転糸切り痕があり、断面逆台形の高台が貼り付けられる。高台下端部には籾殻痕が顕著に残る。49は口径16.6cm、器高6.1cmを測るやや大ぶりの碗である。体部は僅かに内湾して立ち上がり、口縁部は直線的に開く。口縁部の内側が僅かに肥厚する。底部外面には回転糸切り痕が見られ、断面逆台形に近い高台がやや外向きに貼り付けられる。高台下端部には籾殻痕が見られる。焼成は良好であり、灰色を呈する。50は口径14.9cm、器高5.9cmとやや小ぶりの碗である。口体部は僅かに内湾して外上方に開く。口唇部内側に弱い沈線が見られる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、断面逆台形の高台が外に開く形で貼り付けられる。高台下端部には、籾殻痕が認められる。焼成は良好で、灰色を呈する。51は口径16.6cm、器高6.2cmとやや大ぶりの碗である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部が僅かに屈曲して、直線的に開く。底部外面中央部には糸切り痕が見られ、外縁には断面逆台形の高台が貼り付けられる。高台下端部には籾殻痕が見られる。焼成はやや不良で、灰白色ないし灰色を呈する。52は推定口径15.6cm、器高5.3cmを測るやや扁平な碗である。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反して外上方に開く。底部外面には回転糸切り痕が残り、断面逆台形の高台が貼り付けられる。高台下端部には籾殻痕が見られる。焼成は良好であり、灰色を呈する。53は推定口径15.1cm、器高4.7cmを測るやや扁平な碗である。体部から口縁部にかけて僅かに内湾して外上方に開く。底部外面には回転糸切り痕が残り、断面三角形に近い矮小化した高台が貼り付けられる。底部内面には丸くナデられて窪む形となる。焼成はやや不良で、全体ににぶい黄灰色を呈する。54は推定口径15.1cm、器高5.3cmを測るやや扁平な碗である。体部がやや内湾して立ち上がり、口縁部が僅かに外反気味に短く開く。底部外面には回転糸切り痕が残り、断面逆台形の高台がやや開く形で貼り付けられる。高台下端部には籾殻痕が残る。焼成は良好であり、灰白色を呈する。55は推定口径14.6cm、器高5.1cmの碗である。体部は内湾気味に低く立ち上がり、口縁部は僅かに外反して外上方に開く。底部が残存しているのは一部であるが、やや膨らみをもっている。外面はヘラ削りかと考えられ、外縁はナデられている。口縁部外面に自然釉が付着している。焼成は良好であり、灰色を呈する。28から55の碗は、焼成がやや不良なものを除いて、いずれも須恵器質の焼き上がりを呈しており、いわゆる東遠型の山茶碗である。ほとんどのものが地元の皿山窯産のものと考えられる。28 ～ 31の碗は、口径が16.0cmを大きく超える大型のものであり、口縁部が弱く外反する形のものである。高台部にわずかに籾殻痕と考えられるものも見られる。32 ～ 34・37の碗は、口径15.5cm前後の口体部が内湾して立ち上がり、断面半円形を呈するタイプのも

のである。33の高台は華奢な三角の高台である。38の碗は、口径15cm程とやや小型で扁平なものであり、口体部が内湾してやや開き気味に立ち上がるタイプのものである。高台部の籾殻痕は顕著である。39～44の碗は、口径16cm前後の扁平なものであり、口体部が内湾して丸く立ち上がるタイプのものである。高台部は籾殻痕が顕著であり、雑なものが多い。45の碗は、全体に扁平で口縁部がやや外反して開くタイプのものである。46・47の碗は、扁平で口体部が僅かに内湾して開く、厚手のタイプのものである。48の碗は、小型のものであり、口体部が内湾して立ち上がるタイプのものである。49と50の碗は、口径16.6cmと14.9cmと大きさは異なるが、口体部が直線的に開くタイプのものである。51の碗は、体部が直線的に立ち上がり、口縁部が僅かに屈曲するタイプのものである。52の碗は、扁平なものであるが、口縁部が僅かに屈曲し外反して開くタイプのものである。35・53の碗は、扁平なものであり、口体部が僅かに内湾して開くタイプのものである。高台部がかなり矮小化している。54の碗は、扁平で口縁部が僅かに外反するタイプのものである。これらの碗については、28～32・34・37～46・49～52・54・55が山茶碗Ⅱ期のもので12世紀後半から13世紀初頭の時期が考えられるが、その中でも28～31は割と口径も大きく、口縁部が僅かに外反する等、やや古い様相が窺える。矮小化した高台がつく33・35・47・48・53は山茶碗Ⅲ期のもので13世紀前半のものと考えられる。

56は、口径9.9cm、器高2.8cmを測る小碗である。口体部は僅かに内湾して、外上方に開き、口縁端部は丸く納められている。底部外面は糸切り後ナデられており、断面逆台形の高台がやや開く形で貼り付けられている。口体部内面に自然釉がみられ、見込み部分と高台下端部に重ね焼きの痕が見られる。須恵器質の焼成であり、灰色を呈する。皿山古窯跡群の山茶碗Ⅰ期のものと考えられる。

57は口径8.6cm、器高2.3cmの小皿であり、口体部は短く内湾して開き、口唇部は丸く納められている。底部外面には糸切り痕が残り、底部外周の段差が顕著に見られる。焼成は良好であり、灰色を呈する。58は口径9.8cm、器高2.5cmの小皿であり、口体部が短く内湾気味に開く。底部外面には回転糸切り痕が見られ、底部外周の段差が僅かに認められる。焼成は良好であり、灰色を呈する。59は口径8.2cm、器高2.0cmの小皿であり、口体部が短く僅かに内湾して開く。底部外面に糸切り痕が残り、底部外周に僅かに段差が認められる。底部中央に大きな礫状のものがあり、割れ目を生じている。焼成は良好で、灰色を呈する。60は口径7.7cm、器高2.0cmの小皿であり、口体部が直線的に開く。底部外面には回転糸切り痕が見られる。焼成は良好であり、灰色を呈する。61は口径8.6cm、器高1.8cmの扁平な小皿である。口体部は短く直線的に開き、口縁端部は丸く納められる。底部外面に糸切り痕が残り、やや窪む。焼成は良好で、灰白色を呈する。62は口径8.6cm、器高1.3cmの扁平な小皿が２枚重なった状態のものである。いずれも口体部が短くやや内湾して開くものであり、下のものの底部外面には糸切り痕が認められ、やや窪む形のものかと考えられる。内外面に自然釉が見られ、重ね焼きの状態で融着したものである。焼成は良好であり、内面灰色、外面黄灰色を呈する。63は大きく歪んだ状態で、口径8.5～9.3cm、器高1.4～2.0cmの小皿である。口体部が短く内湾して立ち上がる。底部外面には糸切り痕が残る。内面には自然釉が付着している。焼成は良好で、灰色を呈する。64は口径8.4cm、器高1.7cmの扁平な小皿であり、口体部が短く直線的に開く。底部外面には糸切り痕が認められ、やや窪む。口縁部内外面に自然釉が付着する。焼成は良好で、黄灰色を呈する。65は口径9.3cm、器高1.8cmの扁平な小皿である。口体部が僅かに内湾して開く。口縁端部は丸く納められる。底部外面には糸切り痕が認められる。焼成は良好で、灰色を呈する。57～65の小皿は、いずれも須恵器質の焼き上がりのものであり、地元の皿山窯産のものと考えられる。57～60がいわゆる小皿Ａであり、61～65が小皿Ｂにあたるものである。57～59が山茶碗Ⅱ期のものであり、60～65の小皿は、山茶碗Ⅲ期のものと考えられる。

66は、推定口径31.5cmを測る片口鉢である。口体部は僅かに内湾して開き、口縁部が僅かに外反する。底部は欠損する。口縁の一端を方形に近い形でつまみだして、注口部を作り出している。注口部の両脇

には、指頭圧痕が認められる。体部下半外面は回転ヘラ削り調整であり、他は回転ナデ調整である。焼成は良好で、灰白色ないし黄灰色を呈する。

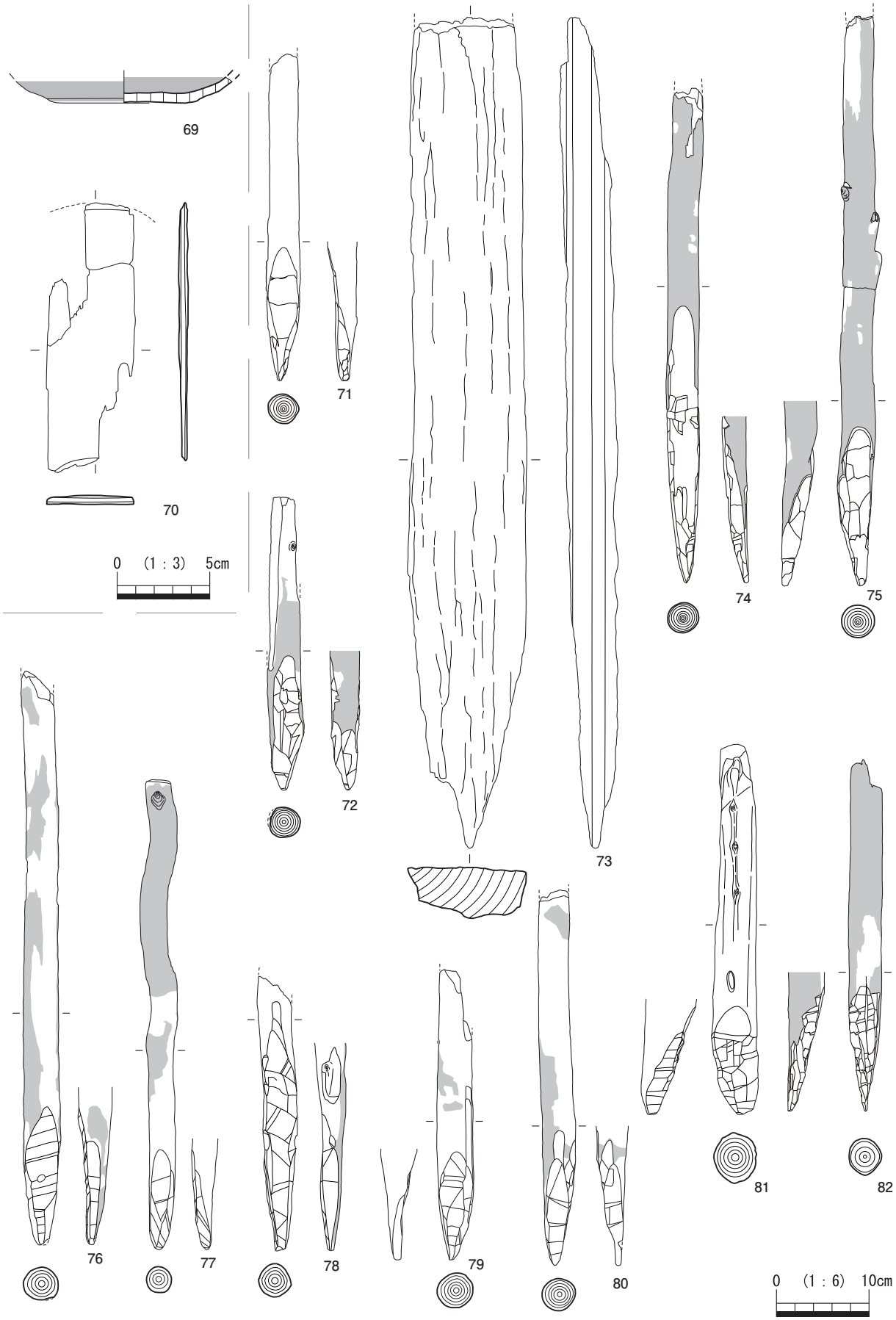
67は底径13.0cmの壺の底部と考えられるものである。平底でやや窪む形のものであり、内面は指頭によるナデであり、指頭圧痕が見られる。外面はナデ調整であり、底部近くはヘラ状のものによるナデである。

須恵器(68)　68は須恵器の大甕であり、推定口径42.2cmを測る。口縁部から肩部付近まで接合、復元できたが、破片の大半は包含層からの出土となっている。口縁部は大きく外反してラッパ状に開き、口縁端部は上下に挽き出されている。口縁部内外面は、回転ナデ調整であり、肩部外面には平行叩き目が見られる。焼成は良好であり、内面は灰白色、外面は青灰色ないし灰白色を呈する。

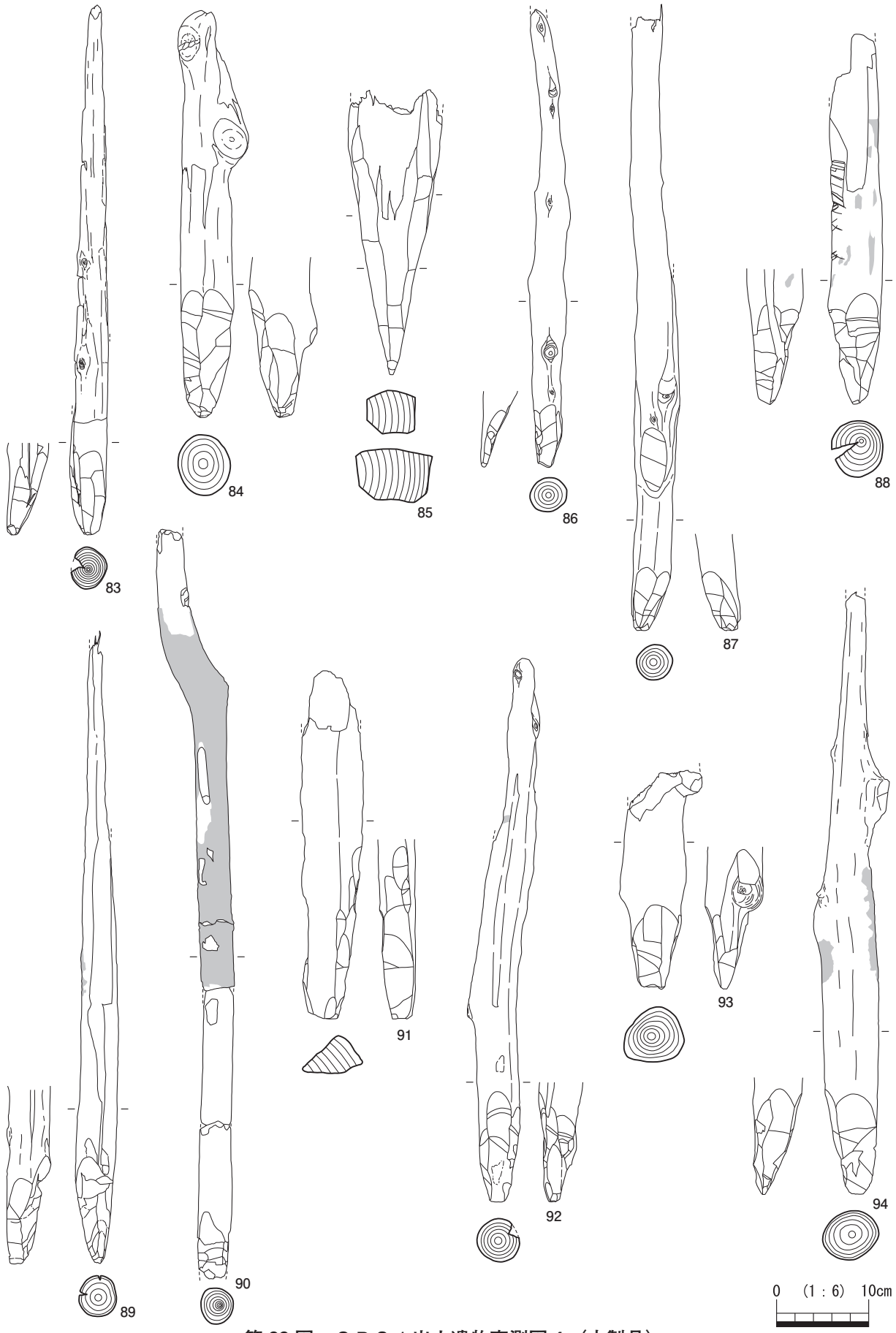
漆器(69)　69は漆塗りの椀である。底部のみの残存であり、底径8.0cmを測る。底部外縁が僅かに盛り上がり、中央部が僅かに窪んでいる。木地は縦木取りであり、木地の樹種はケヤキである。内外面に黒漆の塗膜が残っている。

曲物(70)　70はＳＲＯ１の堰状遺構の杭列に沿った形で出土しているが、杭として使われていたものなのか、あるいは流れついたものなのか不明である。現存長14.6cm、現存最大幅4.8cmの板状のものである。一方の端部は円弧状を呈し、段状に作り出されている。他方は小さな円形を呈する形で斜めに加工されており、穴があけられていたものと考えられる。「カキゾコ」の曲物の底板の一部と考えられる。

杭・板状木製品(71 ～ 107)　71 ～ 74は堰状遺構西側の試掘坑北壁部分の杭列の一部である。71は径3.2cm×3.7cm程の丸太材であり、上部を欠損、下端部の片側を鋭い刃物で斜めに削り、その後両脇を小さく削って尖らせ、杭の先端としている。樹種はクヌギ属である。72も同様、径3.2cmの細い丸太材である。下端部片側を斜めに削り、その先端部の両脇を小さく削り、杭としている。上部は欠損し、一部樹皮が残る。樹種はサカキである。73は杭列の中の横板である。みかん割による割材であり、一方は腐食により欠損しており、他方は側面を斜めに加工し先端を尖らせているが、加工痕は明瞭ではない。樹種はクリである。74は径3.4cm×4.0cmの丸太材であり、下端部の片側を長く斜めに削り、その後先端近くの両側を削り、杭としている。上部を欠損するが、樹皮はほぼ残っている。樹種はクスノキ科Ｂとなっている。75 ～ 80は堰状遺構の前側の杭列のものである。77を除き、いずれも径3.5 ～ 3.9cmの丸太材である。77は径2.8cmと細い丸太材である。いずれも上部を欠損しており、75は下端部の片側を斜めに削り、その後左脇を削って、杭としている。部分的に枝を切断した個所が見られ、樹皮も残る。樹種はアワブキである。76は下端部片側を斜めに削り、両脇を小さく削って杭とするが、先端部がやや太くなるため、材の元の方を削って杭にしていると考えられる。樹皮が部分的に残る。樹種は75と同じアワブキである。77は下端部の片側を短く斜めに削り、その後右側を削って杭としている。材には樹皮が残り、部分的に屈曲する。樹種はクスノキ科Ａである。78は先端部しか残されていないが、下端部の片側を長く斜めに削り、その後両脇を削って、杭としている。一部樹皮が残る。樹種はクスノキ科Ａである。79は下端部の両側を短く斜めに削り、その後片側の両脇を小さく削っている。一部樹皮が残る。樹種はネジキである。80は77と同様な形で先端部を作っている。一部に樹皮が残る。樹種は77・78と同じクスノキ科Ａである。81 ～ 107は堰状遺構の細かい枝木の部分に打ち込まれていた杭列のものである。85と91を除き、いずれも丸太材の一方の片側を斜めに削って尖らせ、杭としている。81・87・89・92・94・98・101・105は、径3.1 ～ 6.1cmのやや細いものからやや太いクリの丸太材で、いずれも上部を欠損する。枝を払った痕が見られるものや割れが入っているものが多い。82・106は径4.0cmと4.5cmのシャシャンボの丸太材である。82は先端部分を細かく削っており、樹皮が残る。106は下端部を両側から斜めに削っている。83・86・88・97・100はスダジイの丸太材を削って杭にしている。88が径6.1cmとやや太いが、他は径3.4 ～ 4.5cmのものである。枝を払った節の部分が見られるものが多く、部分的に樹皮が残る物があ



第 28 図　ＳＲＯ１出土遺物実測図３（木製品）



第 29 図　ＳＲＯ１出土遺物実測図４（木製品）

第30図　ＳＲＯ１出土遺物実測図５（木製品）

る。84は上部を欠損するが、大きな節があり、枝を払った痕が見られる。樹種はトリネコである。85は先端部のみが残存しているが、断面長方形の割材である。４面が割面を持ち、片面の両角を斜めに削り、杭としている。樹種はクリである。90は径3.9cmの丸太材であり、途中から屈曲する。細かい枝木を払った跡があり、樹皮が残る。樹種はサカキである。91は断面三角形の割材である。樹皮の剥けた自然面を斜めに削り、杭としている。樹種はコジイである。93は径6.0cm×6.5cmのやや太い丸太材であり、大きな節が見られる。樹種は二葉松類である。95は途中屈曲する径3.6cm×3.9cmとやや細い丸太材である。樹皮が一部残り、枝を払った痕がある。樹種はクスノキ科Ａである。96と107は径3.4 ～ 3.7cmの細いアワブキの丸太材である。ともに樹皮が残り、上部を欠損している。99は径3.0cm×3.6cmとやや扁平な断面の細い丸太材である。下端部の片側を斜めに鋭く削って、杭先端としている。樹種はクスノキ科Ｂである。103は径3.6cmほどのコジイの丸太材である。枝を払った節も見られ、一部に樹皮が残る。割れが入っている。104は径4.1cmのヤマザクラの丸太材である。枝を払った切断痕が見られ、樹皮が一部剥がれながらもよく残っている。

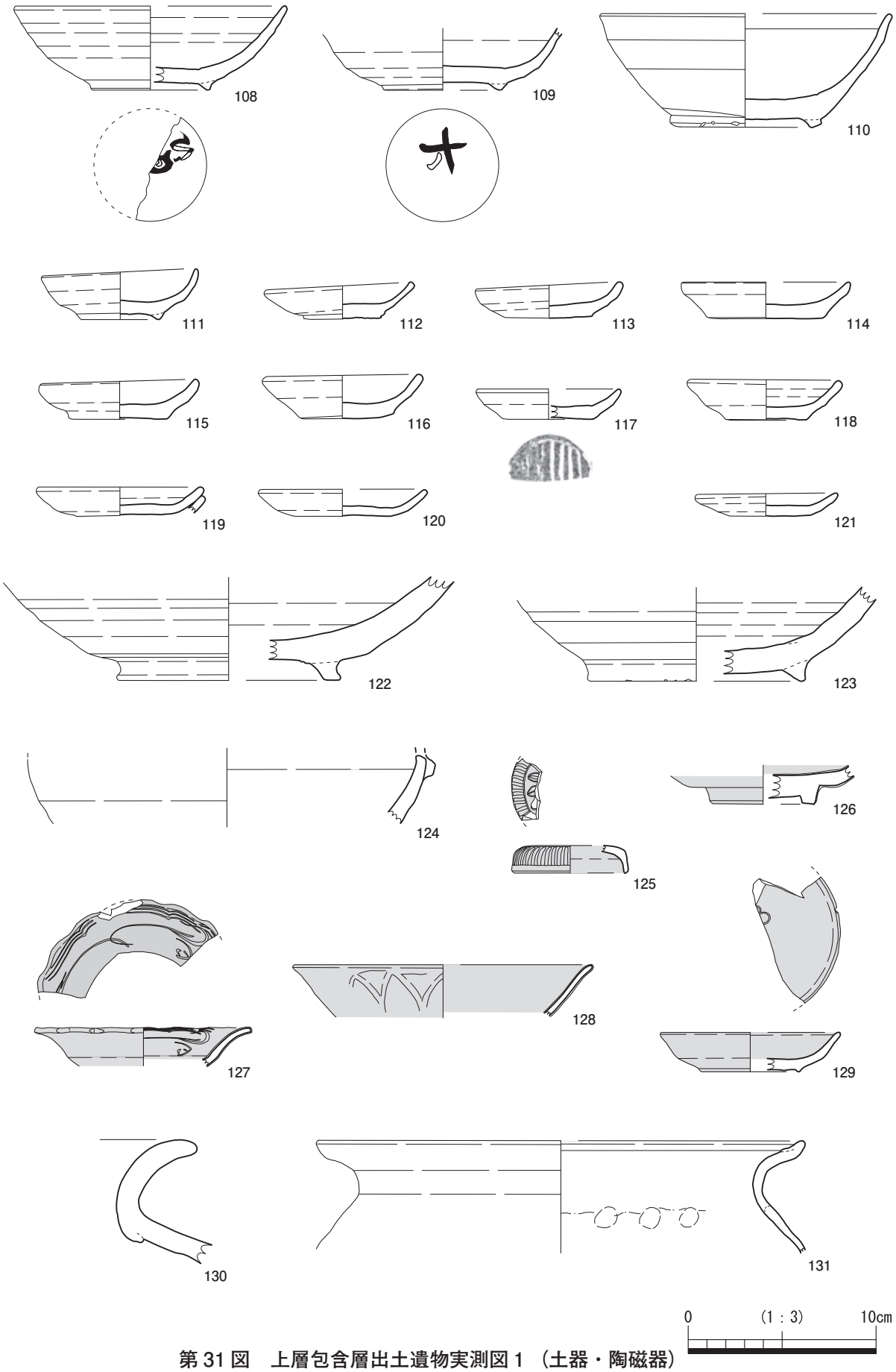
このように堰状遺構に打ち込まれた杭をみると、実に多彩な樹種のものがある。近くに生えているそれほど太くはない雑木を切り出し、枝木を払ってだけで、先端を尖らせて杭として使用している状況である。付編でも述べられているが、必ずしも堰という水利施設に適した材ばかりでなく、手近にあったものを加工して使っている様子が窺われる。

（３）　上層包含層出土の遺物

上層の遺構以外でも中世の包含層とした第４層・第５層・第６層から多くの遺物が出土している。その中には、下層からの混入と考えられる弥生土器や土師器片も見られる。こうした包含層からは、地元の皿山窯のものと考えられる山茶碗を主体に、知多窯産山茶碗（碗）、灰釉陶器（碗等）、叩き目のある須恵器甕片、青磁（碗、皿等）・青白磁（合子、碗）・青磁（碗）等の貿易陶磁、瀬戸美濃や常滑、志戸呂等の国内産陶器が出土している。瀬戸美濃のものには、天目・香炉・皿・壺・鉢等があり、古瀬戸段階のものから大窯に入る時期のものも見られる。常滑のものは、壺・甕などがある。また、志戸呂のものと考えられる天目・壺・擂鉢等がある。これらの陶磁器は細片のものが多く、形がわかるものが少なかった。この他に土師器片が多く出土しているが、細片で磨滅したものがほとんどで、あきらかに中世段階のものであると確認できるものがすくなかった。以上の古代末から中世の遺物について、破片数を第７表に区ごとにまとめてみた。包含層が厚かった２区に多くの遺物が出土していることがわかる。前述のように、土師器については、あきらかに中世段階と考えられる数を載せている。また、陶磁器については、近世以降のものも出土しているが、それらは表からはずしている。なお、個体数については、底部片の数等から推定したものである。その他、土器・陶磁器以外に包含層からは、瓦・土錘・銅製品も出土している。以下、これらの遺物の中から抽出していくつか図示したが、それらの概要について述べていく。

第７表　上層包含層出土土器・陶磁器破片数一覧表

	地元産山茶碗						知多半島産山茶碗	渥美・湖西産山茶碗	灰釉陶器	須恵器	貿易陶磁	国内産陶器			土師器
	碗	小碗	小皿	鉢	壺	甕						瀬戸・美濃	常滑	その他	
３区															
破片数	331	2	41			1	2		24	7	6	14	6	3	20 かわらけ 1 羽釜
個体数			2						2						
２区	38	2	6										1		
破片数	1,036	2	136	1	26	151			47	149	16	13	9	5	18 かわらけ 40 伊勢鍋
個体数	124	2	46		2	3									
１区															
破片数	64		43		1	5			2	19		1			
個体数	12		10												



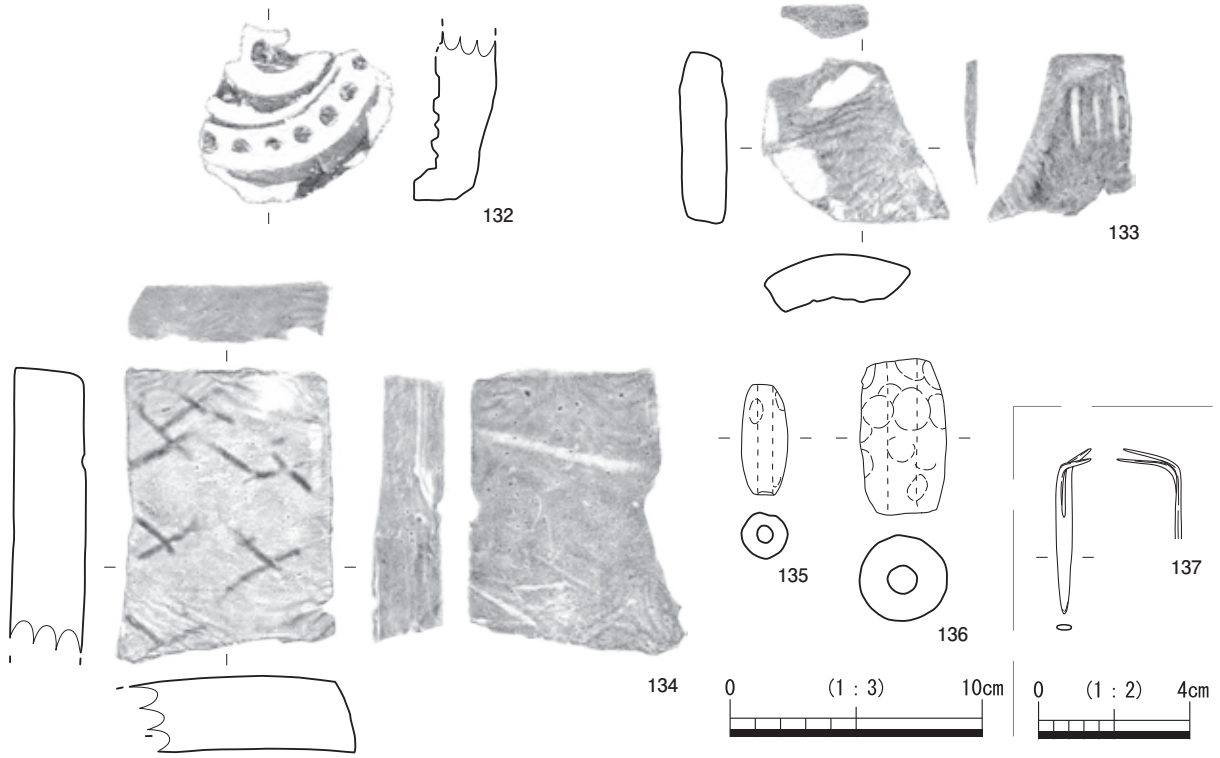
第 31 図　上層包含層出土遺物実測図１（土器・陶磁器）

包含層（第31・32図）

山茶碗（108 ～ 123）　108は推定口径14.3cm、器高4.5cmの碗である。体部から口縁部は僅かに内湾して外上方に立ち上がる。底部外面には糸切り痕が見られ、断面三角形の矮小化した高台が貼り付けられる。底部外面には墨書が認められ、２文字程度と思われるが、何の字であるかはっきりしない。109は碗の底部から体部下半である。体部は内湾気味に立ち上がり、底部外面には糸切り痕が認められる。断面扁平な三角形の矮小化した高台が貼り付けられている。底部外面には墨書が認められるが、一部墨痕が薄くなっている。「大」のような字であるがはっきりしない。108･109は、地元の皿山窯産のものと考えられ、山茶碗Ⅲ期にあたるものであり、13世紀前半代の時期が考えられる。110は推定口径15.2cm、器高6.0cmを測る碗である。底部は厚く、体部が直線的に立ち上がり、口縁部が僅かに外反して開く。底部外面には糸切り痕が認められ、断面方形で扁平な高台が貼り付けられる。低い割にはしっかりとした造りの高台であり、下端部には籾殻痕が残る。内面見込み部分には重ね焼き痕が残る。やはり地元の皿山窯のものであり、山茶碗Ⅱ期のもので、12世紀末から13世紀初頭のものかと考えられる。111は口径8.1cm、器高2.5cmの小碗である。体部下半部は短く直線的に立ち上がり、途中屈曲して口縁部は内湾して上方に立ち上がる。底部外面は糸切り後ナデられており、断面三角形の華奢な高台が貼り付けられる。皿山窯産のものであり、山茶碗Ⅰ期の新しい段階のものかと考えられる。112 ～ 121は小皿である。112は口径7.6cm、器高1.8cmを測るものであり、口体部が短く開き、口縁端部がやや肥厚する。底部外面には糸切り痕が残り、やや厚くなり外縁が段状を呈する。113は口径7.5cm、器高1.8cmを測るものであり、口体部が短く内湾気味に立ち上がる。底部外面には糸切り痕が見られ、やや厚くなり外縁がわずかに段状を呈する。114は推定口径8.8cm、器高2.0cmを測るものである。底部外面に糸切り痕が残り、底径が比較的大きい。外縁の段差は明瞭ではない。115は口径8.5cm、器高2.0cmのものであり、口体部は短く内湾気味に屈曲して立ち上がる。底部外面に糸切り痕が見られ、底部が厚く外縁が段状を呈する。116は口径8.1cm、器高2.3cmを測るものであり、口体部は僅かに内湾して短く立ち上がる。底部外面に糸切り痕が見られ、外縁が僅かに段状を呈する。117は推定口径7.5cm、器高1.6cmを測るものであり、口体部がごく短くかすかに内湾して開く。底部にはスノコ状の痕跡が残る。118は口径7.8cm、器高2.2cmを測るものであり、口体部は短く直線的に開き、口縁端部は丸く納められる。底部外面には糸切り痕が見られ、底部はやや厚く外縁が僅かに台状を呈す。119は口径8.5cm、器高1.5cmのものであり、口体部は短く開く扁平な器形である。底部外面は糸切り痕が見られ、底部と体部の境ははっきりしない。重ね焼きの他の個体片が付着する。120も口径9.0cm、器高1.4cmのものであり、口体部は短く内湾気味に低く立ち上がる扁平な器形である。底部外面に糸切り痕が見られ、底径が広いものとなっている。121は口径7.4cm、器高1.2cmのもので、口体部はごく短く直線的に開く扁平な器形である。底部外面に糸切り痕が残る。112 ～ 121の小皿は、いずれも灰白色ないしは灰色を呈する須恵器質のものであり、地元の皿山窯産のものと考えられる。112 ～ 116・118が山茶碗Ⅱ期のものと考えられるが、112・113・116がやや新しいものかと考えられる。117・119 ～ 121は山茶碗Ⅲ期のものと考えられる。122は鉢の底部である。底部から体部下半にかけて内湾気味に開く。底部外面には断面方形の高台が貼り付けられるが、端部がやや外に開く。全体に回転ナデ調整であるが、体部下半外面に回転ヘラ削り調整が見られる。灰色を呈する須恵器質の焼き上がりであり、地元の皿山窯のものと考えられる。123の鉢の底部片であるが、底部から体部下半にかけて内湾気味に開く。底部には断面三角形を呈する高台が貼り付けられる。灰白色ないし灰色を呈する焼き上がりであり、やや大きな白色砂粒を含む胎土である。知多窯産のものと考えられる。

灰釉陶器（124）　124は一応灰釉陶器としたが、破片であり器形がはっきりとしないものである。一方の端部外面には箱型の突起があり、一部穿孔されたように端部が成形されている。

貿易陶磁（125 ～ 128）　125は青白磁の合子の蓋である。推定口径6.2cm、器高1.5cmのものであり、外面



第 32 図　上層包含層出土遺物実測図２（瓦・土錘・銅製品）

天井部には葉状の文様が、また側面には縦の平行線の文様が浮彫にされている。126は青磁の碗の底部である。断面方形の高台が削り出されており、底部外面を除き、灰オリーブ色の釉薬が厚く施される。127は口径11.6cm程の青磁の皿の口縁部である。口縁部は外反して開き、口縁端部は波状を呈する。口縁部内面には、三条の線が施され、さらにその下には刻花文状の文様が見られる。内外面にくすんだオリーブ灰色の釉が施される。128は青磁の碗の口縁部である。口体部は直線的に開き、口縁端部が僅かに外反する。外面には連弁文が施されている。内外面にオリーブ灰色の釉が施される。

国内産陶器（129・130）　129は瀬戸美濃産の端反皿であり、推定口径9.6cmを測る。口体部は体部下半で屈曲し、口縁部は外反して開く。底部にはごく小さな高台が作られている。浅黄色を呈する釉薬が薄く施されており、内面中央に花かと思われる文様が見られる。時代的には新しく大窯第１段階のものと考えられる。130は常滑産の甕の口縁部である。大きく屈曲して開き、口縁端部は丸く納められている。口縁部外面には、横方向に刷毛状の筋が見られ、内外面に暗オリーブ色の釉がかかる。他に肩部と考えられる同一個体が出土しているが、それには「回」の字状や平行文状の叩き目が見られ、やはり暗オリーブ色を呈する釉がかかっている。

土師器（131）　131は伊勢系鍋の口縁部片である。口縁部は外反して開き、口縁端部は折り返して押さえられ、内上方に屈曲する。外面には煤が付着している。南伊勢系鍋第１段階頃のものと考えられる。

瓦（132 ～ 134）　132は巴文の軒丸瓦の瓦当部分の破片である。巴文の尾は長く延び、外縁部内側が斜めに削られている。133は丸瓦の破片である。全体的に磨滅しておりはっきりしないが、凸面及び側面はケズリ調整と思われる。134は平瓦であるが、凸面に斜格子状の叩き目痕が残る。

土錘（135・136）　135は長さ4.4cm、最大径1.8cmで、指頭圧痕がかすかに認められる。136は長さ5.2cm、最大径3.4cmのもので、指頭圧痕が顕著である。須恵器質の焼成である。

銅製品（137）　137はピン状のもので、中央から二股となり、他方の端部は尖った形となる。

第８表　上層遺構・包含層出土遺物観察表１（土器）

挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	遺構名	層位	種類	器種	残存率	口径(cm)	底径 高台径(cm)	器高(cm)	色調	備考
24-1	番号	３区	D-4	SD01	遺構第３層	山茶碗	碗	35%	(16.0)	(9.6)	5.1	N6/　灰	
24-2	12-2	３区	D-5	SD01	遺構第３層	山茶碗	碗	95%	15.4	7.7	5.0	10YR7/3　にぶい黄橙	
24-3	12-3	２区	D-6	SD01	遺構第２層	山茶碗	碗	80%	15.8	7.2	5.2	N6/　灰	
24-4		３区	D-4,5	SD01	遺構第１層	山茶碗	碗	30%	(16.2)	7.8	5.0	N6/　灰	
24-5		３区	D-3	SD01	遺構第５層	山茶碗	碗	50%	－	8.2	(4.3)	5Y6/1　灰	
24-6		３区	D-5	SD01	遺構第５層	山茶碗	碗	30%	(14.8)	(6.2)	5.6	2.5Y6/1　黄灰	
24-7		３区	D-4	SD01	遺構第３層	山茶碗	碗	10%	(15.2)	(7.5)	5.1	5Y6/1　灰	
24-8		３区	D-3	SD01	遺構第１層	山茶碗	碗	(40%)	－	6.8	(3.3)	N5/　灰	
24-9		３区	D-5	SD01	遺構第１層	山茶碗	碗	(40%)	－	6.2	(3.2)	7.5Y8/1　灰白	墨書
24-10	12-4	３区	D-5	SD01	遺構第１層	山茶碗	碗	(15%)	－	(6.2)	(4.5)	N7/　灰白	
24-11		３区	D-2	SD01	遺構第２層	山茶碗	碗	15%	(15.6)	(8.3)	(5.8)	10YR8/1　灰白	
24-12		３区	D-3	SD01	遺構第１層	山茶碗	小皿	(30%)	－	4.1（推定）	(1.1)	10Y7/1　灰白	墨書
24-13		３区	D-4,5	SD01	遺構第１層	山茶碗	小皿	(30%)	－	(4.4)	(1.0)	N7/　灰	墨書
24-14	12-5	３区	D-5	SD01	遺構第２層	山茶碗	小皿	99%	7.6	4.3	2.0	N6/　灰	
24-15	12-6	３区	D-3	SD01	遺構第２層	山茶碗	小皿	100%	7.3	3.7	1.7	7.5Y7/1　灰白	
24-16		２区	D-6	SD01	遺構第２層	山茶碗	小皿	50%	(8.4)	(4.0)	1.7	N6/　灰	
24-17	12-7	３区	D-2	SD01	遺構第３層	山茶碗	小皿	80%	8.5	4.8	1.6	5Y6/1　灰	
24-18	12-8	３区	D-5	SD01	遺構第１層	山茶碗	小皿	99%	9.4	4.9	1.6	N6/　灰	
24-19	12-9	３区	D-5	SD01	遺構第５層	山茶碗	小皿	95%	8.1 ～ 9.0	5.0	1.1 ～ 2.2	N6/　灰	
24-20	12-10	３区	D-3	SD01	遺構第３層	山茶碗	片口鉢	(5%)	(28.6)	－	(7.6)	N6/　灰	
24-21	12-11	３区	D-3	SD01	遺構第５層	山茶碗	鉢	(20%)	(26.4)	－	(8.7)	2.5Y6/1　黄灰	
24-22		３区	D-3	SD01	遺構第２層	灰釉陶器	碗	(30%)	－	(6.7)	(2.4)	10YR8/1　灰白	
26-28	12-13	２区	C-8	SR01	遺構第１層	山茶碗	碗	90%	16.9	6.1	6.1	5Y7/1　灰白	
26-29	12-14	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	90%	16.1	7.0	5.5	N7/　灰白	
26-30	12-15	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	40%	(16.5)	(6.9)	5.4	N6/　灰	
26-31		２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	40%	(16.6)	(7.2)	5.8	2.5Y5/1　黄灰	
26-32	12-16	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	60%	(15.8)	7.0	6.2	5Y6/1　灰	
26-33	13-1	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	70%	15.7	7.3	5.4	N6/　灰	
26-34	13-2	２区	C-7	SR01	遺構１層	山茶碗	碗	30%	(15.4)	(7.1)	6.3	2.5Y8/1　灰白	
26-35	13-3	２区	C-8	SR01	遺構第１層	山茶碗	碗	98%	14.7	6.0	4.3	5Y6/1　灰	
26-36		２区	C-7	SR01	遺構第１層	山茶碗	碗	40%	－	6.7	(2.0)	7.5YR7/4　にぶい橙	墨書
26-37	13-4	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	98%	15.4	8.4	5.4	5Y6/1　灰	
26-38		２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	30%	(15.2)	(7.4)	5.2	N5/0　灰	
26-39	13-5	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	90%	16.3	8.0	5.8	N5/0　灰	
26-40	13-6	２区	C-7,8	SR01	遺構第１,２層	山茶碗	碗	70%	16.2	7.4	6.0	N8/　灰白	
26-41	13-7	２区	D-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	40%	(15.8)	6.9	5.9	N7/　灰白	
26-42	13-8	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	98%	15.7	8.0	5.5	5Y6/1　灰	
26-43	13-9	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	98%	15.4	8.0	6.0	5Y6/1　灰	
26-44	13-10	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	40%	(15.6)	6.9	5.4	N6/　灰	
26-45	13-11	２区	C-8	SR01	遺構１層	山茶碗	碗	30%	(15.6)	(7.7)	5.7	N6/　灰	
26-46	13-12	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	75%	15.5	7.0	5.9	10Y6/1　灰	
26-47	13-13	２区	C-8	SR01	遺構１層	山茶碗	碗	70%	15.2	6.4	5.0	N7/　灰白	墨書
26-48	13-14	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	70%	(14.4)	6.5	5.3	7.5Y5/1　灰	
27-49	14-1	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	80%	16.6	8.4	6.1	10Y6/1 灰	
27-50	14-2	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	80%	14.9	7.2	5.9	N6/　灰	
27-51	14-3	２区	C-8	SR01	遺構第１層	山茶碗	碗	70%	16.6	7.0	6.2	N6/　灰	
27-52	14-4	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	50%	(15.6)	7.0	5.3	N5/　灰	
27-53	14-5	２区	C-7	SR01	遺構第１層	山茶碗	碗	50%	(15.1)	6.8	4.7	2.5Y6/1　黄灰	
27-54	14-6	２区	D-8	SR01	遺構第１層	山茶碗	碗	80%	(15.1)	6.6	5.3	N7/　灰白	
27-55	14-7	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	碗	35%	(14.6)	(7.4)	5.1	7.5Y6/1　灰	
27-56	14-8	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	小皿	65%	9.9	5.2	2.8	N6/　灰	
27-57		２区	C-8	SR01	遺構第１層	山茶碗	小皿	30%	(8.6)	(4.0)	2.3	2.5Y7/1　灰	
27-58	14-9	２区	D-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	小皿	70%	9.8	6.0	2.5	N6/　灰	
27-59	14-10	２区	D-6	SR01	遺構第２層	山茶碗	小皿	99%	8.2	4.7	2.0	N6/　灰	
27-60	14-11	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	小皿	100%	7.7	4.0	2.0	5Y6/1　灰	
27-61	14-12	２区	D-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	小皿	65%	8.6	5.0	1.8	5Y7/1　灰白	
27-62	14-13	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	小皿	60%	8.6	(3.6)	1.3	2.5Y4/1　黄灰	２枚融着
27-63	14-14	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	小皿	90%	8.5 ～ 9.3	4.7	1.4 ～ 2.0	5Y6/1　灰	
27-64	14-15	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	小皿	80%	8.4	4.3	1.7	2.5Y6/1　黄灰	
27-65	14-16	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	小皿	90%	9.3	5.0	1.8	N6/　灰	
27-66	15-1	２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	片口鉢	25%	(31.5)	－	(9.8)	2.5Y5/1　黄灰	
27-67		２区	C-8	SR01	遺構第２層	山茶碗	壷	(15%)	－	(13.0)	(6.7)	5Y6/1　灰	
27-68	15-2	２区	C-8,9	SR01	遺構第１層	須恵器	大甕	(10%)	(42.2)	－	(13.6)	N7/　灰白	

第９表　上層遺構・包含層出土遺物観察表２（土器・陶磁器）

挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	遺構名	層位	種類	器種	残存率	口径(cm)	底径 高台径(cm)	器高(cm)	色調	備考
31-108	15-3	２区	D-7		上層包含層	山茶碗	碗	50%	(14.3)	(6.0)	4.5	N7/　灰白	墨書
31-109		２区	C-7		上層包含層	山茶碗	碗	35%	-	6.0	(3.3)	N7/　灰白	墨書
31-110	15-4	３区	D-3		上層包含層	山茶碗	碗	55%	(15.2)	7.0	6.0	N6/　灰	
31-111	15-5	２区	C-8		上層包含層	山茶碗	小碗	80%	8.1	4.1	2.5	N6/　灰	
31-112	15-6	２区	C-8		上層包含層	山茶碗	小皿	70%	7.6	4.1	1.8	N6/　灰	
31-113	15-7	２区	C-7,8		上層包含層	山茶碗	小皿	80%	7.5	4.6	1.8	2.5Y8/1　灰白	
31-114	15-8	２区	C-8		上層包含層	山茶碗	小皿	50%	(8.8)	6.1	2.0	5Y8/1　灰白	
31-115	15-9	３区	D-5		上層包含層	山茶碗	小皿	99%	8.5	5.2	2.0	5Y7/1　灰白	
31-116	15-10	２区	C-7,8		上層包含層	山茶碗	小皿	60%	8.1	5.0	2.3	N7/　灰白	
31-117		２区	D-8		上層包含層	山茶碗	小皿	45%	(7.5)	4.8	1.6	N6/　灰	
31-118	15-11	２区	B-8		上層包含層	山茶碗	小皿	75%	7.8	4.3	2.2	N6/　灰	
31-119	15-12	２区	C-9		上層包含層	山茶碗	小皿	70%	8.5	4.6	1.5	N7/　灰白	２枚融着
31-120		２区	C-8		上層包含層	山茶碗	小皿	40%	(9.0)	(5.1)	1.4	10YR7/1　灰白	
31-121	15-13	２区	D-7		上層包含層	山茶碗	小皿	99%	7.4	4.2	1.2	N6/　灰	
31-122		２区	C-9		上層包含層	山茶碗	鉢	(15%)	–	(11.9)	(5.5)	N6/　灰	
31-123		３区	D-5		上層包含層	山茶碗	鉢	(15%)	–	(11.6)	(5.0)	5Y6/1　灰	
31-124	15-14	２区	C-9		上層包含層	灰釉陶器　？		(10%)	–	–	(3.6)	2.5Y7/1　灰白	
31-125		２区	C-9		上層包含層	貿易陶磁	合子	10%	(6.2)	–	1.5	釉　7.5GY7/1　明緑灰	青白磁
31-126		２区	C-6		上層包含層	貿易陶磁	碗	(5%)	–	(5.7)	(2.1)	釉　5Y6/2　灰オリーブ	青磁
31-127		２，３区	C-7,D-5	TP3	上層包含層	貿易陶磁	皿	15%	(11.6)	–	(2.1)	釉　10Y6/2　オリーブ灰	青磁
31-128		２区	D-7		上層包含層	貿易陶磁	碗	5%ｉ以下	(16.0)	–	(2.8)	釉　10Y5/2　オリーブ灰	青磁
31-129		２区	C-8		上層包含層	陶器	小皿	30%	(9.6)	(5.2)	2.1	釉　2.5Y7/4　浅黄	瀬戸美濃
31-130	15-15	２区	D-7		上層包含層	陶器	甕	5%ｉ以下	–	–	(6.6)	釉　7.5Y4/3　暗オリーブ	常滑
31-131	15-16	２区	C-8		上層包含層	土師器	伊勢鍋	5%ｉ以下	(26.0)	–	(21.4)	7.5YR4/2　灰褐	

第 10 表　上層遺構・包含層出土遺物観察表３（土錘・瓦）

挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	遺構名	層位	種類	器種	残存率	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	色調	備考
32-132	15-17	２区	C-9		上層包含層	土製品	軒丸瓦	10%	(6.7)	径（11.6）	(2.4)	N7/　灰白	
32-133		３区	D-4		上層包含層	土製品	丸瓦	5%	(6.8)	(5.8)	(1.8)	2.5Y7/2　灰黄	
32-134		２区	C-8		上層包含層	土製品	平瓦	25%	(11.5)	(8.8)	2.9	N7/　灰白	
32-135	15-18	３区			排土	土製品	土錘	80%	4.4	1.8	1.8	7.5Y7/1　灰白	
32-136	15-19	２区	C-9		上層包含層	土製品	土錘	100%	5.2	3.4	3.4	N5/　灰	

第 11 表　上層遺構・包含層出土遺物観察表４（銭貨・銅製品）

挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	遺構名	層位	種類	器種	残存率	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
24-23	12-12	３区	D-5	SD01	遺構第１層	金属製品	銭貨	70%	径 2.5	-	0.1	『天聖元寳』
32-137	15-20	３区	D-6		包含層	金属製品	不明	100%	(4.4)	0.4	0.2	銅製品

第 12 表　上層遺構・包含層出土遺物観察表５（木製品）

挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	遺構名	層位	種類	器種	樹種	木取り	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
25-24	16-1,2	３区	D-4	SD01	遺構第３層	容器・食事具・挽物	漆椀	ケヤキ	縦木取り　柾目	高台径 7.2	器高（3.8）	0.8	黒漆
25-25	16-5	３区	D-5	SD01	遺構第３層	農具の一部	農具の一部	スギ	板目	（9.2）	（7.2）	2.3	
25-26	16-6	３区	D-5	SD01	遺構第３層	容器	曲物底板	スギ	柾目	（32.2）	（6.4）	0.5	径（34.0）
25-27	16-8	３区	D-5	SD01	遺構第３層	板材	板材	イヌマキ属	追柾目	（99.7）	16.7	4.3	
28-69	16-3,4	２区	D-8	SR01	上層包含層	容器・食事具・挽物	漆椀	ケヤキ	縦木取り　柾目	底径 8.0	器高（1.4）	0.4	黒漆
28-70	16-7	２区	C-8	SR01	遺構第１層	容器	曲物底板	スギ	板目	（14.6）	4.8	0.5	
28-71	17-1	２区	C-7	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クヌギ節	芯持材	（35.3）	径 3.2 × 4.0		
28-72	17-1	２区	C-7	SR01	遺構第１層	土木材	杭	サカキ	芯持材	（31.6）	径 3.2		
28-73	16-9	２区	C-7	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クリ	蜜柑割材	（89.9）	12.9	5.6	
28-74	17-1	２区	C-7	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クスノキ科 B	芯持材	（53.5）	径 3.4 × 4.0		
28-75	17-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	アワブキ	芯持材	（61.6）	径 3.5 × 3.7		
28-76	17-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	アワブキ	芯持材	（61.9）	径 3.5 × 3.8		
28-77	17-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クスノキ科 A	芯持材	50.8	径 2.8		
28-78	17-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クスノキ科 A	芯持材	（29.7）	径 4.6		
28-79	17-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	ネジキ	芯持材	（31.4）	径 3.7		
28-80	17-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クスノキ科 A	芯持材	（40.6）	径 3.5		
28-81	17-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クリ	芯持材	40.0	径 4.6 × 5.5		
28-82	17-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	シャシャンボ	芯持材	（38.0）	径 4.0		
29-83	17-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	スダジイ	芯持材	（57.5）	径 3.9 × 4.6		
29-84	17-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	トネリコ属	芯持材	（44.3）	径 5.7 × 6.6		
29-85	17-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クリ	割材	（30.1）	10.2	5.8	
29-86	17-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	スダジイ	芯持材	（49.7）	径 3.8 × 4..0		
29-87	17-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クリ	芯持材	（68.0）	径 3.8		
29-88	17-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	スダジイ	芯持材	（40.3）	径 6.1		
29-89	17-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クリ	芯持材	（68.7）	径 4.1 × 4.5		
29-90	18-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	サカキ	芯持材	（81.5）	径 3.9		
29-91	18-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	コジイ	蜜柑割材	（37.8）	6.5	4.1	
29-92	18-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クリ	芯持材	59.0	径 4.7		
29-93	18-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	二葉松類	芯持材	（23.7）	径 6.0 × 6.5		
29-94	18-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クリ	芯持材	（65.4）	径 5.3 × 6.1		
30-95	18-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クスノキ科 A	芯持材	（73.4）	径 3.6 × 3.9		
30-96	18-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	アワブキ	芯持材	（82.9）	径 3.7		
30-97	18-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	スダジイ	芯持材	（60.6）	径 3.4		
30-98	18-1	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クリ	芯持材	（74.0）	径 3.1		
30-99	18-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クスノキ科 B	芯持材	（84.0）	径 3.0 × 3.6		
30-100	18-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	スダジイ	芯持材	（52.3）	径 3.5 × 3.7		
30-101	18-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クリ	芯持材	（44.3）	径 3.4		
30-102	18-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	スダジイ	芯持材	（53.7）	径 3.2 × 3.6		
30-103	18-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	コジイ	芯持材	（37.7）	径 3.6		
30-104	18-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	ヤマザクラ	芯持材	（37.0）	径 4.1		
30-105	18-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	クリ	芯持材	（45.0）	径 5.3 × 5.8		
30-106	18-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	シャシャンボ	芯持材	（33.2）	径 4.5		
30-107	18-2	２区	C-8	SR01	遺構第１層	土木材	杭	アワブキ	芯持材	（83.7）	径 3.1 × 3.4		

２　下層の出土遺物

（１）遺物の出土状況

この時期の遺構としたＳＤ１２からは奈良・平安時代の土師器が、またＳＤ１０・ＳＤ１１・ＳＸ０３・ＳＸ０４からは弥生時代後期の土器が出土している。特にＳＤ１０は、弥生土器が集中して出土している。なお、前述したが、中世の遺構であるＳＤ０１から弥生土器や古墳時代の土師器が多く出土しているが、包含層からの流れ込みと考えた。この他、下層の包含層とした３区を中心に広がる第７層（鉄分を含む黒褐色シルト土層）・第８層（鉄分を含む褐色シルト土層）・第９層（鉄分を少量含む暗褐色シルト層）及び１区を中心とした第10層（褐色土混じりの灰黄褐色シルト層）から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の土器が出土している。以下、古墳時代～奈良・平安時代のものと弥生時代以前のものとに分けてその概要を述べる。

（２）古墳時代から古代の出土遺物

包含層及び遺構から出土したものをいくつか図示したが、その多くを占める土師器はほとんどが細片で、また磨滅しており、形を復元できたものは少なかった。遺構に伴うものとしては、ＳＤ１２とした自然流路かと考えられる溝状遺構からのものがある。奈良・平安時代の遺物は、どちらかというと１区の包含層から出土しており、古墳時代のものは３区の包含層から出土している。

ＳＤ１２（第33図）

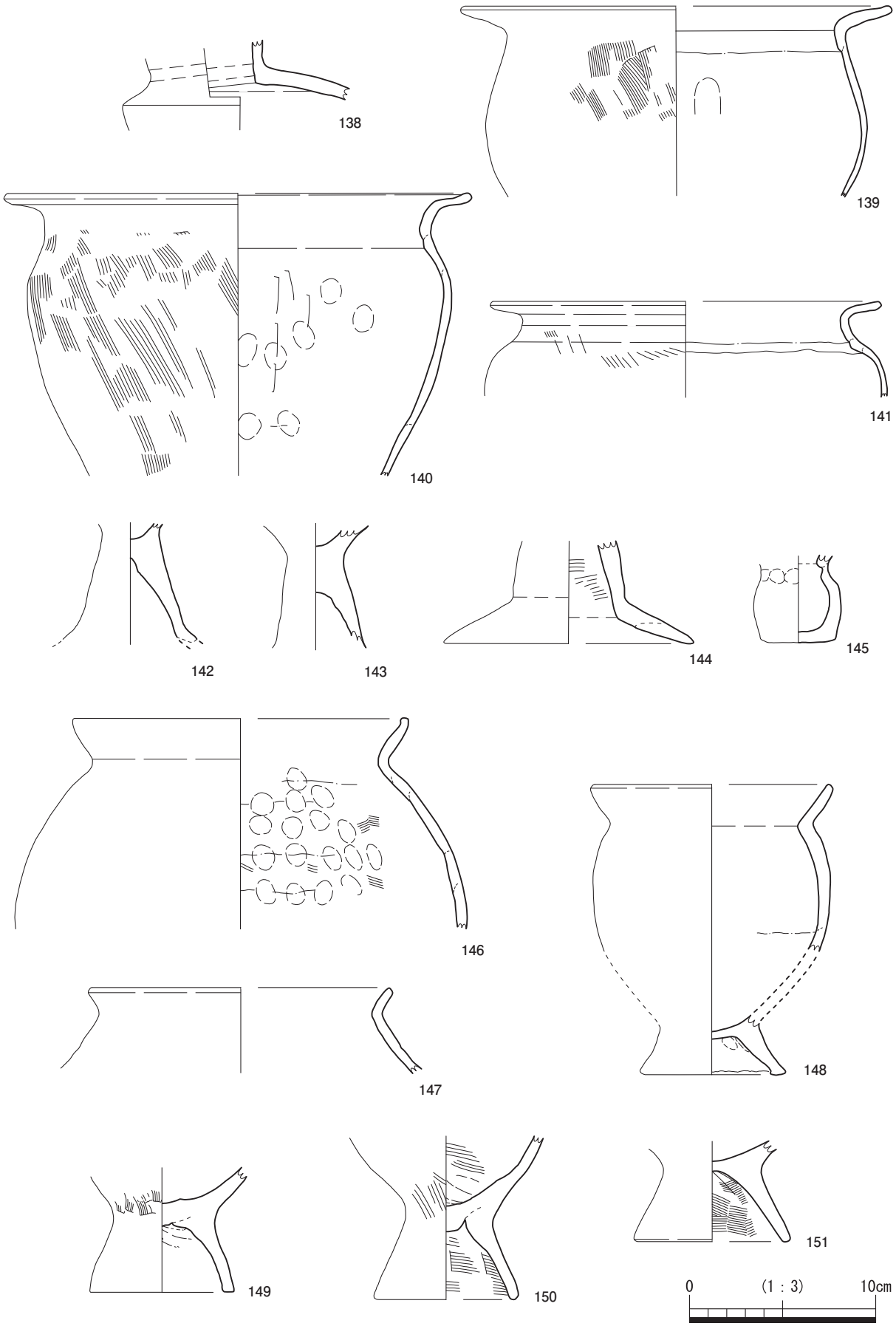
土師器（139・140）　139は口縁部が横方向に開くタイプの長胴甕である。胴部上位に最大径を持つ形となる。推定口径23.0cm、推定胴部最大径20.4cmを測る。口縁部はナデ調整であり頸部の内側には、接合痕が残る。胴部外面には斜位のハケ目調整が見られ、内面はナデ調整で指頭圧痕が見られる。焼成は良好であり、橙色を呈する。140も口頸部が屈曲して横方向に開くタイプの長胴甕である。胴部下半から底部を欠損するが、口径25.2cm、胴部最大径22.9cmを測るやや大型のものである。口縁端部はわずかに上方に屈曲し、肥厚する。胴部最大径を肩近くに持ち、肩部分がやや膨らむものである。口縁部は横ナデ、頸部下半から胴部外面は斜位のハケ目調整が見られる。内面はヘラ状工具による横方向のナデ調整かと思われ、指頭圧痕が見られる。焼成は良好であり、橙色を呈する。いずれも静岡県中西部を中心に分布する長胴甕であり、奈良時代後半頃のものかと考えられる。

包含層（第33図）

須恵器（138）　138は、1区の包含層から出土した平瓶である。頸部から肩部にかけての破片である。肩部部分は丸身を持ち、やや径の大きい頸部が中心からずれて接合されている。肩部と胴部の境の稜はあまり鋭いものではない。全体的に回転ナデ調整が施されており、口縁部から肩部外面には、灰オリーブ色の釉を被っている。奈良時代頃のものかと考えられる。

土師器（141 ～ 151）　141は推定口径21.0cmの長胴甕である。口縁部が強く横に開くタイプのものである。胴部最大径をその上位に持つものと考えられる。全体的に磨滅が激しい。口縁部は横ナデで、胴部外面には斜め方向のハケ目調整が見られる。胴部内面はナデ調整である。肩部と頸部の境付近内面には、接合痕が見られる。奈良時代後半頃のものかと考えられる。

142 ～ 151は古墳時代の土師器であり、146が３区のＳＤ０１の下層から出土している他は、３区のＤ２及びＤ５グリッドの古墳時代の包含層とした土層から出土している。142・143・144は高坏の脚部である。いずれも基部から裾部に向かって緩やかに開き、途中で外に強く屈曲して裾部が大きく開く形のものである。全体に磨滅が激しく、調整がはっきりしないが、142は外面はナデ調整、脚内面は板状のものによるナデかと思われる。143は全体的に磨滅が激しく、はっきりしないが、ナデ調整かと思われる。144は内面に横方向のハケ目が見られる。外面ははっきりしないが、ハケ目調整の後ナデか。142 ～ 144の高坏については、古墳時代中期のものと考えられる。145はミニチュアの壺型土器であり、底部は平



第 33 図　ＳＤ１２及び下層包含層出土遺物実測図（須恵器・土師器）

第 13 表　下層遺構・下層包含層出土遺物観察表１（土器）

挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	遺構名	層位	種類	器種	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	備考
33-138		１区	A-11		下層包含層（排水溝）	須恵器	平瓶	(5%)	－	－	(4.8)	7.5Y5/2　灰オリーブ	
33-139		１区	C-11	SD12		土師器	甕	(5%)	(23.0)	－	(10.3)	5YR6/6　橙	胴部最大径（20.4）
33-140	19-1	１区	C-11,12	SD12	遺構第１層	土師器	甕	40%	25.2	－	(15.2)	5YR6/4　にぶい橙	胴部最大径 22.9
33-141	19-2	１区	C-12		下層包含層	土師器	甕	(10%)	(21.0)	－	(5.1)	5YR4/2　灰褐	
33-142	19-3	３区	D-4	SD01	遺構第２層	土師器	高坏	(10%)	－	－	(6.4)	10YR8/3　浅黄橙	
33-143	19-4	３区	D-5	SD01	遺構第２層	土師器	高坏	(10%)	－	－	(6.6)	7.5YR7/4　にぶい橙	
33-144	19-6	３区	D-5		下層包含層	土師器	高坏	(15%)	－	(13.4)	(5.5)	5YR7/6　橙	
33-145	19-5	３区	D-5		下層包含層	土師器	小型壺	80%	－	4.0	(4.7)	7.5YR7/4　にぶい橙	
33-146	19-7	３区	D-2	SD01	遺構第５層	土師器	甕	(20%)	(18.0)	－	(11.3)	7.5YR6/4　にぶい橙	胴部最大径（24.3）
33-147		３区	D-2		下層包含層	土師器	甕	(10%)	16.0	－	(4.4)	7.5YR7/4　にぶい橙	
33-148		３区	D-5		下層包含層	土師器	台付甕	40%	(13.0)	7.8	(15.6)	10YR7/2　にぶい橙	
33-149	19-8	３区	D-2		下層包含層	土師器	台付甕	(10%)	－	7.8	(6.7)	7.5YR7/4　にぶい橙	
33-150	19-9	３区	D-5		下層包含層	土師器	台付甕	(10%)	－	7.8	(8.8)	10YR6/3　にぶい黄橙	
33-151	19-10	３区	D-2		下層包含層	土師器	台付甕	(10%)	－	7.8	(5.4)	5YR6/3　にぶい橙	

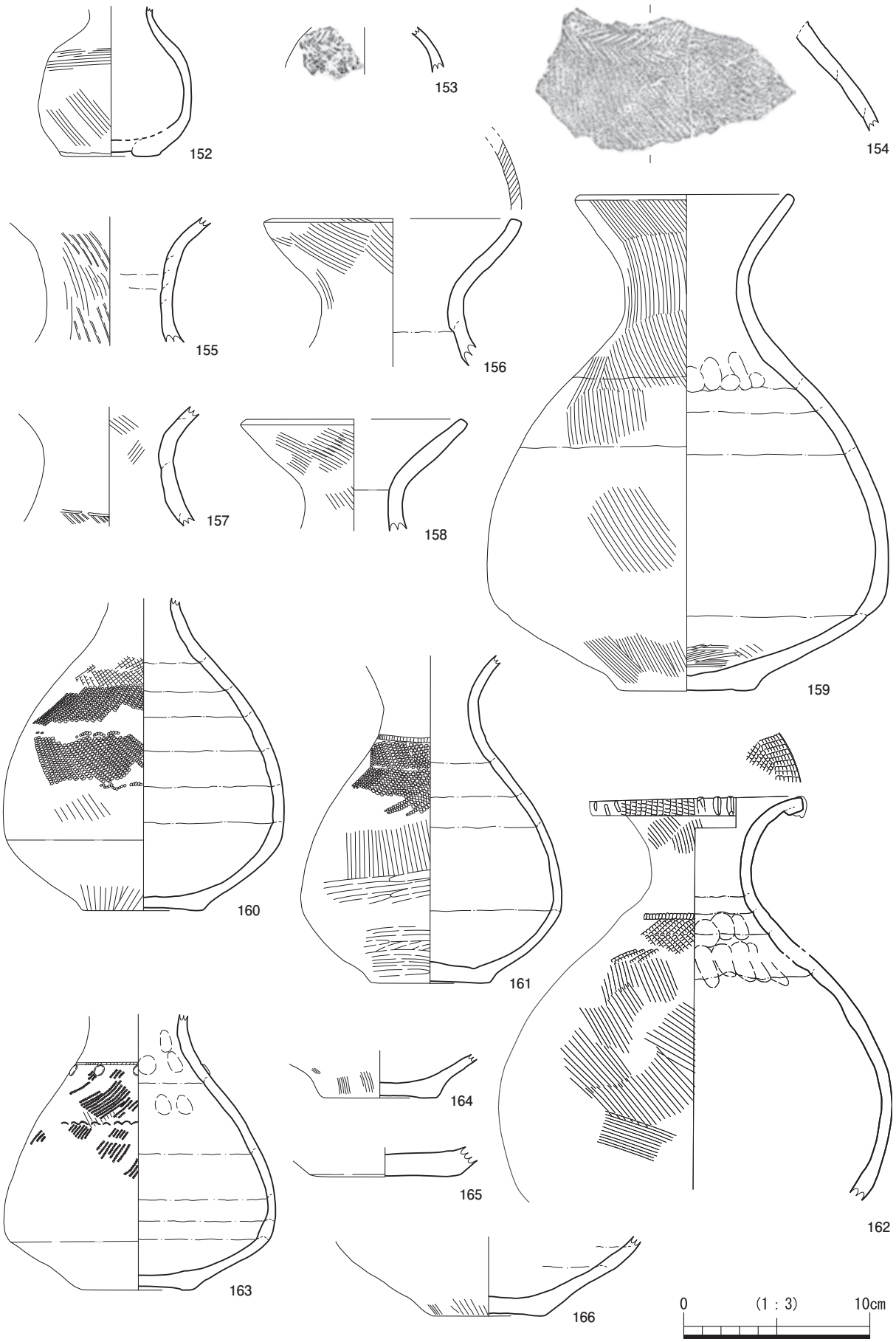
底を呈し、胴部はやや膨らむ。頸部がすぼむ形を呈するが、口縁部を欠く。全体にナデられており、頸部外面に指頭圧痕が見られる。頸部内側が窪んでおり、口縁部との接合痕が残る。前述の高坏と同様、比較的粒の大きい砂粒を含む。古墳時代中期頃のものかと考えられる。146は推定口径18.0cm、胴部最大径24.3cmを測る甕である。口縁部は外上方に開き、端部が内側に肥厚する。胴部は球形に膨らんでいる。口縁部は横ナデ、胴部外面はハケ目調整後ナデ、内面は横位のハケ目調整の後ナデ、指頭圧痕が見られる。大粒の白色粒子を含む胎土である。147は甕の口頸部片である。口縁部は短く直線的に外上方に開く。全体に磨滅が激しく、調整ははっきりしない。大粒の白色・灰色粒子を多く含む胎土である。148は小型の台付甕である。推定口径13.0cmを測る。台部について胴部と接合できなかったが、出土状況や胎土の状況から同一個体と考え、図示した。口縁部は直線的に外上方に開き、胴部は丸味を持つ。台部は外下方に張り出し、下端部内側が摘みだされている。磨滅が激しく調整ははっきりしないが、ナデ調整かと思われる。149～151は台付甕の台部である。149は台部の裾径7.8cmを測り、やや内湾気味に下方に開く。端部は平坦に仕上げられている。全体的に磨滅が激しいが、底部との境付近外面にはハケ目、内面には横方向のハケ目がかすかに見られる。内面中央には胴部との接合痕が観察できる。150は台部の裾径7.8cmを測るものであり、直線的に外下方に開く。台部の端部は丸く納められる。胴部下部は内湾気味に外上方に立ち上がる。全体的に磨滅は激しいが、胴部下部外面縦のハケ目、内面には横位のハケ目が見られる。また、台部外面はナデ、内面には横位のハケ目が見られる。内面には胴部との接合痕が見られる。151は台部裾径7.8cmを測るものである。直線的に外下方に開き、端部は方形に近い形となる。台部外面及び底部内面は磨滅により調整ははっきりしないが、台部内面には横位のハケ目が見られる。146～150は古墳時代前期のものと考えられる。151は古墳時代初頭のものと考えられるが、あるいはもう少し古くなるものかもしれない。

（３）弥生時代以前の出土遺物

遺構（ＳＤ１０・ＳＤ１１・ＳＸ０３・ＳＸ０４）及び包含層出土の弥生土器を抽出して図示した。いずれの土器も、埋没環境に起因するためか、土器表面の風化・磨耗が著しく、文様・調整方法等の観察が困難なものが多い。

本項で記述する土器は、一般的に菊川式と呼ばれる当該地域に一般的な弥生時代後期の土器群である。壺・甕・高坏の３器種が認められた。

壺は肩部が張らない下膨れの形態を有するもので、単純口縁と折り返し口縁のものが確認された。折り返し口縁は、内面及び口唇部、肩部に櫛刺突文や縄文を施文することが一般である。肩部の施文は、上端を横位の櫛刺突文で区画し、以下に櫛刺突羽状文や縄文を展開するもので占められること、頸部との接合部外面に段を持ついわゆる「有段羽状文」は皆無であることなど、当該地域の特徴を良く示してい



第 34 図　ＳＤ１０出土遺物実測図１（弥生土器）

ると判断できる。

甕は、菊川式に典型的な台付きのものに加え、当該地域に特徴的とされる、平底を呈すると推定される折り返し口縁を有するものが一定量確認されている。

高坏は当該地域では組成比率が低いと考えられているものであるが、２点を確認できた。ただし、形態や調整方法など、個体差も著しく定型化したものとは考えにくいことから、これまでの認識を改めるまでには至らないと判断される。

以下、遺構別に記述する。

ＳＤ１０（第34・35図）

溝状遺構から壺と甕が出土している。壺15点、甕12点を図示した。いずれも当該地域の弥生後期に一般的に認められる形態を有するもので、明らかな搬入品等は確認していない。

遺構覆土上層から出土したものが大半であること、形状をとどめるものは破片の移動が少なく潰れた状態で出土していること、溝の大半が埋投した段階でごく短期間のうちに投棄された可能性があること等から、比較的一括性が高いものと判断される。壺の施文方法、頸部の形態などから菊川式の中段階（弥生時代後期中葉）に相当すると考えられる。

壺は胴部最大径を下位に持つ下膨れの形態を有する当該期の一般的な壺の形態を有するもので占められる。口縁部は内湾気味に開く単純口縁を有するものと、ラッパ状に大きく開き、折り返し口縁を有するものの二者が認められる。頸部はやや短頸化が進んだものが認められ、肩部には上端を櫛刺突文で区画した文様を施すものが主体を占める。

甕は、胴部中位及びやや上位に最大径を持つ台付きの形態が主体となる一方で、口縁部外面に粘土紐を付加し、折り返し口縁としたものが少量認められる。後者は、本遺跡が立地する菊川流域に一定量組成が認められる形態であり、平底となる可能性がある。

壺（152 ～ 166）　152は小型品である。胴部中位に最大径を持ち、球形に近い形態を有する。胴部に比しやや大きな底部はほとんど突出しない。底部は、ドーナツ状の外周内面に粘土を充填しているため、裏面は外周が環状となり、中央がくぼむ。胴部外面は無文で、胴部下半を斜め、肩部を横方向のやや粗い刷毛により調整する。直立気味に立ち上がる口頸部は欠損する。

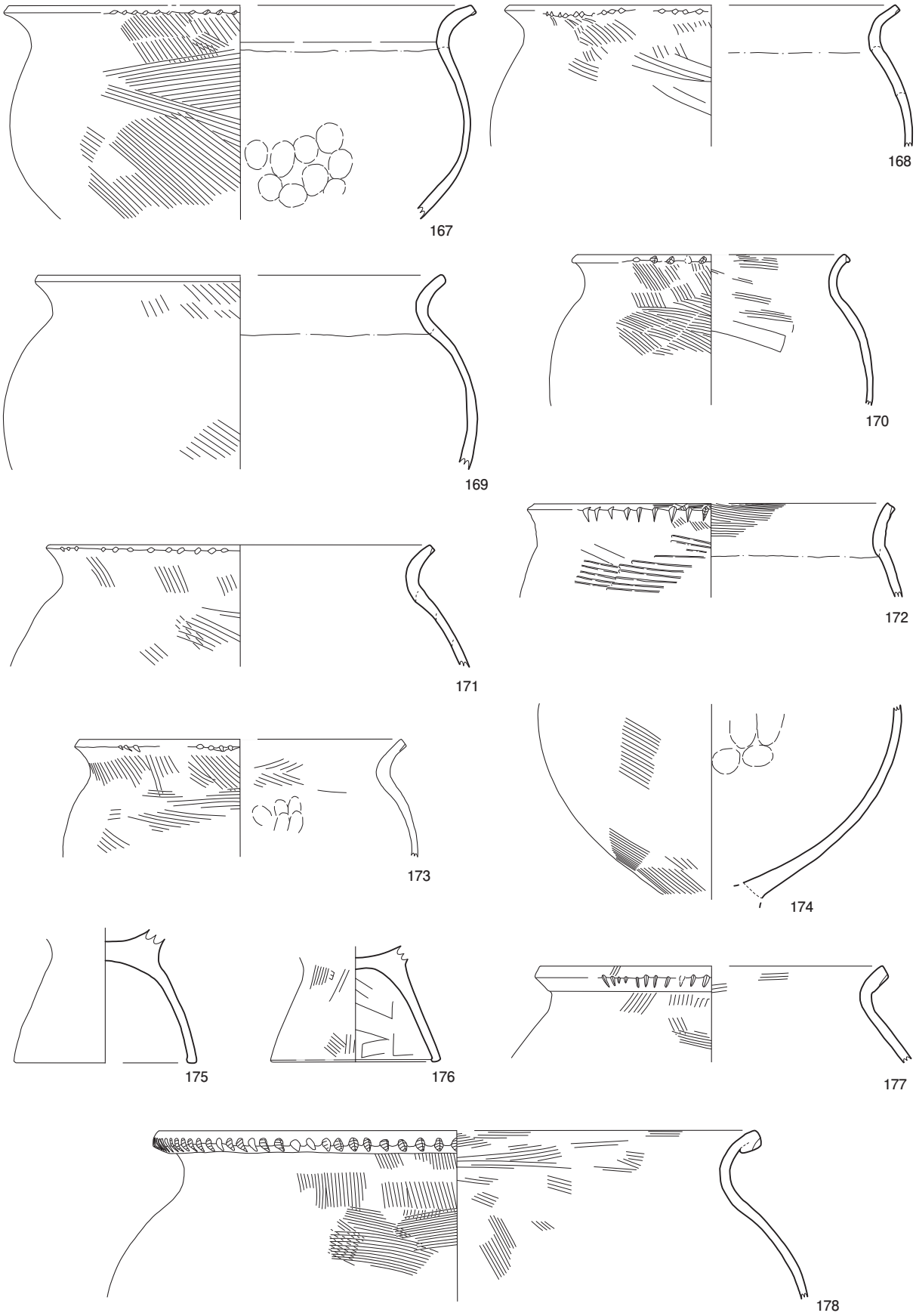
153は小型品の肩部破片である。湾曲が強いため、丸みが強い胴部となる可能性が高い。外面には櫛刺突羽状文が２段確認できる。内面はナデにより調整している。

154は肩部から胴部上半の破片である。外面は胴部上半を斜位の刷毛調整した後、肩部に上端を櫛刺突文で区画した２段の櫛刺突羽状文を施す。内面はナデ調整しているが、成形時の粘土紐の単位が明瞭に残されている。なお、上端の破断面は成形時の粘土紐の接合面になっていると推測され、やや内傾した面を形成している。

155・157 は頸部破片である。いずれもやや短めの頸部で、155は口縁部がラッパ状に大きく開くことから、口縁端部は折り返し口縁である可能性が高い。外面を粗い刷毛調整、内面は頸部をナデ、口縁部を横刷毛調整しているが、磨耗により詳細な観察は困難である。なお、頸部内面には成形時の粘土紐の接合痕が残されている。

157は肩部に上端を横位の櫛刺突文で区画した櫛刺突羽状文が１段確認できる。器壁の磨耗が著しく、調整方法の観察は困難である。

156・158は口頸部破片である。短い頸部から内湾気味に開く単純口縁を有し、口縁部外面は斜位のやや粗い刷毛調整を行う。156は口縁部外面を斜め刷毛、内面をナデ調整し、上外方に向けて面を持つ口唇部は刷毛工具による斜位の調整が確認できる。なお、頸部内面には成形時の粘土紐の接合痕が明瞭に観察できる。



第35図　ＳＤ１０出土遺物実測図２（弥生土器）

158は156よりも細頸を呈し、やや直線的な口縁部を有する。口唇部は上外方に向けた面を形成する。口縁部外面は刷毛、頸部は刷毛後、磨き調整を施していると考えられるが、磨耗が著しく、磨きの単位の観察は困難である。159は、胴部下位に最大径を持つ下膨れを呈し、肩部がわずかに丸みを帯びる胴部を有するものである。短い直立した頸部から直線的に開く口縁部は単純口縁を有する。口唇部は上外方に向けた面を持つ。胴部下半から滑らかに突出する底部は、裏面外周が接地し、中央がわずかにくぼむことから、ドーナツ状の外周の内側に粘土を充填して成形したものと推測される。ただし、他の同様の成形技法による底部とは中央のくぼみが少なく、底面はほぼ平坦となっている。外面は刷毛調整を行うが、通常施される肩部の施文は認められない。内面は下半部を刷毛、上半部はナデを主体に調整し、肩部付近には指頭痕を残す。

160は胴部下位に最大径を持ち、肩がわずかに丸みを帯びる。やや細めの頸部を有するが口縁部は欠損する。底部は裏面中央がわずかにくぼむ。胴部外面は粗い刷毛調整後、肩部に櫛刺突羽状文を２段施し、その下位の胴部上半に羽状となる結節縄文を２段施す。なお、櫛刺突羽状文の上端に横位の櫛刺突文の区画の可能性がある痕跡がわずかに認められるが、器壁の磨耗が著しく断定は困難である。内面はナデにより調整されるが、成形時の輪積み痕が残されている。

161は胴部下位に最大径を持ち、肩がわずかに丸みを帯びるが、160に比べ胴部の張りが弱く、細身の胴部となる。やや細い頸部からラッパ状に開くが口縁部は欠損する。胴部下半から滑らかに突出する底部は、裏面中央がわずかにくぼみ、内面は中央がやや盛り上がる平坦な底面をなす。胴部外面は粗い刷毛調整後、胴部下半は横方向を基調にしたヘラ磨き、肩部から胴部上半には上端を櫛刺突文で区画した羽状縄文を施す。内面はナデ調整を行うが、成形時の輪積み痕が残されている。

162は丸みが強い胴部を持ち、細い頸部からラッパ状に開く折り返し口縁を有する。胴部下半を欠損する。外面は刷毛調整後、肩部に上端を櫛刺突文で区画した３段の櫛刺突羽状文を施す。また、口縁部は、口唇部に縦位、口縁部内面に２段の櫛刺突羽状文を施す。なお、口唇部には３本一単位の棒状浮文を５箇所に貼付する。内面はナデ調整を行い、肩部付近にはロ頸部の接合の際に残された輪積み痕及び指圧痕が顕著に認められる。

163は胴部下位の低い位置に最大径を持ち、他に比べ丸みが少ない直線的な胴部上半から頸部へとつながる。底部は裏面がわずかにくぼむ。外面には肩～胴部上半に上端を櫛刺突文で区画した結節縄文を２段施す。また、文様帯上端には10個の円形浮文が等間隔に貼付される。

164～166は底部破片である。いずれも裏面がわずかにくぼむもので、外面には刷毛調整が確認できる。

164はやや薄く成形されており、やや小さい底部の底面は中央がわずかにくぼむが、内面は丁寧にナデ調整されており、平滑に整えられている。外面の底部立ち上がり付近に縦刷毛が認められる。

165はやや大きめの底部となる。中央がわずかにくぼむが、内面は丁寧にナデ調整されており、平滑に整えられている。底部の大きさに起因して、底部内面に明確な平坦面が形成されている。

166はやや小さい底部で底面は中央が明確にくぼみ、外周は成形時のドーナツ状の輪台部が残されている。上外方に内湾気味に開いて胴部下半につながる。磨滅が著しく、調整方法の観察は困難であるが、底部外面の立ち上がり部分に縦刷毛が認められる。

甕（167～178）　167～173は口頸部から胴部で、いずれも台付甕になるものと推測される。口径が胴部最大径を上回る167以外は、胴部中位やや上に最大径を有する。外面は、口頸部に縦方向の刷毛調整を施した後、胴部に右下がりの刷毛調整を施す。また、器壁の磨滅により観察が困難な169を除きすべて口唇部下端に刻みを確認できる。刻みはいずれも右側に傾斜して施しているが、172はやや強めに刻んでいる。

174は最大径を中位に持つ胴部下半部にあたる。下半部は丸みを帯びている。台部との接合部で剥離

しており、接合状況を観察することができる。外面に右下がりの刷毛調整を施し、内面には指圧痕を残す。

175・176は台部である。僅かに内湾気味に開く。端部は面を持ち、内側に成形時の粘土のはみ出しが認められる。175は磨耗が著しく、調整方法の観察は困難である。底面には炭化物の付着が認められる。176は、外面を刷毛、内面をナデ調整する。

177・178は折り返し口縁を有するもので平底の形態になる可能性がある。177は口縁部外面に薄い粘土紐を付加し、やや幅広の折り返し部となる。口唇部は明瞭な面取りを行い、下端部に刻みを加える。器壁の磨耗が著しく詳細な観察は困難であるが、胴部外面及び口縁部内外面に刷毛調整が確認できる。

178は特大品である。口縁部外面にやや厚い粘土紐を付加し、折り返し部としている。口唇部は弱い面を持ち、下端部に刷毛状工具による刻みを施す。外面は口頸部を縦刷毛後、肩部に横刷毛調整を行う。内面は口縁部を横刷毛、胴部を斜めの刷毛調整を行う。

ＳＤ１１（第36図）

甕２点を図示した。いずれも台付甕である。形状を知りうる土器が甕２点のみの出土であることから時期は判然としないが、弥生後期中葉ないしこれと前後する時期のものと推測される。

甕（179・180）　179は胴部中位やや上に最大径を持ち、肩部に少し張りがあるものである。滑らかに括れた頸部から緩やかに開く口縁部にいたる。口唇部は刷毛調整による強い面取りによって下端部に粘土のはみ出しが生じ、そこに刻みを加えている。外面は頸部に縦方向の刷毛調整後、胴部は横方向を基調とした刷毛調整を施している。内面は口縁部を横刷毛、胴部をナデにより調整する。

180は口径と胴部最大径が同程度の小型品である。頸部から短く開く口縁部にいたる。口唇部は面取りを行い、下端部に刻みを施す。外面は頸部を縦方向の刷毛後、胴部は横方向を基調とした刷毛調整を施している。内面は口縁部・胴部ともに横刷毛調整しているが、調整工具が異なり、口縁部はやや細かい刷毛、胴部は粗い刷毛調整となっている。

ＳＸ０３（第36図）

甕１点を図示した。台付甕である。形状を知りうる土器が甕１点のみの出土であることから時期は判然としないが、弥生後期中葉ないしこれと前後する時期のものと推測される。

甕(181)　181は大型品である。胴部中位やや上に最大径を持つ肩部に張りを持つ。肩部から強く開く口頸部を有する。弱い面を持つ口唇部の下端には刻みを加える。外面は頸部を縦方向の刷毛後、胴部は横方向を基調とした刷毛調整を施している。内面は口縁部を横刷毛、胴部をナデ調整している。

ＳＸ０４（第36図）

甕２点を図示した。いずれも台付甕である。形状を知りうる土器が甕２点のみの出土であることから時期は判然としないが、弥生後期中葉ないしこれと前後する時期のものと推測される。

甕（182・183）

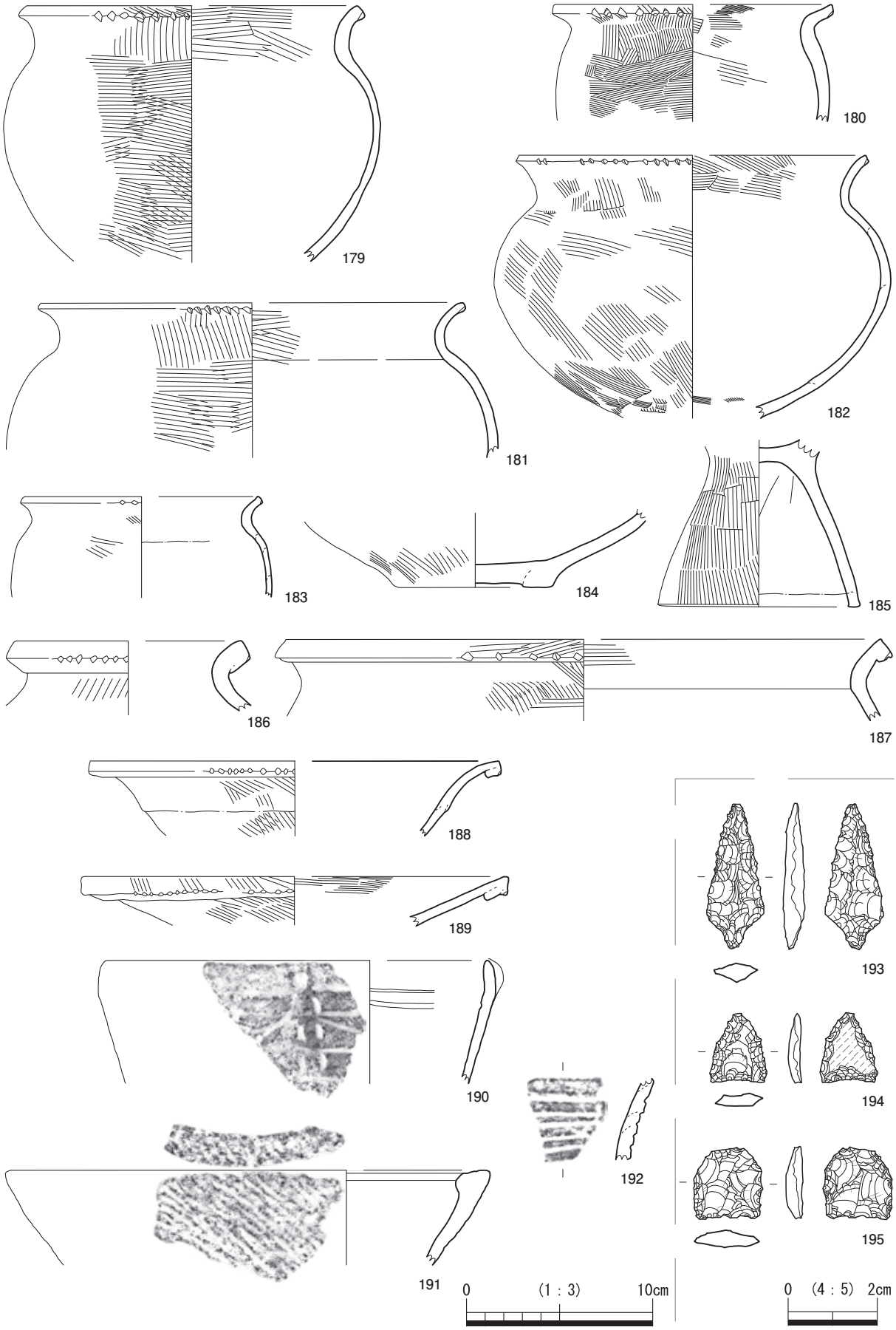
182は胴部中位に最大径を持ち偏球形に上下につぶれた胴部を有する。口唇部は面取り後、下端部に刻みを加える。外面は頸部を縦基調の刷毛、胴部は右斜めを基調とした刷毛により調整する。内面は口縁部を横刷毛、胴部をナデ調整する。

183は小型品である。肩部がやや張った胴部に短く外反する口頸部を有する。口唇部は面取り後、下端部に刻みを加える。外面に刷毛調整が確認できるが、磨耗が激しく調整方法の観察は困難である。

包含層（第36図）

壺２点、甕２点、高坏２点を図示した。弥生後期中葉ないしこれと前後する時期のものと推測される。

壺（184・186）　184は底部破片である。底部外周をドーナツ状に成形後、内面に粘土塊を充填し底部としているため、裏面中央がくぼむ。外面を刷毛、内面をナデにより調整する。底部の一部は成形時の粘土紐接合部で剥離している。



第36図　ＳＤ１１・ＳＸ０３・ＳＸ０４・下層包含層出土遺物実測図（弥生土器・縄文土器・石器）

186は口径の４分の１程度の破片を図上で推定復元した口頸部の破片である。一般的な甕に比べ口径が著しく小さいことから、短頸壺の口頸部破片と判断した。一般的な壺の肩部以下に短い頸部を付加したような形態を有すると推測される。頸部に短く開く口縁部が付加され、口縁部外面には厚く幅広の粘土紐を付加して折り返し口縁としている。口唇部は面取り後、下端部に刻みを施す。磨耗が著しいが、頸部外面に縦刷毛が観察できる。

甕(185・187)　185はやや高さのある台部で、ほぼ完存する。台部はわずかに内湾気味に開き、端部は面取りされ、内側に僅かに粘土のはみ出しが認められる。外面は縦基調の刷毛、台部内面はナデにより調整する。なお、器の磨耗が著しく詳細な観察は困難であるが、台部上面すなわち、底部内面は刷毛調整が確認できる。

187は折り返し口縁を有する大型品の口頸部破片である。口縁部外面に幅狭の粘土紐を付加して折り返し口縁としている。口唇部は刷毛による面取り後、下端部に刻みを加えている。外面は頸部を縦刷毛後、胴部を横刷毛、内面は口縁部を横刷毛調整している。

高坏(188・189)　いずれも口縁部の破片である。188はやや深めの坏部から上外方に外反して開く口縁部を有する。坏部と口縁部の接合部の内外面にはわずかな段差が認められる程度で、中遠地域で一般的に認められる高坏に比べつくりが稚拙な印象を受ける。口縁部外面にはやや厚めの粘土紐を付加し、折り返し口縁としている。口唇部は面取り後、下端部に刻みを加えている。外面は刷毛、内面はナデにより調整している。

189は折り返し口縁壺の口縁部破片の可能性もあるが、口縁部が直線的に開くことから高坏の口縁部破片と判断した。坏部を欠損するが、坏部との接合部から鍔状に直線的に開く口縁部を有する。口縁部外面にやや幅広の粘土紐を付加し、折り返し口縁としている。口唇部は刷毛による面取り後、下端部に刻みを加える。内外面ともに刷毛調整を行う。いずれも、中遠地域で定型化された高坏とは形状・調整方法等が異なる上、口縁部の破片であるため、詳細な時期の特定は困難である。

下層包含層からは、弥生土器の他、それ以前の時代の遺物として、縄文時代の土器片と石器が出土している。

縄文土器(第36図)

深鉢(190 ～ 192)　190は深鉢の口縁部片である。口縁部はやや外上方に向かって開き、口縁端部は内湾気味となる。外面には刺突による縦２列の文様があり、その上の口縁端部外面には粘土帯を貼り付けている。刺突文の周辺には、沈線で区画された磨り消し縄文が見られる。後期の加曽利Ｂ２式並行のものと考えられる。191も深鉢の口縁部片であり、外上方に開く形を呈する。口縁端部は内側に大きく肥厚し、平坦面を作り出す。口縁部外面と口縁端部の平坦面には縄文が施文される。中期の曽利Ⅱ式か曽利Ⅲ式にあたるものかと考えられる。192も深鉢の口縁部片である。外反気味に外上方に開く。口縁端部は内側にやや傾く平坦面をなす。外面には横方向に平行する沈線が、現状で５本見られる。中期初頭から前葉の山田平Ⅲ式あるいはⅣ式にあたるものかと考えられる。

石器(第36図)

石鏃(193 ～ 195)　193は頁岩製の有茎鏃である。長さ3.25㎝、幅1.31㎝、厚さ0.51㎝を測る。基部が突出しており、凸基有茎鏃に分類される形態である。194も頁岩製であり、茎を持たない鏃である。長さ1.51㎝、幅1.28㎝、厚さ0.29㎝を測る。基部が直線に近い形となり、平基無茎鏃に分類される形態である。195も頁岩製のものであり、茎を持たない鏃である。先端部を欠くが、残存長1.57㎝、幅1.51㎝、厚さ0.38㎝を測る。全体的に五角形に近い形を呈し、基部が直線に近い形となる。平基無茎鏃に分類される形態のものである。

第 14 表　下層遺構・下層包含層出土遺物観察表２（土器）

挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	遺構名	層位	種類	器種	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	備考
34-152	20-1	２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	小型壺	90%	－	5.4	(8.0)	2.5 Y 7/1　灰白	
34-153		１区	C-10	SD10	遺構第１層	弥生土器	小型壺	(5%)	－	－	(2.4)	7.5YR6/4　にぶい橙	
34-154		１区	C-10	SD10	遺構第１層	弥生土器	壺	(5%)	－	－	(5.9)	10YR7/3　にぶい黄橙	
34-155	20-2	２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	壺	(5%)	－	－	(6.6)	7.5YR6/4　にぶい橙	
34-156	20-3	２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	壺	(20%)	(13.8)	－	(7.9)	7.5YR6/4　にぶい橙	
34-157	20-4	１区	C-10	SD10	遺構第１層	弥生土器	壺	(20%)	－	－	(6.4)	10YR7/3　にぶい黄橙	
34-158	20-5	１区	C-10	SD10	遺構第１層	弥生土器	壺	(10%)	(11.6)	－	(6.0)	2.5Y7/3　浅黄	
34-159	20-6	２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	壺	80%	11.2	7.2	26.7	10YR7/2　にぶい黄橙	
34-160	20-7	２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	壺	80%	－	6.4	(16.8)	10 Ｙ Ｒ 6/4　にぶい黄橙	
34-161	20-8	２区	C-9	SD10		弥生土器	壺	80%	－	6.4	(17.6)	10YR6/4　にぶい黄橙	
34-162	21-1	２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	壺	30%	11.0	－	(21.7)	10YR4/1　褐灰	
34-163	21-2	１区	C-10	SD10	遺構第１層	弥生土器	壺	60%	－	6.0	(14.8)	10YR8/3　浅黄橙	
34-164		２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	壺	(10%)	－	6.0	(2.3)	7.5YR7/4　にぶい橙	
34-165		２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	壺	(5%)	－	8.2	(1.6)	10YR7/3　にぶい黄橙	
34-166		２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	壺	(15%)	－	6.0	(4.3)	10YR6/4　にぶい黄橙	
35-167	21-3	２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	台付甕	(5%)	(24.3)	－	(11.2)	10YR8/2　灰白	
35-168	21-4	１区	C-10	SD10	遺構第１層	弥生土器	台付甕	(5%)	20.8	－	(7.4)	7.5YR7/4　にぶい橙	
35-169	21-5	２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	台付甕	(5%)	(21.2)	－	(10.2)	10YR6/2　灰黄褐	
35-170		２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	台付甕	(5%)	(14.6)	－	(7.9)	10YR5/2　灰黄褐	
35-171	21-6	２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	台付甕	(15%)	20.4	－	(6.4)	7.5YR6/6　橙	
35-172		２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	台付甕	(5%)	(18.6)	－	(4.9)	5 Ｙ 3/1　オリーブ黒	
35-173		２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	台付甕	(10%)	(17.4)	－	(6.2)	7.5YR5/4　にぶい褐	
35-174	21-7	２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	台付甕	(15%)	－	－	(10.2)	10YR6/4　にぶい黄橙	
35-175	21-9	２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	台付甕	(20%)	－	(9.6)	(7.0)	5YR6/4　にぶい橙	
35-176	21-10	１区	C-10	SD10	遺構第１層	弥生土器	台付甕	(25%)	－	8.9	(6.1)	10YR7/4　にぶい黄橙	
35-177		２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	甕	(5%)	(18.6)	－	(5.1)	7.5YR7/6　橙	
35-178	21-8	２区	C-9	SD10	遺構第１層	弥生土器	甕	(5%)	(32.0)	－	(8.9)	5YR6/6　橙	
36-179	22-1	１区	B-11	SD11	遺構第１層	弥生土器	台付甕	(5%)	(17.8)	－	(13.7)	10YR5/3　にぶい黄褐	
36-180	22-2	１区	B-11	SD11	遺構第１層	弥生土器	台付甕	(5%)	(14.9)	－	(6.2)	7.5YR4/3　褐	
36-181	22-3	１区	C-11	SX3	遺構第１層	弥生土器	台付甕	(5%)	(22.7)	－	(8.3)	10YR3/2　黒褐	
36-182	22-4	１区	C-11		下層包含層	弥生土器	台付甕	35%	19.0	－	(14.1)	10YR6/2　灰黄褐	
36-183	22-5	１区	C-11		下層包含層	弥生土器	小型台付甕	(10%)	(13.0)	－	(5.4)	7.5YR5/4　にぶい褐	
36-184		１区	A-11,B-11,12		下層包含層	弥生土器	壺	(20%)	－	8.5	(4.0)	10YR6/2　灰黄褐	
36-185	22-6	１区	B-10		下層包含層	弥生土器	台付甕	(30%)	－	10.9	(9.0)	10YR7/3　にぶい黄褐	
36-186		１区	B-11		下層包含層	弥生土器	短頸甕	(5%)	(12.3)	－	(3.8)	2.5Y7/2　灰黄	
36-187		１区	B-10		トレンチ	弥生土器	甕	(5%)	(32.0)	－	(4.4)	7.5YR6/6　橙	
36-188		２区	C-10		下層包含層	弥生土器	高坏	(5%)	(22.2)	－	(4.0)	2.5Y8/2　灰白	
36-189		１区	B-12		下層包含層	弥生土器	高坏	(5%)	(23.0)	－	(2.6)	7.5YR6/2　灰褐	
36-190	22-7	２区	B-9		下層包含層	縄文土器	深鉢	(5%)	(20.4)	－	(6.6)	7.5YR3/2　黒褐	
36-191	22-8	２区	C-9	SD10	遺構第１層	縄文土器	深鉢	(5%)	(26.0)	－	(5.1)	7.5YR5/4　にぶい褐	
36-192	22-9	２区	D-8	SR01	遺構第２層	縄文土器	深鉢	(5%)	－	－	(4.3)	7.5YR4/2　灰褐	

第 15 表　下層遺構・下層包含層出土遺物観察表３（石器）

挿図番号	図版番号	調査区	グリッド	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
36-193	22-10	３区	D-2	SD01	第１層	石鏃	(3.25)	1.31	0.51	1.8	頁岩	
36-194	22-11	２区	C-8		下層包含層	石鏃	(1.51)	1.28	0.29	0.6	頁岩	
36-195	22-12	１区	B-10		下層包含層	石鏃	(1.57)	1.51	0.38	1.2	頁岩	

第５章　まとめ

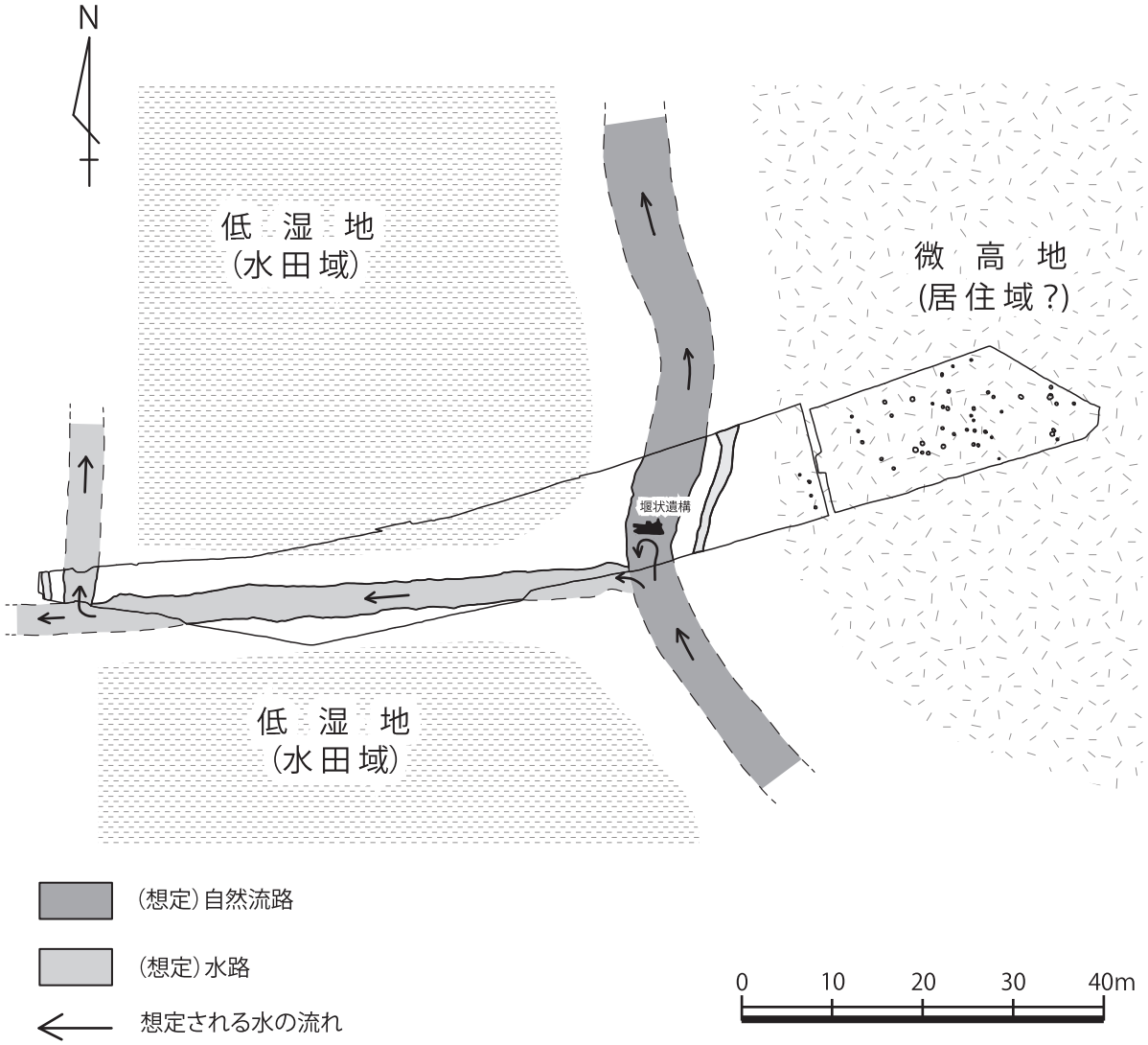
今回の海戸田遺跡の調査で得られた成果について簡単にまとめてみたい。今回の調査で明らかにされたことの一つに、中世初頭の水利施設と考えられる遺構群がある。出土遺物から12世紀末から13世紀初め頃の水路と考えられる溝状遺構と自然流路に設けられた堰状遺構が発見されている。第４章の遺構の部分でも述べたが、これらは一体の施設と考えることができ、自然流路内の堰状遺構は、水路に取水するために、自然流路の水位を上げる目的で設けられたものということになる。当然、これらの施設は、菊川中流域のこの一帯の土地利用のために設けられた灌漑施設の一部をなすものであろう。こうした施設を造り、土地利用を進めた背景はどのようなものであったであろうか。そうした検討をする前に、まず遺構の構造や工法について検討し、そこから開発を進めた集団を考え、その当時のこの地域の状況を見てみることとする。

堰状遺構の構造と工法について

自然流路であるＳＲ０１に設けられた堰状遺構はどのような工法を用いて作られていたのであろうか。各地の遺跡から発見された堰状遺構をみると、その構造は流路に横切る形で縦杭を打ち、そこに横木を渡す。その横木に上流側に斜めに杭等の材が打ち込まれる。形としては杭と横木が屋根のような三角形を呈し、流れに対し対応できる構造となっている例が多い。こうした木組みの間に、植物や土、礫等を充填して、水を堰き止めている。こうした例で著名なのが、時代は古墳時代前期のものであるが、愛媛県松山市古照遺跡がある。こうした例を参考にしながら、海戸田遺跡の堰状遺構をみると、横木に細かい枝木を並べて、その上に土を置きさらに横木と枝木の層、土の層と交互に積み重ねている。横木を支える形の縦杭は、下流側には見られず、上流側に２列の縦杭を流れに直交する形で打ち込んでいる。これらの杭は枝木と土の層に打ち込まれており、横木を支えるというよりは、盛り上げた枝木と土の層の崩れ防止の役目をもっていると考えられる。枝木の層は少なくとも３層認められ、土の層は混合土である。そこにまた、この施設の手前に多量の木の葉の層を確認しているが、調査時には流れ込んで溜まったものと理解して取上げたが、あるいは並べられた細かい枝木の先についていたものであった可能性がある。となれば、この遺構には葉のついたままの枝木が使われていた可能性がある。第４章では、その状況から海戸田遺跡の堰状遺構は「敷葉工法」の技術を用いて造られたものではないかと考えた。「敷葉工法」とは、土と植物を交互に積み上げて盛土し、丈夫な堤等をつくる弥生時代から続く古代の土木技術である。なお、樹種同定は、杭列の杭のみにしか行っていないが、かなり多種類の樹木が使われており、近隣の雑木林のものを伐採して、材としている状況が窺われる。そうした状況からみると、堰状遺構の工事はそれほど大掛かりなものではなく、この付近一帯の水田を耕作する人々が行ったものと考えられる。しかしながら、その工法は、水の流れに対して強固なものとするため、古来からの「敷葉工法」の技術を応用する形になったと考えられる。

想定される水路の配置と堰状遺構

トレンチ状に東西に掘られた今回の調査で検出された遺構から当時のこの一帯の状況を考えてみる。この付近一帯は、段丘裾となる東側に向かって高くなり、菊川が流れる西方向に向かって徐々に低くなっている。自然流路としたＳＲ０１は東側の微高地を回り込む形で、北側の段丘裾を東西方向、西に向かって流れる吉沢川の方向へ流れていたと想定される。そうした状況の中で、この自然流路を境として、南西方向に広がる沖積地である低湿地を水田に利用していたのではないかと考えられ、そのための灌漑用の水路がＳＤ０１等の溝状遺構であるといえる。また、東側の微高地上には小穴遺構が広がるが、これ



第 37 図　海戸田遺跡周辺中世初頭期水路配置想定図

らについては、一括して中世のものと考え、柱穴の可能性も考えたが、建物としてまとまるものはなかった。しかし、微高地上に広がる点から、柱穴である可能性も捨てきれず、とすれば、この微高地一帯には、低湿地部の水田を営む集団の居住エリアがあったとも考えられる。今回の調査で検出された遺構のあり方から想定したものが、第37図である。自然流路に構築された堰の位置等から水路の配置のあり方、そして生産エリア(水田)と居住(?)エリアを想定してみた。古代末から中世初めの時期、この一帯は、想定されるような形で灌漑施設を設け、開発が進められたものと考えられる。

古代末から中世の開発の背景

古代末のこの時期、この東遠地域にも多くの武士団が成立している。元来、遠江国の白羽官牧がこの地にあり、それが荘園制の進展とともに、笠原牧や相良牧の私牧の成立をみている。これらの牧の周辺には、勝間田・相良・新野・横地・内田・浅羽氏等の武士団が成立している。これらの武士団は徐々に農村に根をおろし、在地領主としての性格を強めていくことになる。この付近一帯では、菊川の東岸部一帯を根拠地にする横地氏や菊川西岸部一帯を根拠地とする内田氏がいる。海戸田遺跡が所在するこの吉沢地区一帯の開発にあたっては、横地氏との関連を考えていくことが必要と考えられる。海戸田遺跡の出土遺物についても、横地氏の支配下で操業されたと考えられる皿山窯の製品が多く出土しているこ

ともそうしたことの一つの表れと考えられる。無論、菊川を挟んで所在する潮海寺との関係も考えていく必要がある。

今回の調査においては、こうした古代末から中世の遺構･遺物以外にも弥生時代や古墳時代から奈良･平安時代の遺物も多く出土している。弥生時代後期には海戸田遺跡の東側の段丘上に赤谷遺跡や祢宜屋敷遺跡等の集落が営まれる。そうした集団もこの海戸田遺跡が広がる沖積地を開発していたものと考えられる。その痕跡と考えられるのが、今回検出された溝状遺構やそこにまとめて置かれた弥生土器群等であろう。その後の時代の遺物の出土も見られ、この一帯の土地利用は続いていたものと考えられる。そうした流れの中で、古代末から中世初めの時期に、荘園制の進展、武士団の成立、そしてそうした武士団の在地領主化が進行する。この一帯についても横地氏らの在地領主化した武士団が、その私領の開発と拡大を図っていたものと思われる。そうした痕跡が海戸田遺跡に残されていたことになる。

以上、かなり雑駁に、今回の調査で得られた成果について検討してみた。海戸田遺跡の所在する、菊川中流域の沢水加川等によって形成された沖積地の開発という視点で考えてみた。今回の調査で検出された水路と考えられる溝状遺構、それに取水するために自然流路に設けられた堰状遺構等を手掛かりとして、人々の営みの様相をわずかではあるが得ることができたということで、今回の調査のまとめとする。

参考文献一覧

菊川町文化財保護委員会　『菊川町の生い立ち…その地形と地質について…』
古照遺跡調査本部・松山市教育委員会　『古照遺跡』松山市文化財調査報告書Ⅳ　1974.3
菊川町教育委員会　『昭和60年度埋蔵文化財発掘調査報告書　千駄ヶ原遺跡群1地点』菊川町埋蔵文化財報告書第8集　1986.3
静岡県教育委員会　『静岡県の窯業遺跡　本文編』静岡県文化財調査報告書第42集　1989.3
菊川町教育委員会　『平成元年度埋蔵文化財発掘調査報告書　原段Ⅱ・Ⅲ遺跡』菊川町埋蔵文化財報告書第21集　1990.3
静岡県　『静岡県史　資料編３　考古三』　1992.3
菊川町教育委員会　『高田大屋敷遺跡　第８次発掘調査報告書(排水路北部)』菊川町埋蔵文化財調査報告第25集　1993.3
松井一明　「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』№25　静岡県考古学会　1993.11
塚本和弘　「皿山古窯跡群の成立と終末」『向坂鋼二先生還暦記念論集　地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会　1994.3
菊川町教育委員会　『善福寺遺跡発掘調査報告書』菊川町埋蔵文化財調査報告書第29集　1994.3
静岡県　『静岡県史　通史編１　原始・古代』　1994.3
菊川町教育委員会　『後久遺跡発掘調査報告書』菊川町埋蔵文化財報告書第32集　1995.3
中世土器研究会　『概説　中世の土器・陶磁器』　有限会社真陽社　1995.12
大川清・鈴木公雄・工楽善通編　『日本土器辞典』　雄山閣出版株式会社　1996.12
第7回東日本埋蔵文化財研究会山梨大会実行委員会・山梨県考古学協会　『治水・利水遺跡を考える－人は水とどのようにつきあってきたか－　＜第Ⅰ分冊　資料編＞・＜第Ⅱ分冊　発表要旨・紙上発表編＞』第7回東日本埋蔵文化財研究会　1998.2
佐野静代　「平野部における中世居館と灌漑水利　－在地領主と中世村落－」『人文地理』第51巻第4号　社団法人人文地理学会　1999
安保堅史・藤田龍之・知野泰明　「発掘記事にみる治水・利水技術の変遷に関する研究」『土木史研究』第21号　社団法人土木学会　2001.5
河合　修　「青灰色のうつわ」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第8号　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　2001.10
菊川町教育委員会　『県営牧の原農業用水203号支線農道の改良工事に伴う発掘調査　皿山古窯跡群－第6次調査－』菊川町埋蔵文化財報告書第67集　2003.3
菊川町教育委員会　『里遺跡』菊川町埋蔵文化財報告書第74集　2004.6
菊川シンポジウム実行委員会　『菊川城館遺跡群国指定記念シンポジウム資料集　陶磁器から見る静岡県の中世社会　＜発表要旨・論考編＞』2005.11
菊川市教育委員会　『皿山古窯跡群　－第７次調査－』菊川市埋蔵文化財報告書第4集　2006.2
菊川市教育委員会　『祢宜屋敷遺跡調査報告書　平成17年度』菊川市埋蔵文化財報告書第3集　2006.2
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　『法明寺古墳　平成19・20年度(主)吉田大東線緊急交通改善事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第199集　2009.3
帝京大学山梨文化財研究所　『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第14集　特集「治水と利水の考古学」』2010.5
高知県教育委員会・財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター　『花宴遺跡　南安芸道路建設工事に

伴う発掘調査報告書Ⅱ（高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ）』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第115集　2010.12
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　『大道西遺跡　一級河川男井戸川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人群馬県埋蔵文化財発掘調査報告書第517集　2011.3
東海土器研究会　『渥美窯　編年の再構築』第２回東海土器研究会　2013.11

付編　菊川市海戸田遺跡から出土した木材の樹種

鈴木　三男（東北大学植物園）

はじめに

海戸田遺跡は菊川市吉沢に所在する遺跡であり、中世の遺構として自然流路と溝状遺構が検出されている。自然流路（ＳＲ０１）に設置された多数の木材からなる堰があり、これらの構造材を中心に樹種の同定を行った。

その結果、表1及び以下に示す27タイプの樹種が同定された。これら同定に用いたプレパラートは静岡県埋蔵文化財センターに保管されている。

１　同定された樹種

1.　アカマツ　*Pinus densiflora* Siebold et Zucc.　マツ科

図版 I-1a ～ 1c（プレパラート番号15548）

年輪幅の広い針葉樹で晩材部を中心に垂直樹脂道が散在する。早材から晩材への移行は不明瞭、放射組織は単列と中央に水平樹脂道を持つ紡錘形があり、いずれも背が低い。分野壁孔は大きな窓状、放射仮道管の内壁は鋸歯状に肥厚する。これらの形質からマツ科マツ属のうち、複維管束亜属（二葉松類）のアカマツの材と同定した。

出土材は自然流路ＳＲ０１に作られた堰の縦杭１点である。

2.　クロマツ　*Pinus thunbergii* Parl.　マツ科

図版 I-2a ～ 2c（プレパラート番号15552）

年輪幅の広い針葉樹で晩材部を中心に垂直樹脂道が散在する。早材から晩材への移行はやや明瞭、放射組織は単列と中央に水平樹脂道を持つ紡錘形があり、いずれも背が低い。分野壁孔は大きな窓状、放射仮道管の内壁は鋸歯状に肥厚するが歯先は鋭くなく、丸みを帯びる。これらの形質からマツ科マツ属のうち、複維管束亜属（二葉松類）のクロマツの材と同定した。

出土材は自然流路ＳＲ０１に作られた堰の縦杭２点である。

2'.　二葉松類（マツ属複維管束亜属）　*Pinus* subgen. Diploxylon　マツ科

材の基本構造は上記のアカマツ、クロマツと一致するが、細胞壁の分解が進んで内部構造の保存が悪いため、両者の区別点である放射仮道管内壁の鋸歯状突起が充分に観察できないため、いずれとも判定できないものである。出土材は自然流路ＳＲ０１に作られた堰の縦杭２点と杭３点である。

3.　イヌマキ属　Podocarpus　マキ科

図版 I-3a ～ 3c（プレパラート番号15474）

年輪が比較的広い針葉樹で、垂直樹脂道、水平樹脂道を欠く。晩材部は幅狭く、早材から晩材への移行は緩やかである。断面が扁平な樹脂細胞が年輪内に均一に分布し、量は比較的多い。樹脂細胞の水平壁は薄く平滑。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で１分野１-２個。これらの形質からマキ科イヌマキ属の材と同定した。

静岡県地方では沿岸部にイヌマキ *Podocarpus macrophyllus*（Thunb.）Lambert が自生し、イヌマキとナギ *Podocarpus nagi*（Thunb.）Zoll. et Moritzi が生垣や庭園にしばしば植栽される。いずれの材も硬く粘りがあり、腐朽・水湿に対する保存性がたいへん良い。出土材は溝状遺構ＳＤ０１から出土した整形板１点である。

4.　スギ　*Cryptomeria japonica*（Linn.f.）D.Don　ヒノキ科

図版 II-4a ～ 4c（プレパラート番号15507）

年輪が明瞭な針葉樹材で、早材から晩材への移行は急である。晩材部は早材部より幅狭い。樹脂細胞が晩材部を中心に分布し、ルーズに接線方向に並ぶ傾向がある。樹脂細胞の水平壁は薄く平滑で、時にやや数珠状に肥厚する。樹脂細胞内部には黒褐色の物質がある。放射組織は柔細胞からなり、背は低～高い。分野壁孔はスギ型で通常１分野２～１個ある。これらの形質からヒノキ科（旧スギ科）のスギの材と同定した。

スギは青森県から九州屋久島の降水量の多い地域に天然分布する我が国特産の針葉樹で、巨木となり、最も重要な木材資源である。静岡県地方には古来天然杉林が広く分布し、木材も大量に利用されてきている。本遺跡出土材はＳＤ０１から出土した曲物と農具の一部と思われるもの、ＳＲ０１から出土した板状製品の３点である。スギ材がＳＲ０１の堰には使われていないことが注目される。

5.　クスノキ科Ａ　Lauraceae A

図版 II-5a ～ 5c（プレパラート番号15520）

小型の道管が密度少なく均一に分布する散孔材。年輪内での大きめの道管の接線径は70 ～ 80ミクロン程度、輪郭は丸みを帯びる。道管の穿孔は単一と横棒の少ない（10本以下）階段状。道管側壁の壁孔は階段状になる傾向を持つ。木部柔組織は周囲状、時に樽型に膨らんで精油成分を持つ油細胞となる。放射組織は２列、背が低い紡錘形、上下辺の細胞が時に膨らんで油細胞となる。

道管穿孔が階段状と単一の両方があり、油細胞を持つことからクスノキ科の材であることが分かる。日本には多数のクスノキ科の属と種がある。多くは常緑で暖帯に分布するが落葉性のものもあり、本州北部の温帯まで分布する種もある。材構造は互いに類似し、大きな道管と大きい油細胞を豊富に持つクスノキを除いては個々の属、種を区別することは難しい。「クスノキ科Ａ」としたものは、道管が太く（70 ～ 80ミクロン程度）、輪郭は丸みを帯びるのに対し、次の「クスノキ科Ｂ」としたものは道管が細く（23 ～ 30ミクロン程度）、輪郭が角張っていることで区別した。「クスノキ科Ａ」に該当するものとしてカゴノキ、ヤブニッケイ、ハマビワ、シロダモなどが当たる。一方、「クスノキ科Ｂ」にはクロモジ属の多くの種などが該当する。これら全ての樹種も材構造には変異があり、道管径も個体及び部位による変異があり、必ずしも明確に区別できるものでは無いが、出土材には少なくとも２種類のクスノキ科の材が含まれていると言える。

クスノキ科Ａとした出土材はＳＲ０１の堰の縦杭３点、杭５点である。これらの杭の残存径は３～６cm ほどであることから、この地域では最も普遍的なクスノキ科の樹木であるヤブニッケイ、シロダモなどが考えられる。

6.　クスノキ科Ｂ　Lauraceae B

図版 II-6a ～ 6c（プレパラート番号15481）

クスノキ科Ａよりひとまわり小型の道管が均一に分布する散孔材。年輪内での大きめの道管の接線径は23 ～ 30ミクロン程度、輪郭は角張っている。道管の穿孔は単一と横棒の少ない（10本以下）階段状。道管側壁の壁孔は階段状になる傾向を持つ。木部柔組織は道管の周囲状。油細胞は希である。放射組織は２列、背が低い紡錘形、油細胞は少ない。

出土材はクスノキ科Ａ同様、ＳＲ０１の縦杭１点と杭２点である。

7.　アワブキ　*Meliosma myriantha* Siebold et Zucc.　アワブキ科

図版 III-7a ～ 7c（プレパラート番号15476）

楕円形ないしは角の丸い多角形の小道管が単独あるいは放射方向に数個複合して密度低く均一に分布する散孔材で、周囲状木部柔組織が目につく。道管の壁はやや厚く、穿孔は多くは単一で横棒が少ない

階段状が混じる。放射組織は1-6細胞幅の異性で、非常に背が高く、構成細胞は大振りで、全体として粗雑である。これらの形質からアワブキ科のアワブキの材と同定した。

アワブキは本州～九州の山野に自生する落葉小高木で薪炭材にされる。出土材はＳＲ０１の堰の縦杭２点と杭５点である。残存資料の直径は３～５㎝ほどで、近くに生えているアワブキの株から萠芽枝等を伐り取って利用したものと思われる。

8.　ヤマザクラ　*Cerasus jamasakura*（Siebold ex Koidz.）H.Ohba　バラ科

図版 III-8a ～ 8c（プレパラート番号15482）

丸い小道管が単独あるいは放射方向あるいは斜め方向に数個複合して比較的密度高く均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は大振りの小孔紋で交互状、内壁にらせん肥厚がある。木部柔組織は散在状で、放射組織は1-4細胞幅くらいの同性にやや近い異性、構成細胞は大振りである。これらの形質からバラ科のサクラ属のヤマザクラの材と同定した。

ヤマザクラは東北地方南部から九州の温帯から暖帯に広く分布する落葉高木で、幹径60㎝、樹高10m以上になる。材はやや堅く緻密で保存性、耐朽性がよく、加工も容易で優れた広葉樹材である。当遺跡出土材はＳＲ０１の堰の縦杭と杭の２点である。

9.　ケヤキ　*Zelkova serrata* Thunb.　ニレ科

図版 III-9a ～ 9 c（プレパラート番号15515）

丸～楕円形の大道管が年輪はじめに１層に並び、孔圏外では薄壁多角形の小道管が多数集まって塊状～波状の紋をなす環孔材で、道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔はおおぶりの小孔紋で交互状、小道管内壁には顕著ならせん肥厚がある。放射組織は1-8細胞幅ほどで背は余り高くなく、上下辺にまれに大型の結晶細胞をもつ。これらの形質からニレ科のケヤキの材と同定した。

ケヤキは本州北端から四国、九州の全域の平地～山地帯に広く分布する落葉高木で、時に幹が３ｍに達する巨木となる。材は肌目やや粗で堅硬、強靭、弾力があり、加工性良く、時に美しい杢が出る。大型建築物の構造材、彫刻材、漆器木地等の特用の他、家具、器具などあらゆる用途がある。本遺跡出土材の漆椀２点ともケヤキであった。

10.　クリ　*Castanea crenata* Siebold et Zucc.　ブナ科

図版 IV-10a ～ 10c（プレパラート番号15541）

年輪のはじめに円～卵形の大道管が３層ほどに並び、そこから順次径を減じ、晩材部では薄壁多角形の小道管が周囲状仮道管や木部柔組織と共に集まって火炎状の紋をなす環孔材である。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状にやや隙間を開けて配列する。らせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状及び単細胞幅の独立帯状で晩材部で目立つ。放射組織は単列同性で背は低い。道管 - 放射組織間壁孔は不定形の楕円形で大振り、柵状にきちんと並ぶことはない。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道石狩低地周辺から九州鹿児島県までの温帯から暖帯に広く分布する落葉高木で、幹径1ｍ以上、樹高30ｍほどとなる。成長は早く、材質は堅く、割裂が容易で心材は耐久力つよく水湿に特に強い。大材が得られるので大型建造物から一般の家屋の大黒柱や土台回り、屋根葺き材（くれこば）などに用いられるほか、家具、農具、などさまざまな部分に用いられ、また水湿に強いことから土木用材や鉄道枕木などの特用があった。本遺跡出土材はＳＲ０１の堰縦杭15点と杭１点、それにミカン割り材１点である。

11.　コジイ　*Castanopsis cuspidata*（Thunb.）Schottky　ブナ科

図版 IV-11a ～ 11c（プレパラート番号15518）

年輪の始めに丸い大型の道管が間隔を置いてあり、そこから放射方向に揺らぎながら２～４個の大～

中道管が並び、その外側では小道管が火炎状に配列する放射孔材～環孔材で、年輪界はやや明瞭である。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は丸い小孔紋で交互状、木部柔組織は散在状及び単接線状である。放射組織は単列同性と集合放射組織の２型がある。道管 - 放射組織間壁孔は楕円形でしばしば縦に柵状に並ぶ。これらの形質からブナ科シイ属のコジイの材と同定した。スダジイからは集合放射組織が存在することで区別される。

コジイ（別名ツブラジイ）は関東地方南部以西の暖地に分布する常緑高木で、照葉樹林の主要な要素である。スダジイが海岸部に多いのに対し、これは内陸部に多い。樹高20m幹径１ｍの大木となり、材はやや堅硬で緻密、割裂容易であるが肌目は粗く保存性は低い。本遺跡出土材はＳＲ０１の堰の縦杭６点と包含層から出土した板材１点である。

12.　スダジイ　*Castanopsis sieboldoldii*（Makino）Hatusima　ブナ科

図版 IV-12a ～ 12c（プレパラート番号15485）

クリ、コジイによく似た材で、年輪の始めに大～中型の丸い道管が間隔を置いて配列し、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管、周囲状仮道管、木部柔組織が集まって火炎状となる環孔材で、年輪はやや明瞭である。木部柔組織は接線状で晩材部でよく目立つ。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。放射組織は単列同性である。これらの形質からブナ科シイ属のスダジイの材と同定した。

スダジイは東北南部以南～九州屋久島までの照葉樹林帯に広く分布し、特に海岸部に多い。樹高20m、幹径１ｍ以上となる常緑広葉樹で、海岸部に生育する個体は幹は直立せず、下部から大枝を出して大きな樹冠を形成する。材はコジイ同様、やや堅硬で緻密であるが、肌目粗く、保存性が低い。本遺跡出土材はＳＲ０１の堰の縦杭７点と杭１点で、コジイの用材と変わらない。

13.　コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科

図版 V-13a ～ 13c（プレパラート番号15531）

年輪の始めに丸い大道管が１～数層配列する環孔材で、孔圏外では丸い単独小道管が緩く放射方向に配列する。道管の穿孔は単一、らせん肥厚はない。木部柔組織は接線状で孔圏外でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合状で、複合放射組織内には大きな結晶細胞が混じる。これらの形質からブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節の材と同定した。

クヌギ節には東北中部以南から九州までの全国に広く分布するクヌギ *Quercus acutissima* Carr. と関東北陸以西から九州北部まで分布するアベマキ *Quercus variabilis* Blume があり、これら両者の材構造は互いによく似ていて識別は困難である。両者とも暖帯性の落葉高木で、幹径60㎝、樹高20m以上になり、二次林や集落周辺に多い。材はやや堅硬、木理は粗く、割裂自在で、ミカン割り材をつくりやすい。本遺跡出土材はＳＲ０１の堰の縦杭１点と杭３点である。

14.　コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. Prinus　ブナ科

図版 V-14a ～ 14c（プレパラート番号15532）

年輪の始めに丸い大道管が1- 数層並び、そこから順次径を減じて晩材部ではクリ同様、薄壁多角形の小道管が多数集まって火炎状となる環孔材で、道管の穿孔は単一、木部柔組織は2-3細胞幅の独立帯状で晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合状があり、道管 - 放射組織間の壁孔はいびつな楕円形で縦に長くならない。以上の形質からコナラ属コナラ亜属のうち、コナラ節の材と同定した。

コナラ節には全国の山野に普通で特に二次林に多いコナラ *Quercus serrata* Thunb.、青森県から九州の温帯から暖帯に分布するナラガシワ *Quercus aliena* Blume、全国の温帯に多いミズナラ *Quercus mongolica* Fish. var. *grosseserata* Rhed.、暖帯、温帯から亜寒帯にあるカシワ *Quercus dentata* Thunb. などがあり、静岡県地方ではコナラが普通にあり、山地上部に行くとミズナラが出現し、カシワが希に

あるがナラガシワは余り見かけない。コナラは幹径60㎝、樹高15ｍくらいになる落葉高木で、材はやや堅硬で肌目は粗く、割裂容易で、建築材、各種器具材、特に柄物、細工物など、特に薪炭材に用いる。本遺跡出土材はＳＲ０１の堰の縦杭１点である。

15.　ウバメガシ　*Quercus phillyraeoides* A. Gray　ブナ科

図版 V-15a ～ 15c（プレパラート番号15563）

中(～小)型の丸い道管が緩く放射方向にゆらぎながら配列する放射孔材で、年輪は目立たない。道管の穿孔は単一、道管放射組織間壁孔は柵状になる。木部柔組織は接線状で1- 数細胞層である。放射組織は単列同性と集合状である。これらの形質からブナ科コナラ属コナラ亜属の常緑のウバメガシの材であることが分かる。アカガシ亜属からは道管径が小さいことと集合状放射組織を持つことで区別される。

ウバメガシは関東地方南部以西、四国、九州の沿岸部に生える常緑亜高木～低木で、幹の根元径30㎝、樹高２～８ｍ程度になる。材は極めて硬くて重く、割裂、折損困難である。本遺跡出土材はＳＲ０１の堰の縦杭1点である。

16.　ヤナギ属　Salix　ヤナギ科

図版 VI-16a ～ 16c（プレパラート番号15522）

断面楕円形の単独あるいは２個放射方向に複合した道管が均一に散在する散孔材で、年輪界は目立たない。年輪始めにある道管はやや太く、そこから年輪界に向かって順次少しずつ道管径が小さくなり、年輪界附近ではかなり小さくなる。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状に配列する。らせん肥厚はない。放射組織は単列異性で道管との壁孔は交互状に密にあり、蜂の巣状となる。これらの形質からヤナギ科ヤナギ属の材と同定した。

ヤナギ属は低木～高木になる落葉樹で、我が国には非常に多くの樹種があり、材構造は互いに近似していて樹種の区別は出来ない。木材は一般に軽軟で、割裂自在、耐朽性に劣る。箱物などの利用がある。当遺跡出土材はＳＲ０１の堰の縦杭1点と包含層出土の杭1点である。

17.　ヌルデ　*Rhus javanica* L. var. *roxburghii*（DC.）Rheder　ウルシ科

図版 VI-17a ～ 17c（プレパラート番号15517）

年輪始めに丸い中型の道管が並び、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が複合した塊が散在する環孔材。木部柔組織は周囲状で晩材部では連合翼状となる。道管の穿孔は単一、放射組織は1-2細胞幅の異性で､接線面では細長く見える。これらの形質からウルシ科のヌルデの材と同定した。

ヌルデは北海道南部～九州沖縄までの全国の山野に広く分布する落葉小高木で、幹径20㎝、樹高10m程度になる。材は比較的柔らかく、木理は粗、耐朽性、保存性は中くらい、切削加工は容易で、小細工もの、釣りの浮き、下駄材などの用途がある。当遺跡出土材はＳＲ０１の杭１点である。

18.　ハゼノキ　*Toxicodendron succedaneum*（L.）O.Kuntze.　ウルシ科

図版 VI-18a ～ 18c（プレパラート番号15536）

中型の丸い道管が単独あるいは２個放射方向に複合して均一に密度低く散在する散孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。木部柔組織は随伴状だが目立たない。放射組織は1-3細胞幅で同性に近い異性、背は低く、接線断面では比較的綺麗な紡錘形になる。これらの形質からウルシ科のハゼノキの材と同定した。

ハゼノキは関東地方南部以南西の暖地に生育する落葉高木で、しばしば植栽されている。樹液にはウルシオールがあり、かぶれを起こす。当遺跡出土材はＳＲ０１の堰の縦杭１点と包含層出土の杭１点である。

19.　クマノミズキ　*Cornus macrophylla* Wall.　ミズキ科

図版 VII-19a ～ 19c（プレパラート番号15562）

丸い小道管が単独で均一に分布する散孔材で、年輪は不明瞭である。木部柔組織は散在状で量は少ない。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状である。放射組織は3-5細胞幅位の典型的な異性で単列の翼部が目立つ。これらの形質からミズキ科のクマノミズキの材と同定した。

クマノミズキは青森県以南の本州、四国、九州の温帯下部に広く分布する落葉高木で、幹径40㎝、樹高15ｍほどになる。葉や樹形がミズキとよく似ているが、葉が対生すること、花期は初夏でミズキより一月ほど遅く、また、実が秋に熟することで区別できる。材はかなり重くやや硬くて強いがヤマボウシのように強靱ではない。材はミズキ同様、家屋の梁材に用いられる他、各種器具材、柄類などミズキ同様の用途がある。当遺跡出土材はＳＲ０１の堰の縦杭1点と杭1点である。

20.　サカキ　*Cleyera japonica* Thunb.　ツバキ科

図版 VII-20a ～ 20c（プレパラート番号15502）

薄壁で多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、年輪は全く目立たない。道管はほぼ単独で、穿孔は横棒の多い階段状である。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織はほぼ単列の異性で、背は比較的高く、平伏細胞と背の大変高い直立細胞からなる。これらの形質からツバキ科のサカキの材と同定した。

サカキは関東南部以西～九州、琉球に分布する照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、幹径20㎝、樹高８ｍくらいになる。材は堅硬で肌目はやや粗く、強靭で割裂困難であり、萠芽枝がまっすぐによく伸びることから柄物に重用される。各種柄物、杵、天秤棒、舟の棹、櫛等に用いられる。当遺跡出土材はＳＲ０１の堰の縦杭５点である。

21.　エゴノキ属　*Styrax* エゴノキ科

図版 VII-21a ～ 21c（プレパラート番号15564）

年輪始めには道管は少なく、やや離れた早材部では薄壁で楕円～多角形の小道管が単独あるいは２～数個放射方向に複合したものが均一に分布する散孔材で、年輪界に向けて道管径は小さくなる。道管の穿孔は横棒が10本前後の階段状である。木部柔組織は短接線状で晩材部で目立つ。放射組織は1 ～ 3列の異性で、平伏細胞と背の大変高い直立細胞からなる。これらの形質からエゴノキ科のエゴノキ属の材と同定した。

エゴノキ属には北海道の南部～九州にかけての山野に普通に生える落葉小高木のエゴノキ *Styrax japonica* Siebold et Zucc.、北海道～九州の温帯に多いハクウンボク *Styrax obassia* Siebold et Zucc.、本州～九州の温帯に分布するコハクウンボク *Styrax shiraiana* Makino があり、菊川市附近の山野にはエゴノキが普通にあり、出土材もエゴノキであることが考えられる。材はやや硬く粘りがあって緻密で、玩具などの用途がある。当遺跡出土材はＳＲ０１の堰の縦杭２点である。

22.　シャシャンボ属　*Vaccinium*　ツツジ科

図版 VIII-22a ～ 22c（プレパラート番号15503）

断面多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材。道管はほとんどが単独、ごく希に2,3個放射方向に複合する。道管内壁にはらせん肥厚があり、穿孔は単一と横棒が10本程度の階段状が混じる。木部柔組織は散在及び短接線状で比較的多い。放射組織は単列と4-5細胞幅の多列、前者は直立細胞のみからなり、後者の多列部は平伏細胞、単列部は方形、直立細胞からなる。多列放射組織の分布は均一では無く、接線面で斜めの縦の列に集まる。これらの形質からツツジ科のシャシャンボの材と同定した。

シャシャンボは関東地方南部以南西の暖地に生える常緑小高木～低木で、菊川市周辺の山野に自生する。材は強靭緻密で粘り強い。当遺跡出土材はＳＲ０１の堰の縦杭３点である。

23.　ネジキ　*Lyonia ovalifolia*（Wall.）Drude var. *elliptica*（Siebold et Zucc.）Hand.-Mazz.　ツツジ科
図版 VIII-23a ～ 23c（プレパラート番号15505）

断面丸みを帯びた小道管がほぼ単独で均一に分布する散孔材で、年輪界は全く目立たない。道管の穿孔は横棒が10本以上の階段状、木部柔組織は散在状である。放射組織は1-3列の異性で、背は高くは無い。これらの形質からツツジ科のネジキの材と同定した。

ネジキは東北南部～九州の温帯～暖帯に分布する落葉小高木で、材は堅硬緻密だが、木目がねじれるので細工には向かない。当遺跡出土材はＳＲ０１の堰の杭1点である。

24.　トネリコ属　*Fraxinus*　モクセイ科
図版 VIII-24a ～ 24c（プレパラート番号15486）

丸～楕円の単独あるいは２個複合した大道管が年輪始めに数層に配列し、晩材部では厚壁で内腔が円形の小道管が単独あるいは２～数個主に放射方向に複合したものがまばらに散在する環孔材。道管側壁の壁孔は微細な小孔紋で交互状に密にある。道管の穿孔は単一。木部柔組織は周囲状及び翼状で晩材部で目立つ。放射組織は1-2列の背が低い同性である。これらの形質からモクセイ科のトネリコ属の材と同定した。

トネリコ属には温帯～亜寒帯の湿地に多い落葉高木のヤチダモ *F.mandshurica* Rupr. var. *japonica* Maxim.、温帯の山地に多い落葉高木のシオジ *F. platypoda* Oliv.、温帯～暖帯の山野によく見かける落葉小高木のマルバアオダモ *F.s sieboldiana* Blume など多くの種があるが、材構造での種の区別は出来ない。静岡県地方にはヤマトアオダモ *F. longicuspis* Siebold et Zucc.、マルバアオダモ、シオジなどがある。当遺跡出土材はＳＲ０１の堰の縦杭1点である。

25.　モチノキ属　*Ilex*　モチノキ科
図版 IX-25a ～ 25c（プレパラート番号15535）

薄壁多角形の微細な道管が主に放射方向に多数が複合したものが密度低く均一に分布する散孔材で、年輪界は全く目立たない。道管の穿孔は横棒の多い階段状。木部柔組織は目立たない。放射組織は1 ～ 6細胞幅ほどで、単列放射組織は直立細胞のみからなる。多列放射組織の多列部は平伏細胞、上下辺は直立細胞からなり、背が高い。以上の形質からモチノキ科のモチノキ属の材と同定した。

モチノキ属の木属には多数の種があり、静岡県地方には常緑高木になるモチノキ *I. integra* Thunb.、ナナミノキ *I. chinensis* Sims、クロガネモチ *I. rotunda* Thunb. など、常緑小高木のイヌツゲ *I. crenata* Thunb.、ソヨゴ *I. pedunculosa* Miq.、落葉小高木のアオハダ *I. macropoda* Miq. など多数の種があるが個々の種を区別するのは困難である。いずれも材は堅硬緻密で均質、仕上がりが良く器具材などに用いられる。当遺跡出土材はＳＲ０１の堰の杭1点である。

26.　ガマズミ属　*Viburnum*　レンプクソウ科
図版 IX-26a ～ 26c（プレパラート番号15545）

薄壁で断面多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は横棒が多数の階段状である。放射組織は単列と2-4細胞幅ほどの多列がある。単列放射組織は直立細胞のみからなる。多列放射組織の単列部は直立細胞からなり、多列部は平伏細胞からなる。これらの形質からレンプクソウ科（旧スイカズラ科）のガマズミ属の材と同定した。

ガマズミ属には常緑小高木のサンゴジュ *V. odoratissimum* Ker-Gawler var. *awabuki*（K.Koch）Zabel や落葉低木のガマズミ *Viburnum dilatatum* Thunb. など多数の種があるが材構造での識別は困難である。ガマズミの材は硬く緻密で粘りがあり、丸木に樹皮がついたままげんのうの柄などに用いられる。当遺跡出土材はＳＲ０１の堰の杭1点である。

２　ＳＲ０１の堰状遺構の構築材

当遺跡から出土した木材96点の樹種を調べたが、そのうちの82点は自然流路ＳＲ０１の堰状遺構の構築材であり、あとはＳＲ０１から出土したその他の木材５点、ＳＤ０１から出土した杭、曲物、漆椀など６点、その他から出土した漆椀など３点である。この82点の内訳を見ると表２となる。この表では当時の人びとが区別して用いていたわけでは無いと推定されるスダジイとクリ、アカマツとクロマツと二葉松類、クスノキ科ＡとＢ、をそれぞれ合計して示してある。

最も多いのがクリで16点、ついでシイ類が14点ある。そしてクスノキ科が11点、マツ類が８点、サカキ（６点）、アワブキ（５点）、クヌギ節（４点）、シャシャンボ（３点）と続き、エゴノキ属、クマノミズキ、ヤマザクラ（以上２点）、それにウバメガシ以下1点出土の樹種が８種類続く。即ち、82本の構造材に実に20もの樹種群を用いていることになる。クリは縄文時代から現在まで非常よく利用されてきた木材の一つで、特に材質が適していることから土木用材には重用されてきており、当遺構での利用はその表れと言える。アカマツ、クロマツは近世以降に増えた樹種で、特に東海地方では海岸砂丘の緑化と山地丘陵の二次林化で爆発的とも言える増加があった。当遺跡はそれより以前の時代ではあるが、人文活動の活発化により中世でもかなり松林が増加していたことが窺え、水湿に強い材質を活かした土木用材への利用は既に行われていたと言える。

一方、これら２樹種に比肩するほどシイ類の利用が多いが、これは少なくとも材質が土木用材に適していたからとは言いがたい。シイ類は腐朽しやすく、また水湿に強いとは言えないので土木用材には不向きである。それにもかかわらず、少なからず使われたのは身近に豊富に生育していたからと考えるのが妥当だろう。そして、クスノキ科、サカキ（６点）、アワブキ、クヌギ節、シャシャンボと続く実に様々な樹種はいずれもが農村内外や農家廻り、そして近くの里山に普通に生えている、多くは「雑木」である。これはこの堰状遺構が、きちんとした土木水利計画に基づいて建設されたものでは無く、遺跡周辺の人びとが水利のために手近にある樹木を伐りだして作った簡便な施設であったことを思わせる。それにしても実に多様な木材を利用していることに改めて驚く。

表１　海戸田遺跡出土木製品の樹種１

No.	プレパラートNo.	取上番号	挿図番号	樹種	細別	推定時期	調査区	遺構	層位	備考
1	15515	TKT216	25-24	ケヤキ	漆椀	鎌倉時代	３区	SD01	遺構第３層	
2	15529	TKT219		アワブキ	杭	鎌倉時代	３区	SD01	遺構第３層	
3	15474	TKT226	25-27	イヌマキ属	整形板	鎌倉時代	３区	SD01	遺構第３層	
4	15512	TKT227	25-26	スギ	曲物	鎌倉時代	３区	SD01	遺構第３層	
5	15507	TKT280	25-25	スギ	農具の一部？	鎌倉時代	３区	SD01	遺構第３層	
6	15527	TKT281		アワブキ	杭	鎌倉時代	３区	SD01	遺構第３層	
7	15517	TKT369		ヌルデ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	試掘坑北壁杭
8	15569	TKT371		クスノキ科Ｂ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
9	15528	TKT372		クヌギ節	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
10	15553	TKT373		アワブキ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
11	15506	TKT374	28-71	クヌギ節	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
12	15502	TKT375	28-72	サカキ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
13	15555	TKT376		二葉松類	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
14	15544	TKT377		ヤマザクラ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
15	15495	TKT378	28-73	クリ	蜜柑割材	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	試掘坑北壁横木
16	15531	TKT379		クヌギ節	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	試掘坑北壁杭
17	15541	TKT381		クリ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
18	15481	TKT382	28-74	クスノキ科Ｂ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
19	15533	TKT386		二葉松類	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
20	15567	TKT391		二葉松類	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
21	15545	TKT392		ガマズミ属	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
22	15516	TKT403	28-69	ケヤキ	漆椀	鎌倉時代	２区	D-8	包含層	
23	15560	TKT424		コジイ	木板	鎌倉時代	２区	D-8	包含層	
24	15568	TKT493		クマノミズキ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	堰前部杭
25	15538	TKT494		スダジイ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
26	15535	TKT495		モチノキ属	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
27	15479	TKT496	28-75	アワブキ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
28	15484	TKT497	28-76	アワブキ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
29	15487	TKT498	28-77	クスノキ科Ａ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
30	15488	TKT499	28-78	クスノキ科Ａ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
31	15505	TKT500	28-79	ネジキ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
32	15493	TKT501	28-80	クスノキ科Ａ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
33	15520	TKT502		クスノキ科Ａ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
34	15521	TKT503		クスノキ科Ａ	杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
35	15508	TKT562	28-81	クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	堰中央部杭

表２　海戸田遺跡出土木材の樹種２

No.	プレパラートNo.	取上番号	挿図番号	樹種	細別	推定時期	調査区	遺構	層位	備考
36	15562	TKT563		クマノミズキ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	堰中央部杭
37	15558	TKT564		クヌギ節	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
38	15509	TKT565	28-82	シャシャンボ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
39	15519	TKT566	29-83	スダジイ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
40	15494	TKT567		クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
41	15548	TKT568		アカマツ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
42	15489	TKT569	29-84	トネリコ属	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
43	15513	TKT570	29-85	クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
44	15550	TKT571		サカキ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
45	15565	TKT573		二葉松類	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
46	15511	TKT575	29-86	スダジイ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
47	15539	TKT576		エゴノキ属	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
48	15564	TKT577		エゴノキ属	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
49	15492	TKT577	29-87	クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
50	15525	TKT578		シャシャンボ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
51	15478	TKT579	29-88	スダジイ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
52	15542	TKT580		クスノキ科Ａ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
53	15526	TKT581		クスノキ科Ａ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
54	15504	TKT582	29-89	クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
55	15486	TKT583	29-90	サカキ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
56	15547	TKT588		クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
57	15557	TKT589		スダジイ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
58	15514	TKT590	28-70	スギ	板状製品	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
59	15532	TKT591		コナラ節	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
60	15523	TKT592		クロマツ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
61	15549	TKT594		クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
62	15546	TKT595		クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
63	15497	TKT596	29-91	コジイ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
64	15499	TKT597	29-92	クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
65	15566	TKT598		サカキ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
66	15563	TKT599		ウバメガシ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
67	15551	TKT600		コジイ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
68	15522	TKT601		ヤナギ属	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
69	15554	TKT602		クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
70	15552	TKT603		クロマツ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
71	15498	TKT604	29-93	二葉松類	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
72	15561	TKT605		サカキ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
73	15536	TKT636		ハゼノキ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
74	15524	TKT637		サカキ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
75	15530	TKT638		コジイ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
76	15518	TKT639		コジイ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
77	15534	TKT640		コジイ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
78	15475	TKT641	29-94	クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
79	15477	TKT642	30-95	クスノキ科Ａ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
80	15476	TKT643	30-96	アワブキ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
81	15480	TKT644	30-97	スダジイ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
82	15483	TKT645	30-99	クスノキ科Ｂ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
83	15500	TKT646	30-98	クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
84	15490	TKT648	30-100	スダジイ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
85	15496	TKT649	30-101	クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
86	15485	TKT650	30-102	スダジイ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
87	15501	TKT651	30-103	コジイ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
88	15540	TKT652		クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
89	15482	TKT653	30-104	ヤマザクラ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
90	15491	TKT654	30-105	クリ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
91	15503	TKT655	30-106	シャシャンボ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
92	15510	TKT656	30-107	アワブキ	縦杭	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	同上
93	15537	TKT663		ヤナギ属	杭	鎌倉時代？	２区	C-9	包含層	
94	15556	TKT665		イヌマキ属	木片	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	
95	15559	TKT666		イヌマキ属	木片	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	
96	15543	TKT667		ヤナギ属	木片	鎌倉時代	２区	SR01	遺構第１層	

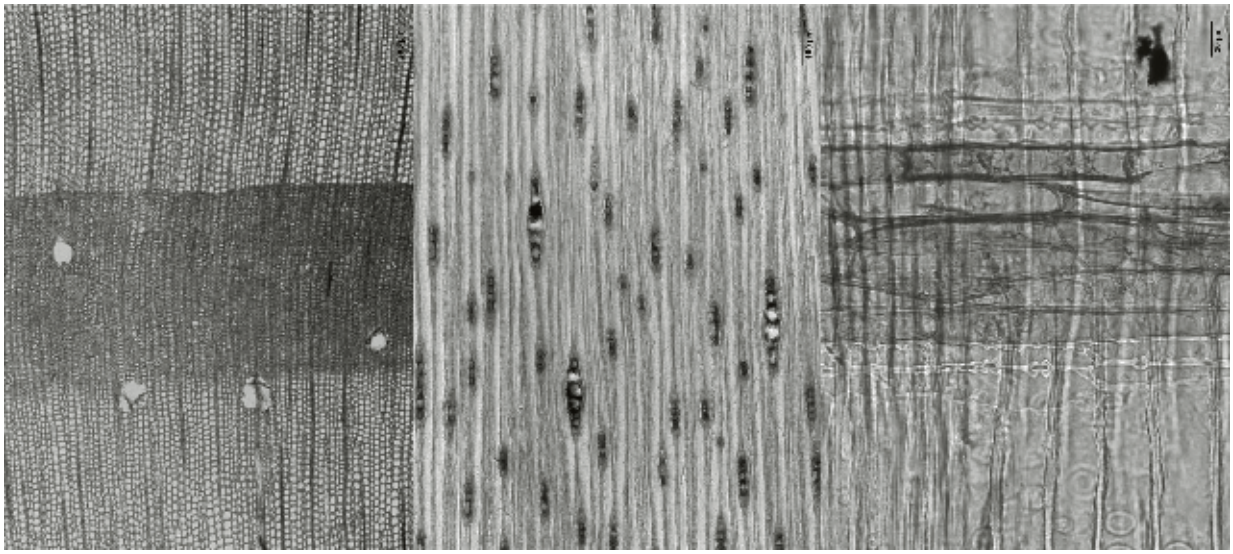
表３　ＳＲ０１の堰状遺構の構築材一覧

※ＳＲ０１西試掘坑北壁の杭を含む

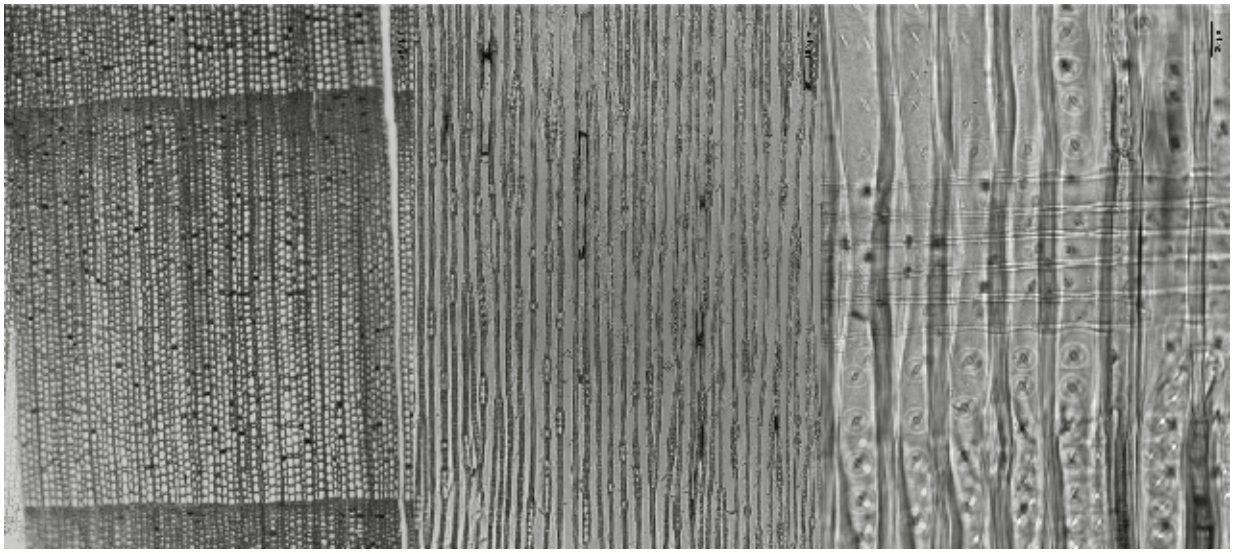
樹種名	縦杭	杭	合計
クリ	15	1	16
スダジイ＋コジイ	13	1	14
クスノキ科 A+B	4	7	11
松類	5	3	8
サカキ	5	1	6
アワブキ	2	3	5
クヌギ節	1	3	4
シャシャンボ	3		3
エゴノキ属	2		2
クマノミズキ	1	1	2
ヤマザクラ	1	1	2
ウバメガシ	1		1
ガマズミ属		1	1
コナラ節	1		1
トネリコ属	1		1
ヌルデ		1	1
ネジキ		1	1
ハゼノキ	1		1
モチノキ属		1	1
ヤナギ属	1		1
総計	57	25	82

写真図版Ⅰ

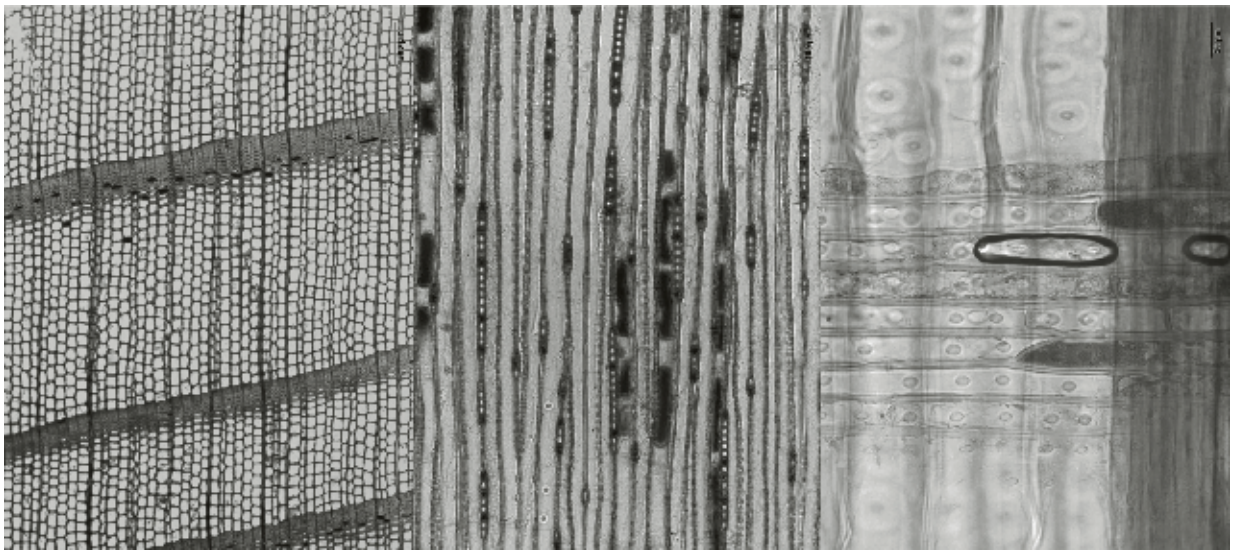
1a. アカマツ　15548　木口× 30.　　1b. 同　板目× 60.　　1c. 同　柾目× 240.



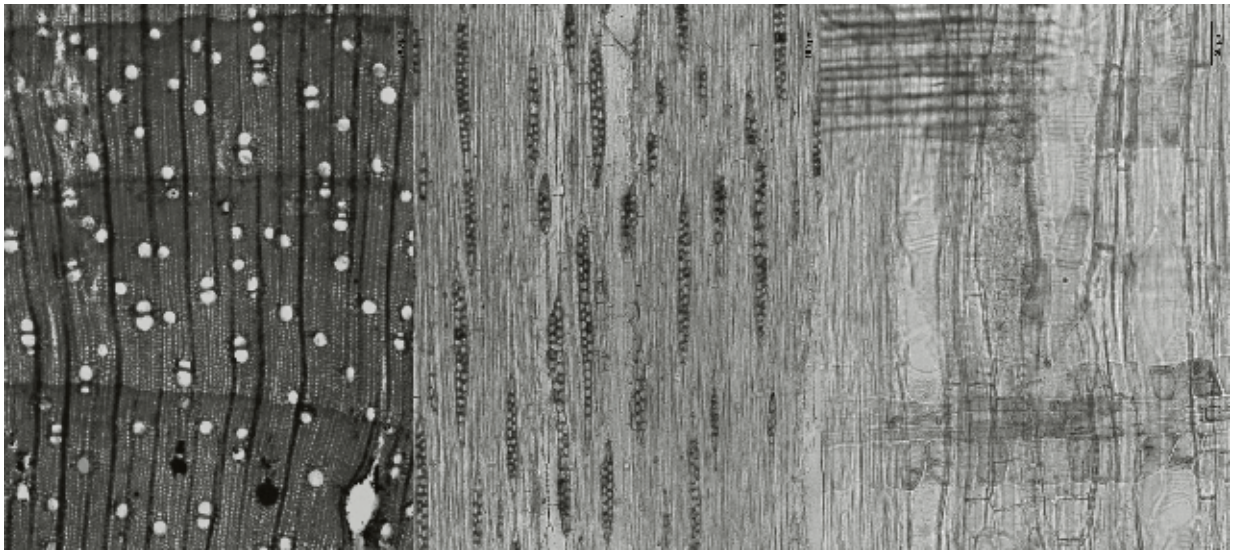
2a. クロマツ　15552　木口× 30.　　2b. 同　板目× 60.　　2c. 同　柾目× 240.



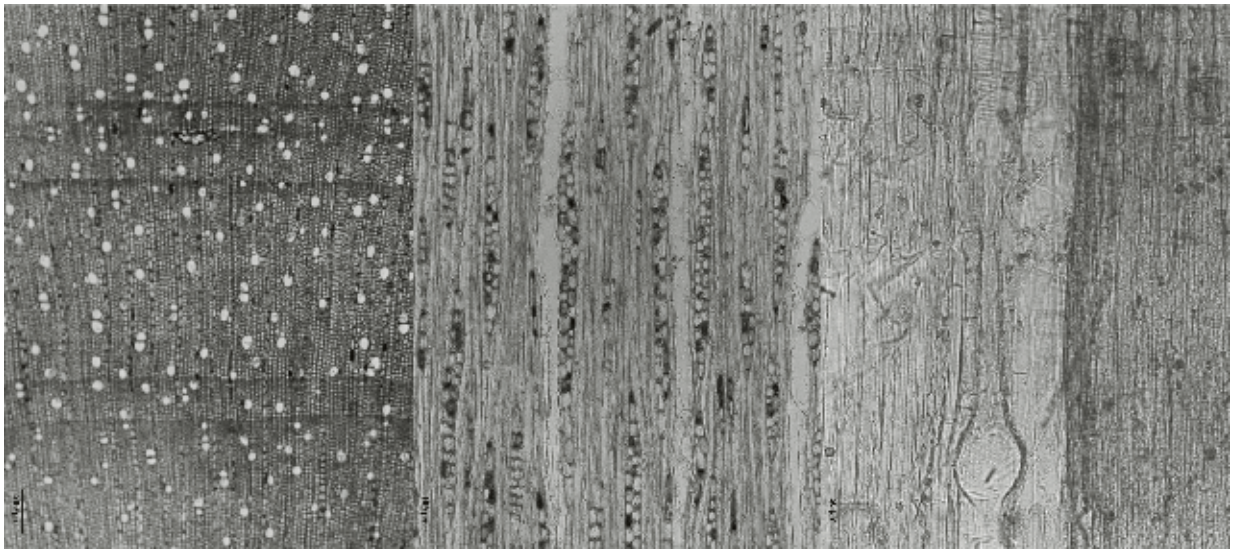
3a. イヌマキ属　15474　木口× 30.　　3b. 同　板目× 60.　　3c. 同　柾目× 240.



4a. スギ　15507　木口× 30.　　4b. 同　板目× 60.　　4c. 同　柾目× 240.

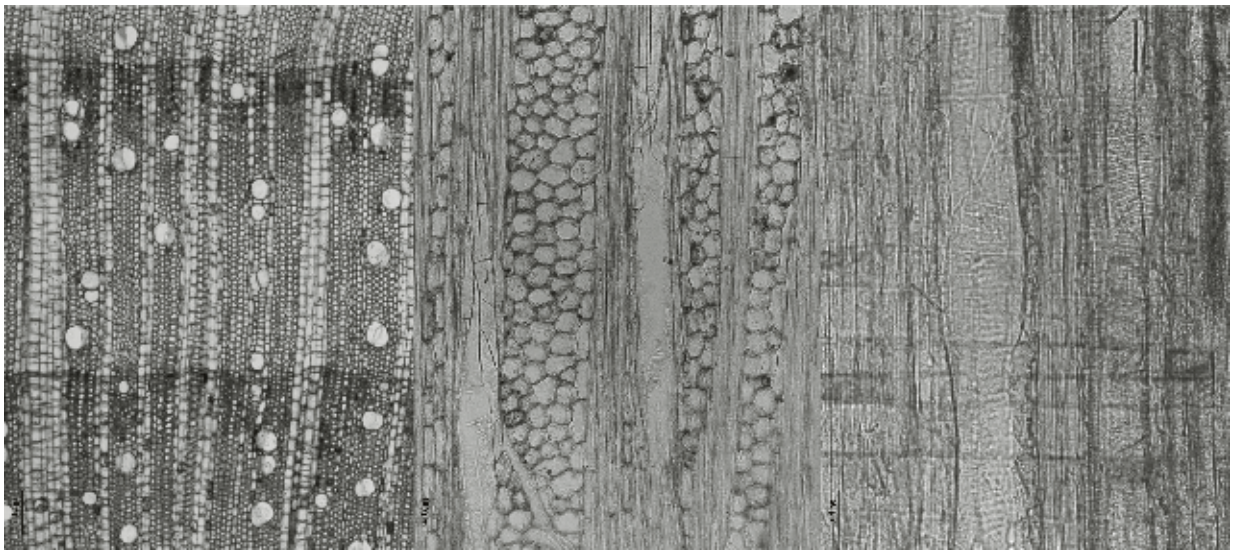


5a. クスノキ科 A 15520 木口× 30.　5b. 同　板目× 60.　　5c. 同　柾目× 120.

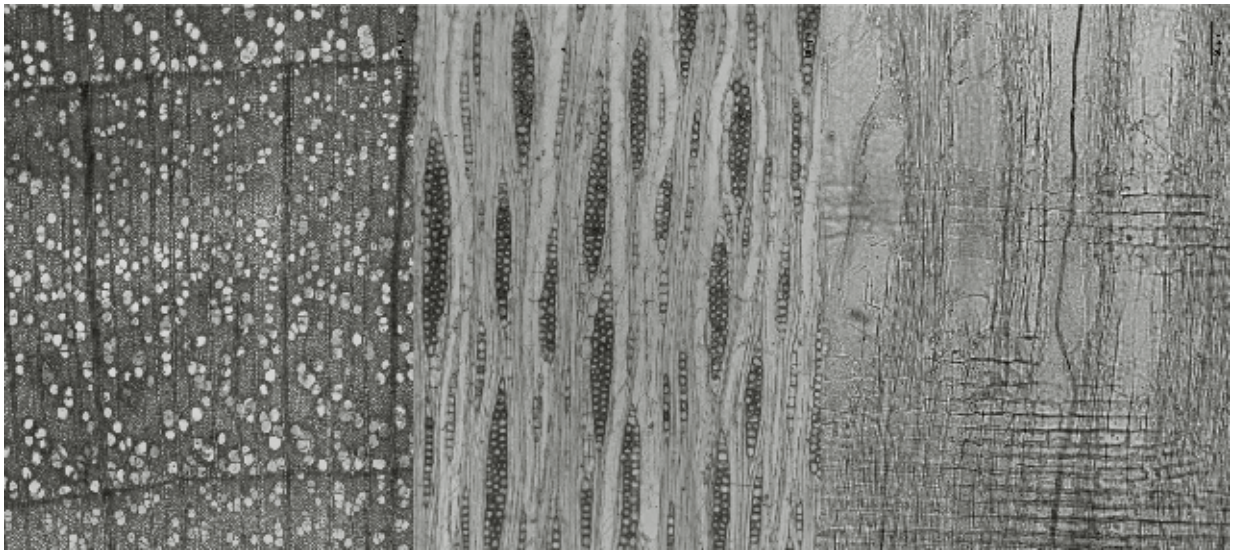


6a. クスノキ科 B 15481 木口× 30.　6b. 同　板目× 60.　　6c. 同　柾目× 120.

写真図版Ⅲ

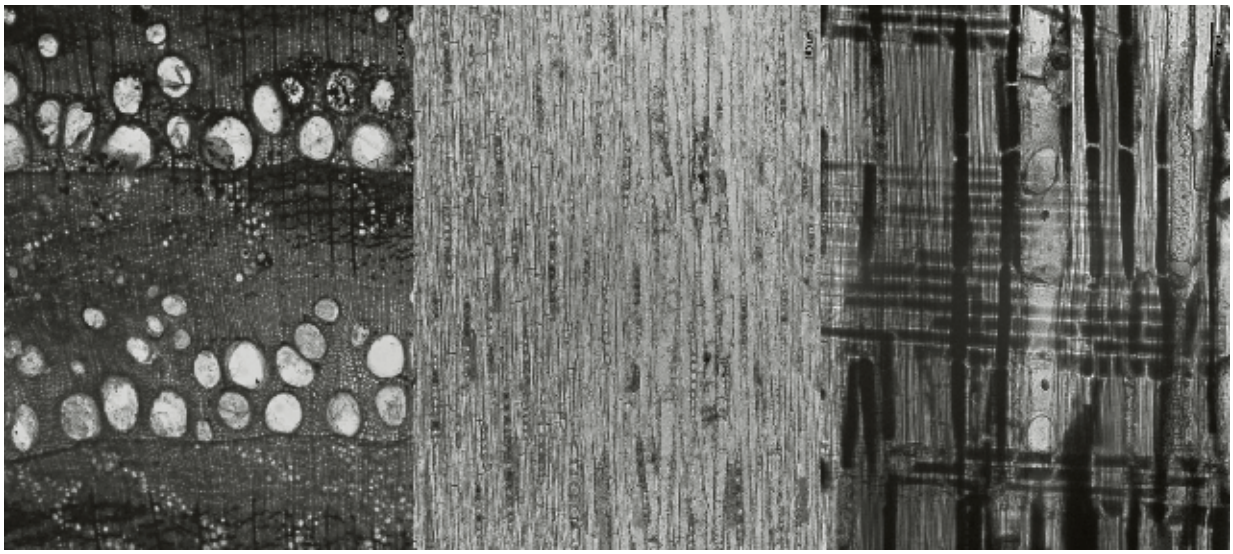


7a. アワブキ　15476　木口× 30.　　7b. 同　板目× 60.　　7c. 同　柾目× 120.



8a. ヤマザクラ　15482　木口× 30.　8b. 同　板目× 60.　　8c. 同　柾目× 120.

9a. ケヤキ　15515　木口× 30.　　9b. 同　板目× 60.　　9c. 同　柾目× 120.



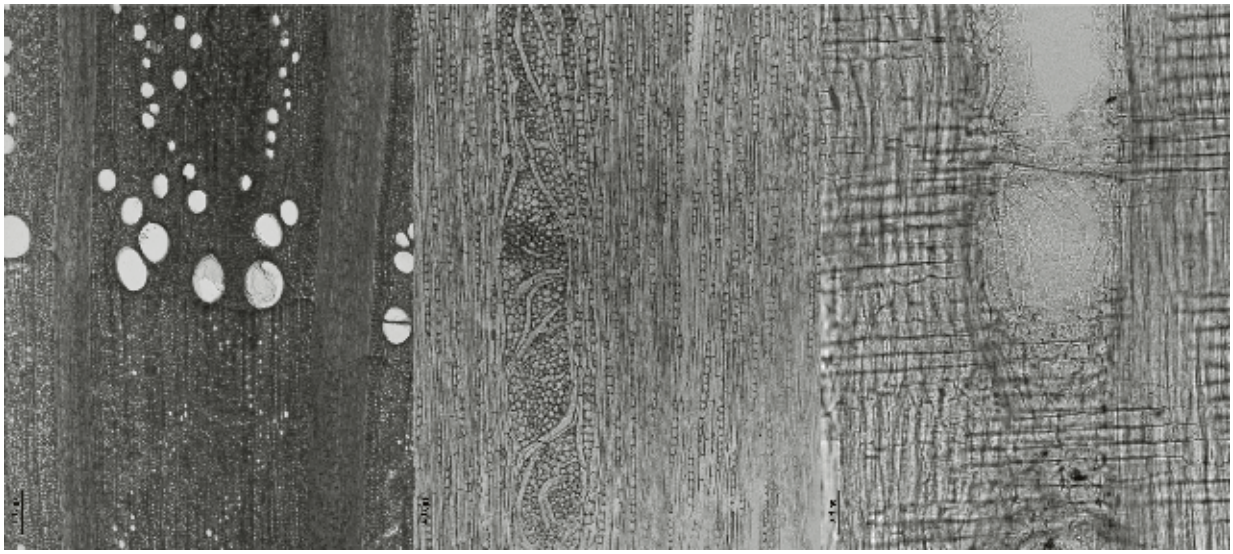
10a. クリ 15541 木口× 30.　10b. 同　板目× 60.　10c. 同　柾目× 120.

11a. コジイ 15518 木口× 30.　11b. 同　板目× 60.　11c. 同　柾目× 120.

12a. スダジイ 15485 木口× 30.　12b. 同　板目× 60.　12c. 同　柾目× 120.

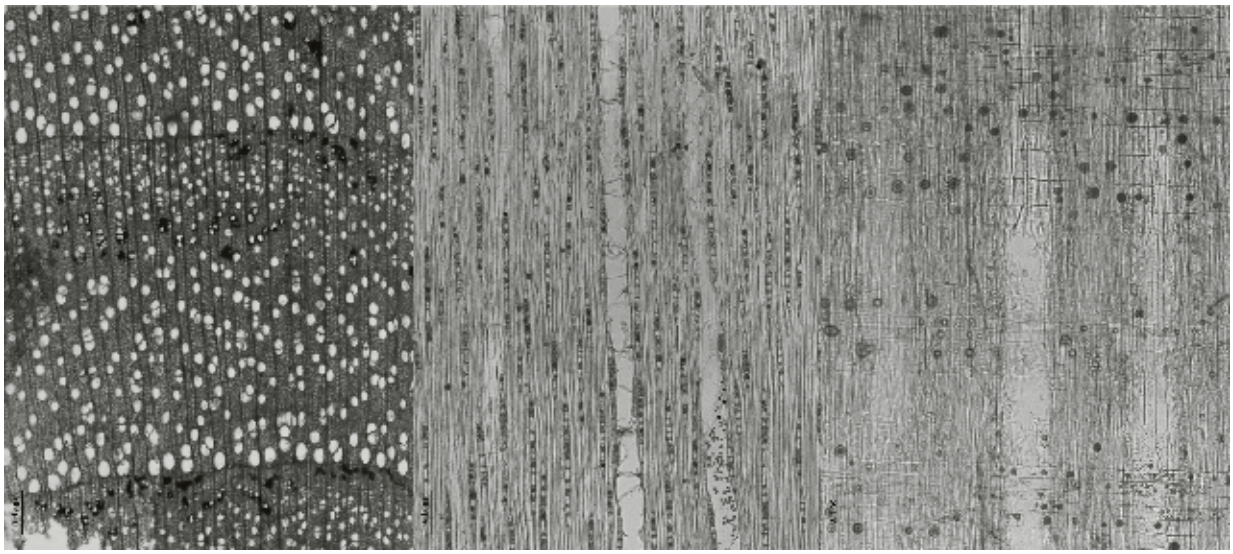
写真図版Ⅴ

13a. クヌギ節　15531　木口× 30.　　13b. 同　板目× 60.　　13c. 同　柾目× 120.

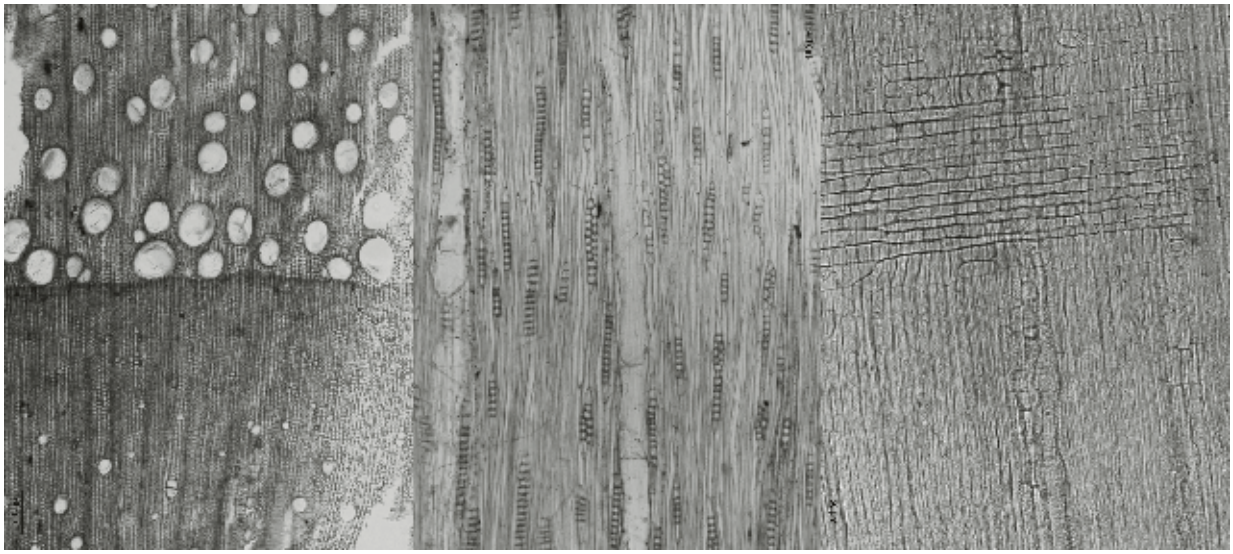


14a. コナラ節　15532　木口× 30.　　14b. 同　板目× 60.　　14c. 同　柾目× 120.

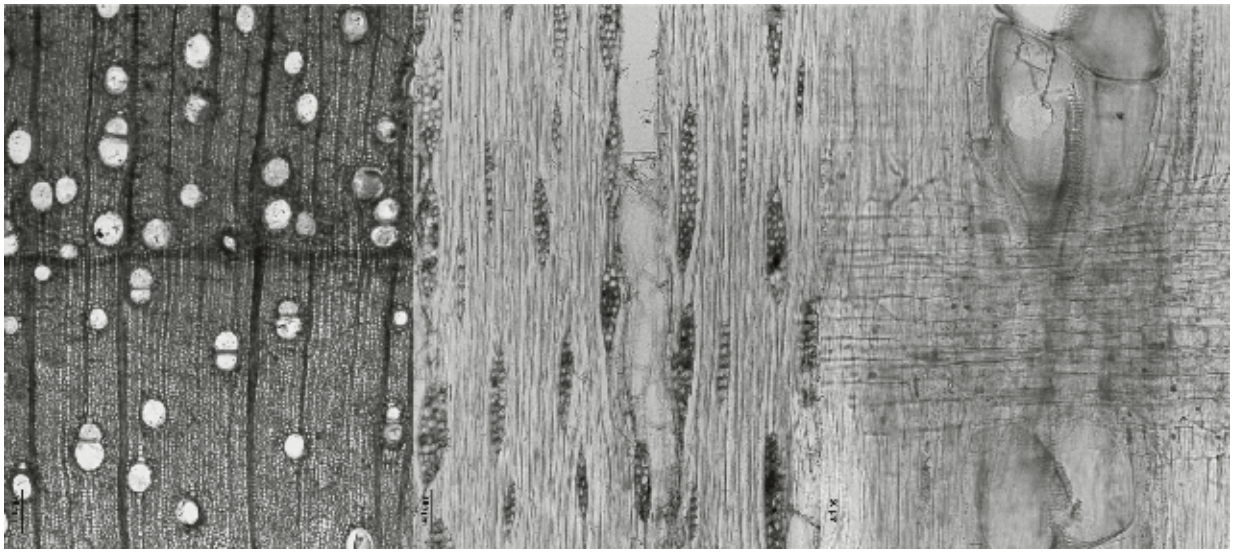
15a. ウバメガシ　15563　木口× 30.　15b. 同　板目× 60.　　15c. 同　柾目× 120.



16a. ヤナギ属　15522　木口× 30.　　16b. 同　板目× 60.　　16c. 同　柾目× 120.

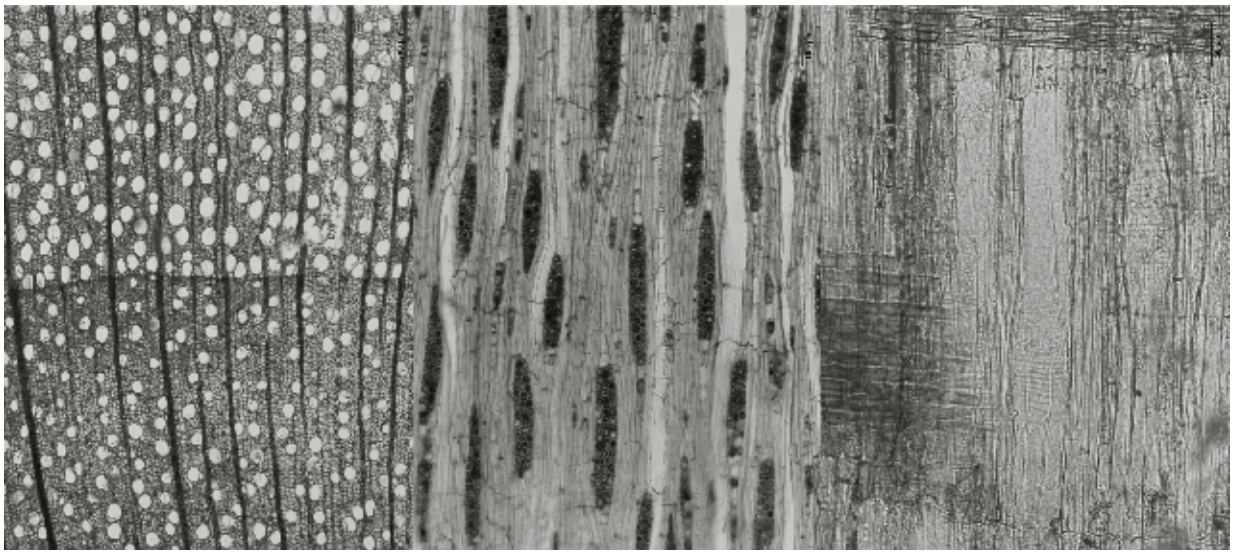


17a. ヌルデ 15517　木口× 30.　　17b. 同　板目× 60.　　17c. 同　柾目× 120.

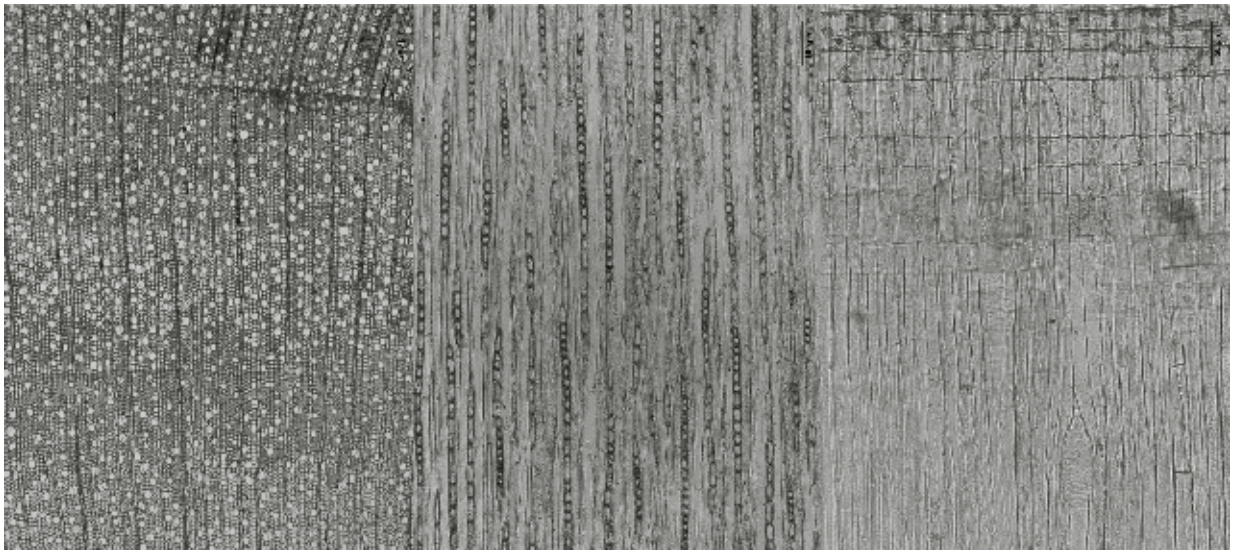


18a. ハゼノキ　15536　木口× 30.　　18b. 同　板目× 60.　　18c. 同　柾目× 120.

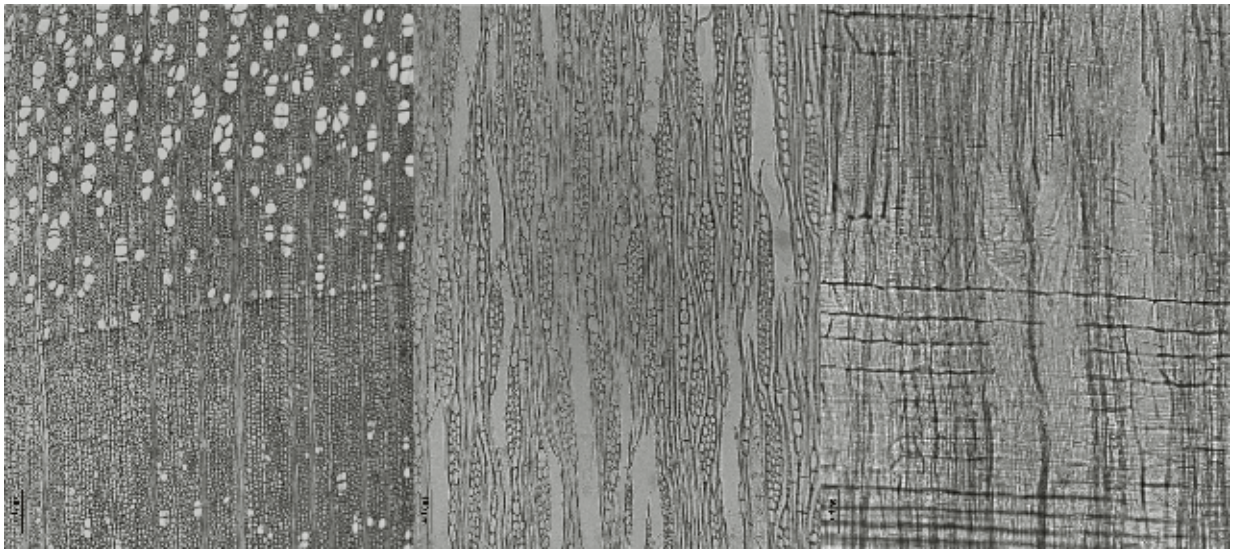
写真図版Ⅶ



19a. クマノミズキ　15562　木口× 30.　19b.　同　板目× 60.　19c.　同　柾目× 120.

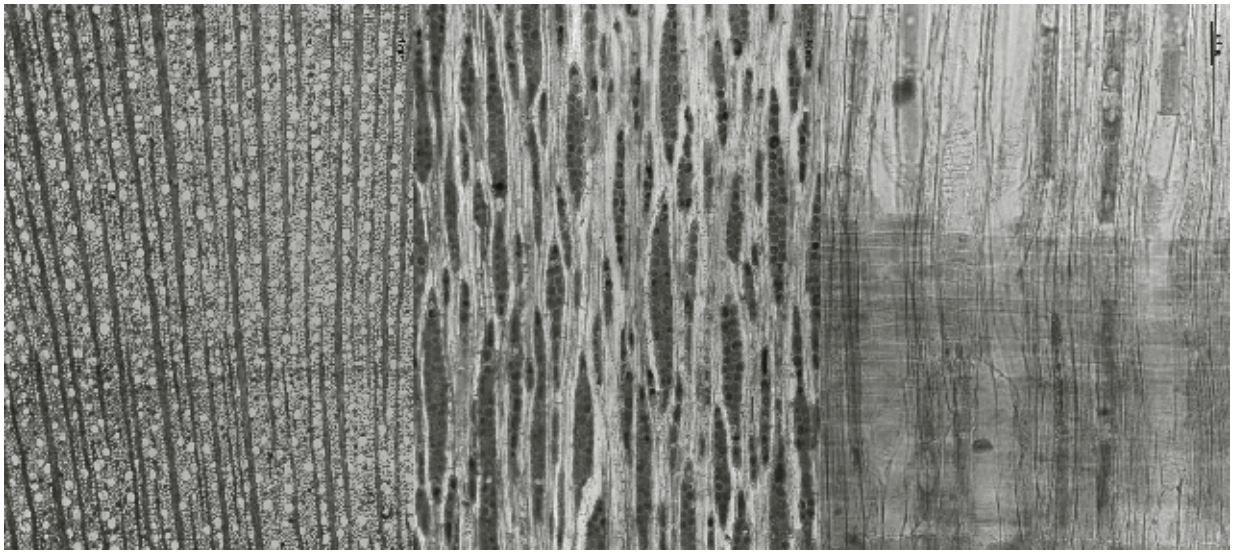


20a. サカキ　15502　木口× 30.　20b.　同　板目× 60.　20c.　同　柾目× 120.

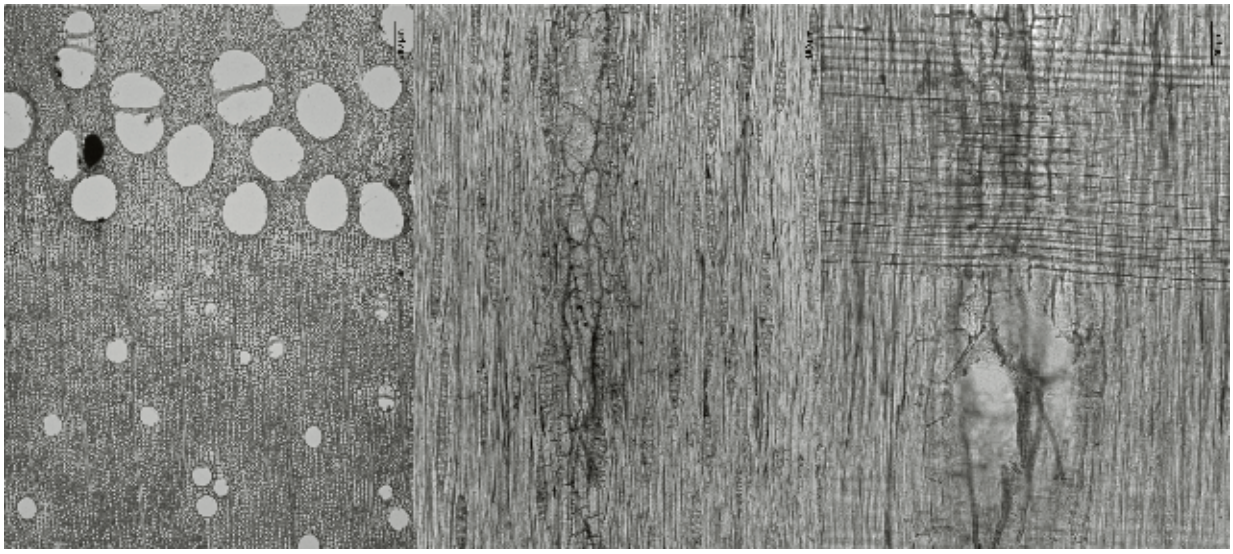


21a. エゴノキ属　15564　木口× 30.　21b.　同　板目× 60.　21c.　同　柾目× 120.

22a. シャシャンボ 15503 木口× 30.　22b. 同　板目× 60.　22c. 同　柾目× 120.

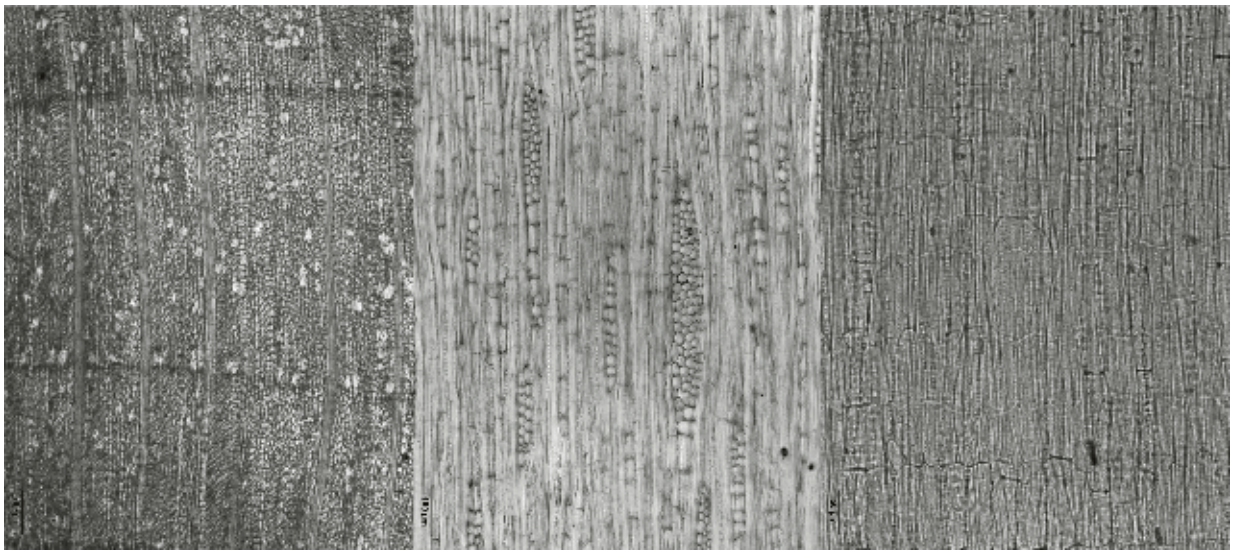


23a. ネジキ 15505 木口× 30.　23b. 同　板目× 60.　23c. 同　柾目× 120.

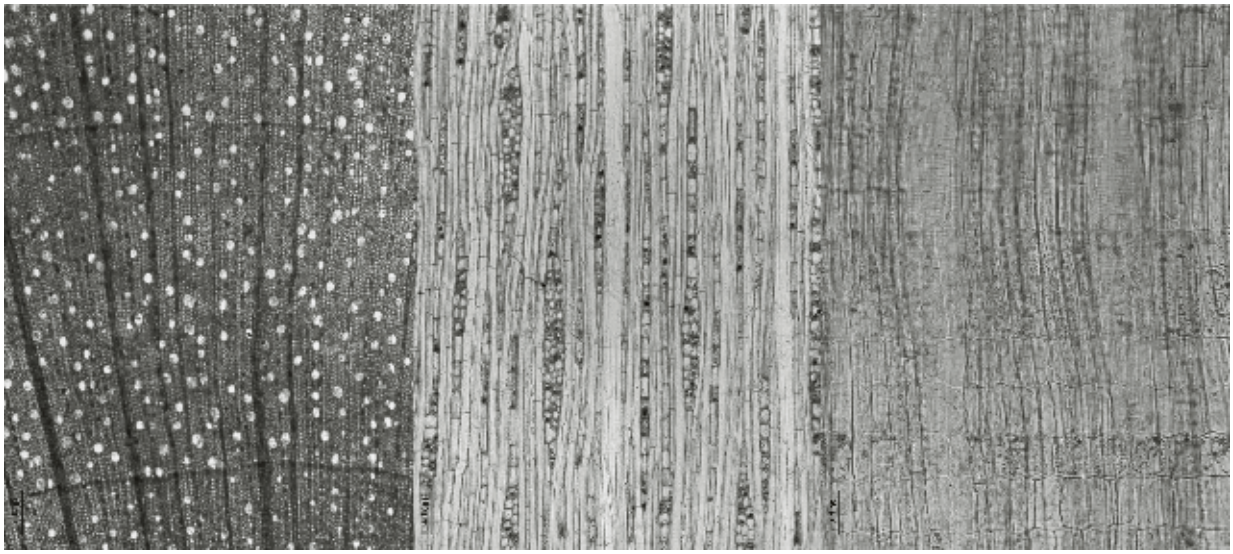


24a. トネリコ属 15486 木口× 30.　24b. 同　板目× 60.　24c. 同　柾目× 120.

写真図版Ⅸ



25a. モチノキ属　15535　木口× 30.　25b. 同　板目× 60.　25c. 同　柾目× 120.



26a. ガマズミ属 15545　木口× 30.　26b. 同　板目× 60.　26c. 同　柾目× 120.

写 真 図 版

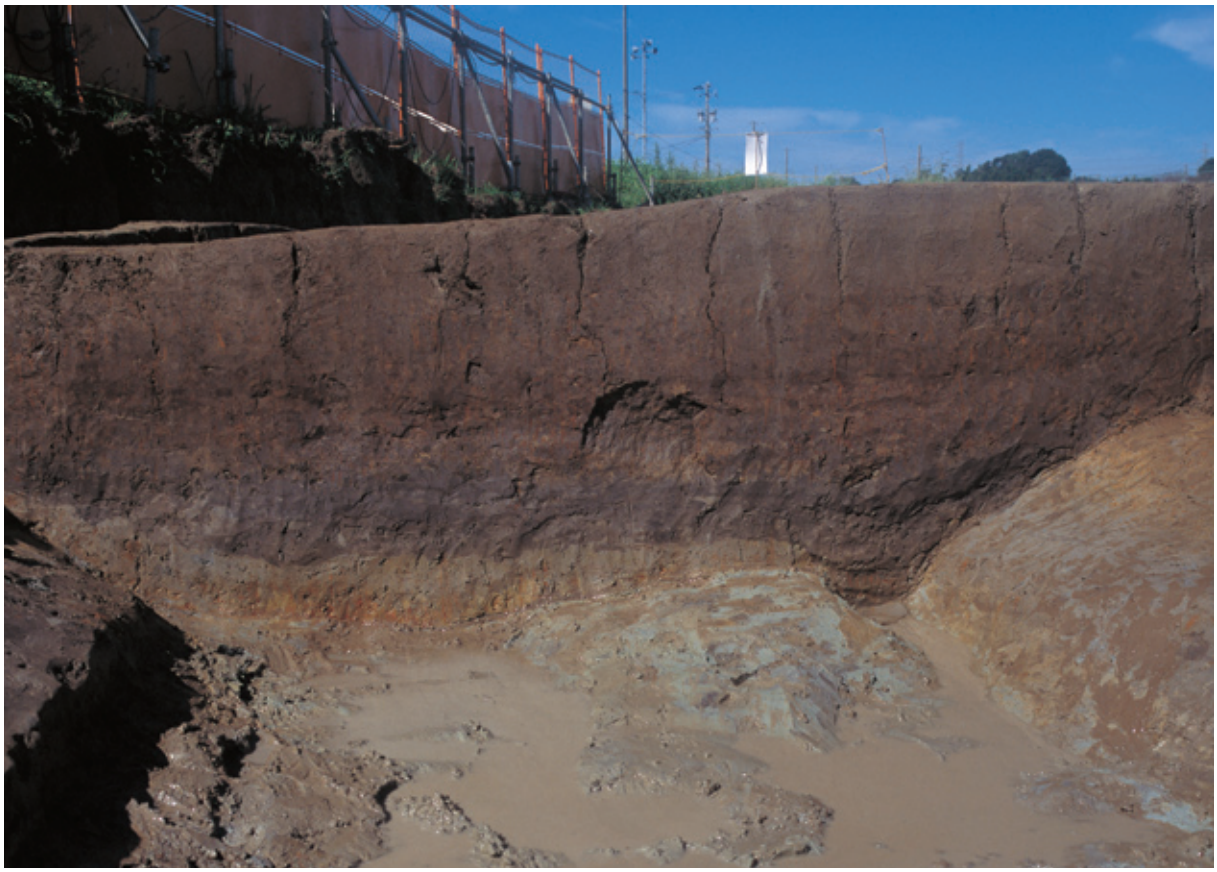
1　海戸田遺跡遠景（南西より）

2　海戸田遺跡遠景（北東より）

図版２

１　３区全景（南西より）

２　３区ＳＤ０１（北東より）



１　３区ＳＤ０１土層堆積状況（東より）

２　３区完掘状況（西より）

図版４

１　２区全景（西より）

２　２区ＳＲ０１（南東より）

１　２区ＳＲ０１堰状遺構（北東より）

２　２区ＳＲ０１堰状遺構（西より）

図版６

１　２区ＳＤ１０（西より）

２　１区ＳＤ１０（西より）

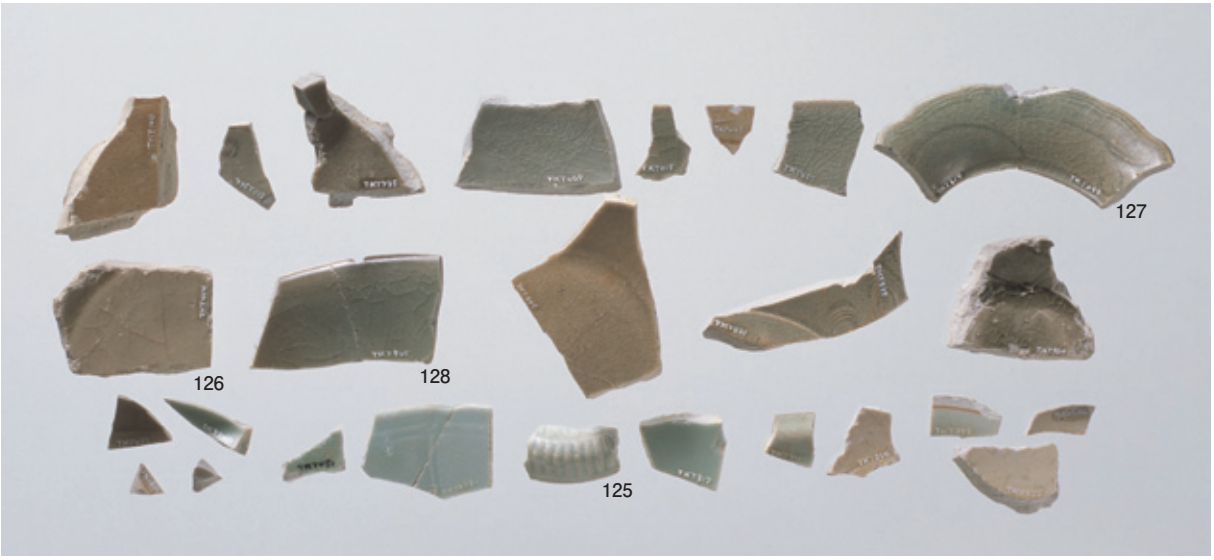
３　１区下層遺構全景（西より）

１　１区全景（南西より）

２　１区ＳＸ０４（焼土遺構）（西より）

図版８

１　２区ＳＲ０１出土山茶碗集合写真



２　上層遺構・包含層出土貿易陶磁器（青磁・青白磁・白磁）

３　上層遺構・包含層出土国内産陶器（瀬戸美濃・常滑・志戸呂）

１　３区ＳＤ０１土器出土状況（北東より）

２　３区ＳＤ０１漆椀出土状況（北東より）

３　３区ＳＤ０３土層断面（南より）

４　３区ＳＤ０４（北東より）

５　３区ＳＤ０６・０７北側石列（南東より）

６　３区ＳＤ０６・０７南側石列（北東より）

７　２区ＳＲ０１土器出土状況（南西より）

８　２区ＳＤ０５土層（北東より）

図版 10

1　２区ＳＲ０１堰状遺構の杭列（東より）

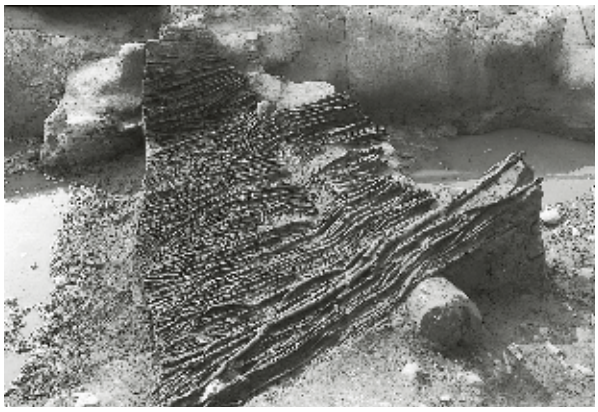
2　２区ＳＲ０１堰状遺構（北より）

3　２区ＳＲ０１堰状遺構（北西より）

4　２区ＳＲ０１堰状遺構（１層目）（東より）

5　２区ＳＲ０１堰状遺構（２層目）（東より）

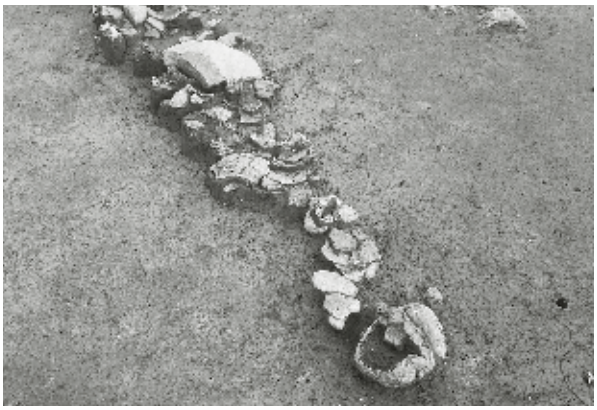
6　２区ＳＲ０１堰状遺構（２層目）（南より）



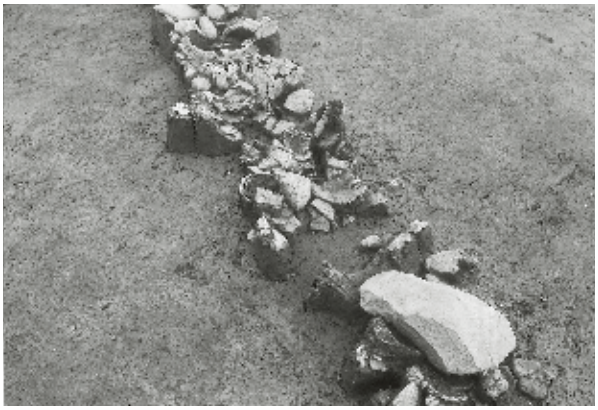
7　２区ＳＲ０１堰状遺構（３層目）（東より）

8　２区ＳＲ０１堰状遺構（３層目）（南より）

1　１区小穴遺構（ＳＰ１７～１９）（東より）



2　２区ＳＤ１０遺物出土状況１（北西より）



3　２区ＳＤ１０遺物出土状況２（北西より）

4　１区ＳＤ１０遺物出土状況３（北より）

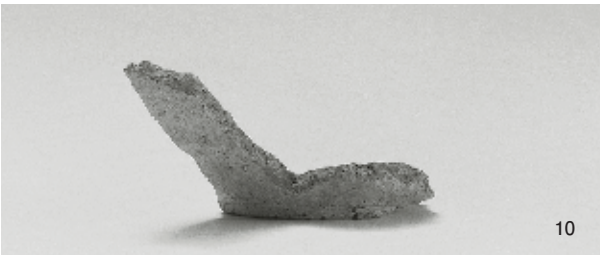
5　１区ＳＸ０１完掘状況（南西より）

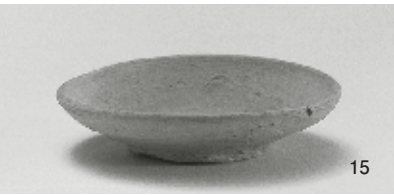
6　１区ＳＤ１２遺物出土状況（北西より）

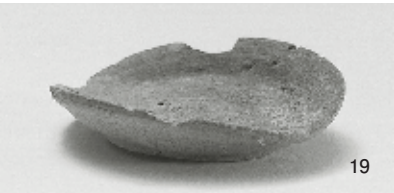
7　１区ＳＤ１３遺物出土状況（北東より）

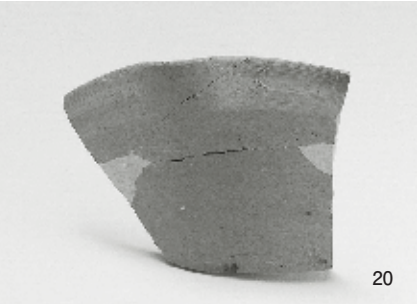
8　１区ＳＸ０３遺物出土状況（南より）

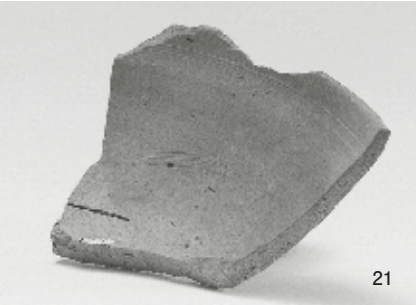
図版 12









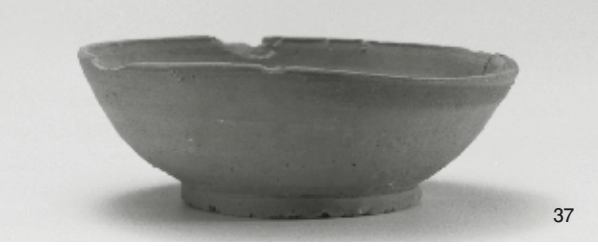


出土遺物１（山茶碗・銭貨）

33

34

35


37

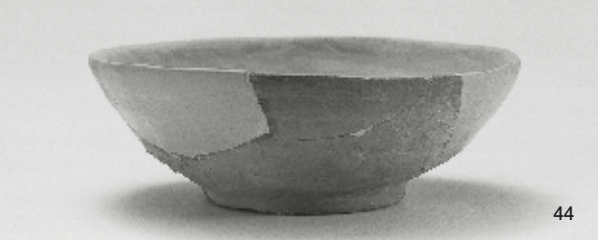
39

40

41

42

43


44

45

46

47

48

出土遺物２（山茶碗）

図版 14

49

50

51

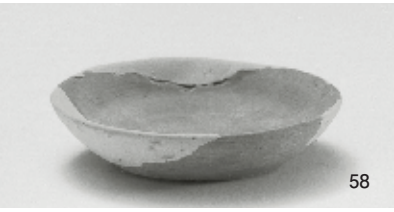
52

53

54

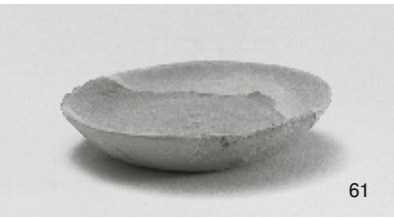
55

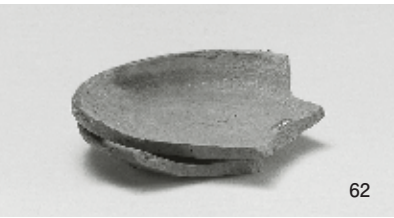
56

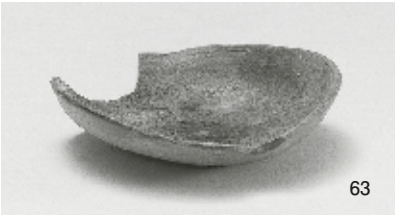

58

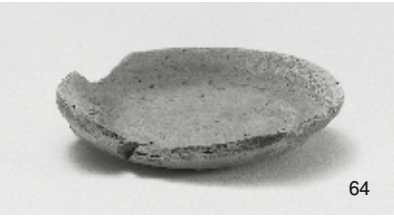
59

60


61

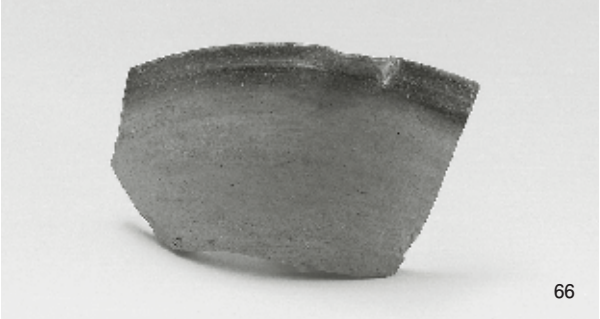

62

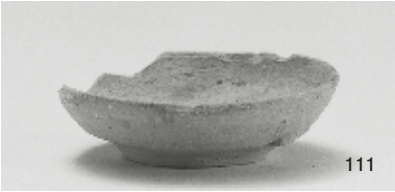

63

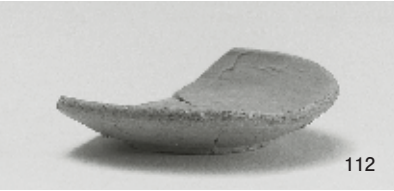

64

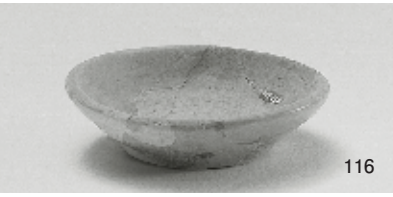
65

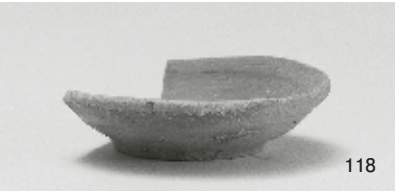
出土遺物３（山茶碗）

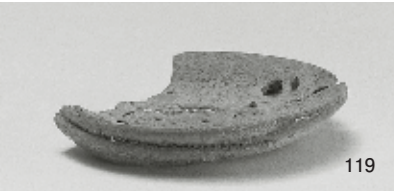


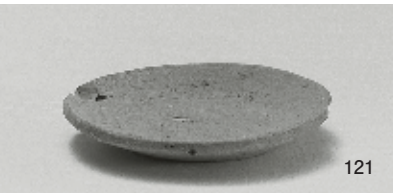


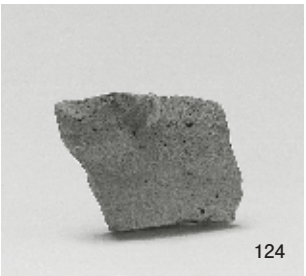


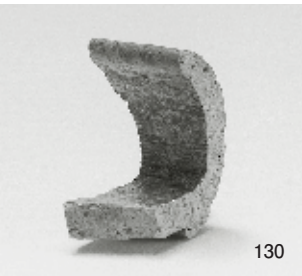


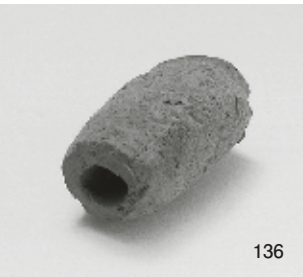


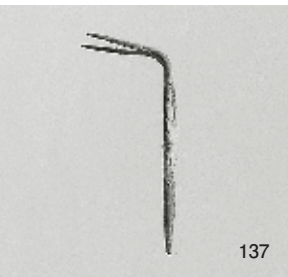






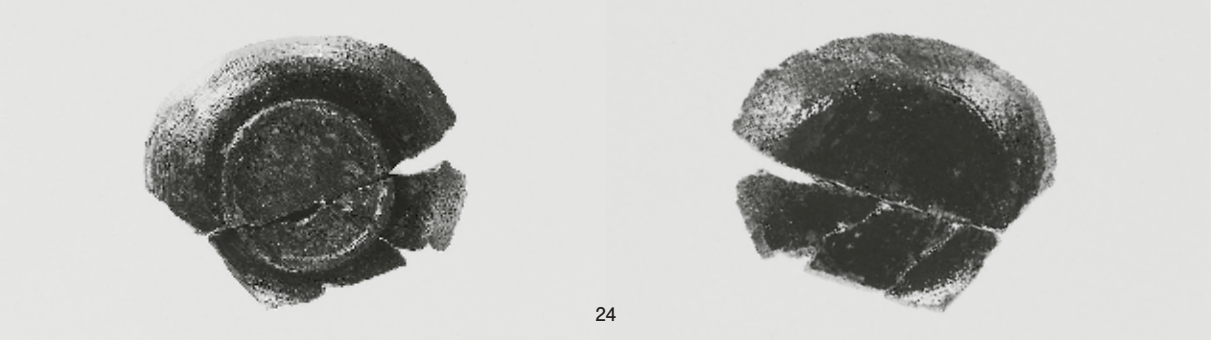


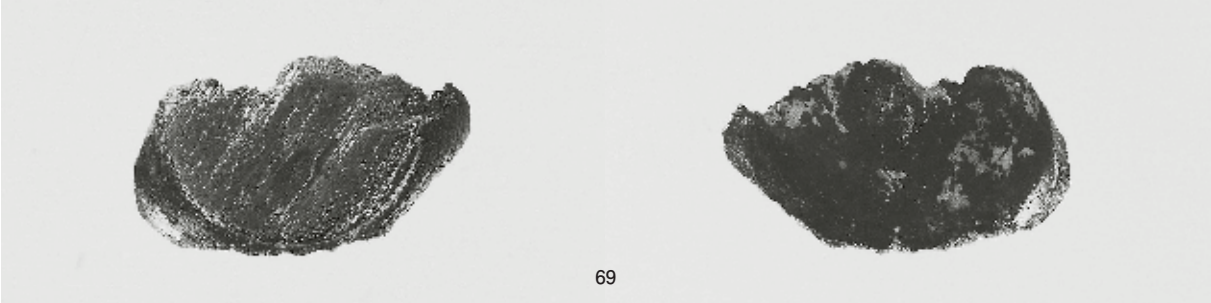


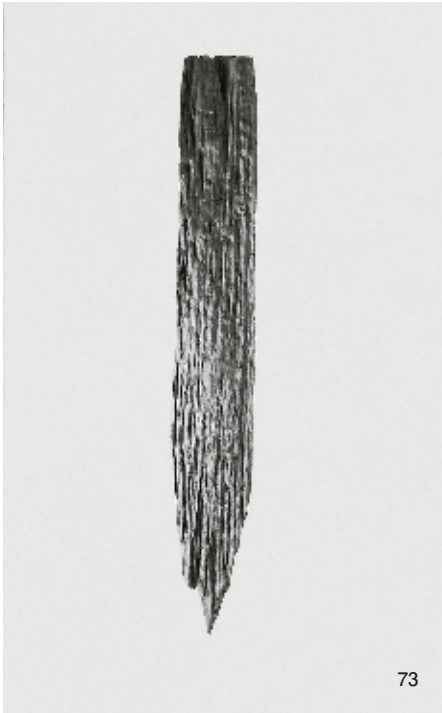


出土遺物４（山茶碗・陶器・土師器・瓦・土錘・銅製品）

図版 16





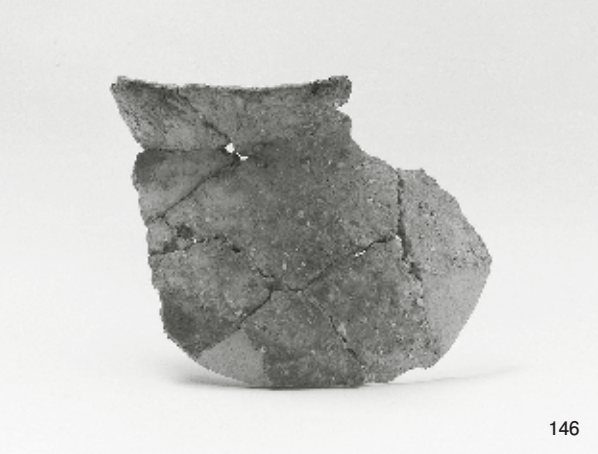


出土遺物５（漆椀・農具・曲物・板状木製品・杭）

出土遺物６（杭）

図版 18

出土遺物７（杭）



出土遺物８（土師器）

図版 20

152

155

156

157

158

159

160

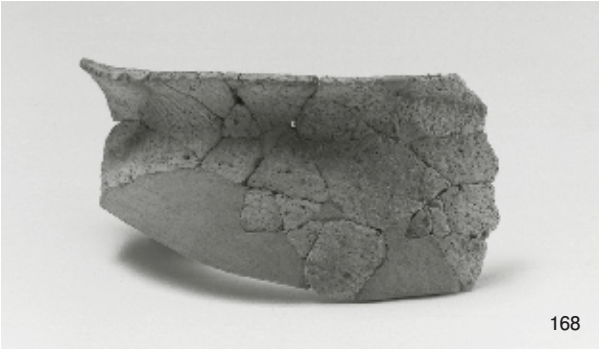
161

出土遺物９（弥生土器）

162

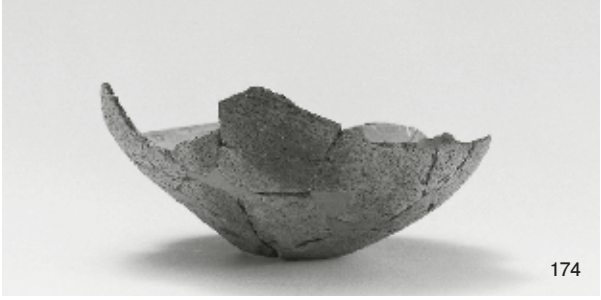
163

167


168

169

171


174

178

175

176

出土遺物 10（弥生土器）

図版 22

179

180

181

182

183

185

190

191

192

193

194

195

出土遺物 11（弥生土器・縄文土器・石器）

報　告　書　抄　録

ふりがな	かいとだいせき
書名	海戸田遺跡
副書名	平成 24・25 年度（主）吉田大東線社会資本整備総合交付金（県道道路改築）及び平成 26 年度（主）吉田大東線防災・安全交付金（県道道路改築）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第 49 集
編著者名	及川　司、岩本　貴、鈴木三男
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒422－8002　静岡県静岡市駿河区谷田23番20号　　TEL　054－262－4261（代）
発行年月日	2015 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
海戸田遺跡（かいとだいせき）	静岡県菊川市吉沢（しずおかけんきくがわしよしざわ）430 － 4 他	22210		34° 46′ 17″	138° 6′ 50″	20120704 ～ 20130325 20130807 ～ 20131031	939㎡ 374㎡	記録保存調査（道路建設）

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	縄文時代		縄文土器、石鏃	下層の包含層から縄文土器・石器が出土。
集落	弥生時代	溝状遺構 3 不明遺構 3	弥生土器	弥生時代後期の菊川式のものである。
集落	古墳時代～ 奈良・平安時代	溝状遺構 3	土師器、須恵器、灰釉陶器	古墳時代の土師器は、磨滅が激しい。
集落・生産地	平安時代末～ 中世	溝状遺構 9 自然流路 1 堰状遺構 1	山茶碗、須恵器、土師器、貿易陶磁（青磁・青白磁・白磁）、国内産陶器（瀬戸美濃・常滑・志戸呂等）、瓦、土錘、漆椀、曲物、杭	水路と思われるＳＤ０１は、出土遺物から見て 13 世紀初頭、自然流路（ＳＲ０１）はやや古く 12 世紀末から 13 世紀初頭。皿山古窯跡群の山茶碗が多く出土。

要　約	上層では平安時代末から鎌倉時代のものと考えられる溝状遺構や自然流路等を検出している。自然流路内には、杭と丸太の横木に細かい枝木を横たえるように組まれた遺構を確認した。横木と枝木は３層に亘って構築されている。その構造から、流路の流れを堰き止め、水位を上げる用途をもった堰と考えられる。その交点が調査区外のため確認はできなかったが、位置関係から見て水路と考えられるＳＤ０１の取水用に設けられたものと考えられる。谷口に位置する沖積地であるこの一帯の土地利用を進めるにあたって、水路を構築し、自然流路から取水、各水田等へ配水していたと考えられる。また、下層からは弥生時代後期の土器と石が多量に出土する溝跡が確認された他、縄文土器や古墳時代から奈良時代の土師器等が出土しており、この一帯での人々の活動の様子を知ることができる。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第49集

海　戸　田　遺　跡

平成24・25年度（主）吉田大東線社会資本整備総合交付金
（県道道路改築）及び平成26年度（主）吉田大東線防災・
安全交付金（県道道路改築）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27年3月31日発行

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL　054-262-4261(代)
FAX　054-262-4266
印　刷　所　株式会社　三創
〒422-8047　静岡県静岡市駿河区中村町166-1
TEL　054-282-4031